
奈阿姫さま

安部由理野

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

奈阿姫さま

【Nコード】

N7933U

【作者名】

安部由理野

【あらすじ】

* あらすじ *

豊臣最後の血を引く16歳の奈阿姫は、出家直前に出奔してしまう。それを許さじと血眼で追う徳川方の若侍森時護^{もりときもり}。

古都鎌倉を舞台に、関が原の合戦から24年後、因縁の二人の切なく哀しい物語です。

ファンタジーやパロディ、コメディではなく、シリアスな物語ですが、所々史実と違う点があることを、お許し下さい。

*この作品は、FC2小説に、自作の「由理野」名義で現在投稿されているものから転載したものです。

第一章 豊臣の姫君 「1」 (前書き)

江戸時代の歴史小説です。鎌倉の近くに住んでいたので一度鎌倉を舞台に時代ものを書きたいと思っていました。真面目すぎるかも知れませんが、基本は切ない恋物語です。登場人物は主役以外は、ほとんどが作者オリジナルです。

第一章 豊臣の姫君 「1」

第一章 豊臣の姫君

「1」

「奈阿姫さまは、豊臣最後の血筋のお方じゃ」

と、秀法尼は何の感情も交えずにそう言った。目の前には、前髪がハラリと色白の額に掛かり、鼻筋が通った賢そうな若者が座っている。彼は微動だにせず、中年過ぎの秀法尼の言葉を聞いていた。

奥まった寺の中庭には、藤棚にむらさきぐさと呼ばれる花が垂れている。

「そなたも知っておろう。あの千姫様の養女になられたおかげで、先代の徳川様から命を助けられ、こちらに来られた。まだ、七歳になったばかりの頃であつたかの……幼いながらも、麗しく凛々しい姫君であつた。

もちろん、奈阿姫さまの血筋は、古くは織田様の血も入っており、そして豊臣の血も混じり、その聡明さは養女といえども侮れず、徳川様は千姫様の命乞いによって仕方なく奈阿姫さまのお命を助けたのじゃな。

けれども、徳川一門にとって、豊臣は憎き敵^{かたき}。将来に一滴たりとも、その血筋を生かすことは出来ぬ。よって、この東慶寺で尼になるように、堅く言いつけられた。そしてわたし達もそれを守った。けれども、奈阿姫さまは年々、この窮屈な世界と逆らえない運命に支配されるのを嫌われる日が来たというものじゃな。よって……昨日、何処かへ出奔なされて、ここには戻っては来ぬわ」

秀法尼は、悔しげにビシリと扇子で我が膝を打った。

「それでは、わたしの役目とは？」

「そうよ。是非とも、奈阿姫を探し出して欲しいのじゃ。多分、16（＊数え年）歳の女子ゆえ、そう遠くには居られまい。何しろこちらには、尼ばかり。あちこち出歩くことさえまならぬし、この事は内密にしたいのでの」

「それで、わたしに……」

「そう。その方は、徳川の息のかかった者だが、誰もそなたのことは知らぬ。先代秀忠様のまた従弟であるのを知っているのは、わたしと前住持だけじゃ。絶対に奈阿姫を逃すわけにはいかぬのじゃ。後世に、豊臣の血を継がせることは断じて出来ぬ！

それはあの姫の為でもある。男と情を通じて、子でも設ければ大変なこととなるう。恐らく、姫もお子も、そしてその相手も命は無かるう」

「ははっ」と若い侍は、両手を突きつつ頭を下げた。

「けれど、なあ、森時護殿^{もりときもり}、うら若い女性じゃ。もしも見つけても手荒なことはせぬように。何しろ千姫様の養女であらせられるゆえな」

「それは承知しております」と時護は答えた。そして胸の内で、ニヤリと微笑んだ。

時護は既に知っていたのだ。奈阿姫のことを。彼は二年前、奈阿姫に会っていた……さる場所で。けれども、目の前の秀法尼はそのことを知らないはずだ。いや、知るはずが無い。

「そなたにとつて、奈阿姫様は、祖父の仇でもあるのは知っておる」と秀法尼はそう言った。

「今を去る慶長の役（関が原の合戦）にて、豊臣の家臣石田の刃に^や倒れし、森聡右衛門の誉れ高き孫がそなたじゃからの。そなたにとつて、奈阿姫殿は憎いはずじゃ。けれど、もうそのような時代は終わった……。遺恨無きように頼むぞ」

「ははっ、わたしはただ徳川様の御為に働く所存でございます」

「そうか。それならば良い。手勢は数人付けよう。狭い鎌倉、おま

けに外に出るには狭く険しい切り通しゆえ、若い女性ではどこにも出られまい」

「分かりましてございます。ところで」と、時護は顔を上げた。

「その豊臣の姫君、ご出奔された本当のわけは？」

「よくは分からぬが」と秀法尼も顔を曇らせた。「多分、本格的に出家されて髪を下ろし、ここの住持になるのがお嫌だったのであるうの」

「おお！ 住持になれるはずでしたか！ がしかし、寺に預けられ、結局はここの住持になるのが当然と仰せでは？」

「いや、まだまだ若い身空で髪を下ろすのは苦しかろう。それに…」

と突然秀法尼はひそひそ声になった。

「男を知らぬ身で、生涯過ごすのが堪えられなかったのではないだろうか。何しろ、お美しい姫であるからして。その上、幾ら徳川の養女であったとしても、あの淀殿を祖母に持つ身、豊臣の血を絶やしたくは無かったに違いない。複雑なお気持ちであったのであろうが、我らはそれに気付かなんだ」

秀法尼は悔しそうに唇を噛んでいたが、やがて切り換えの早い人物らしく、背後の手箱からなにやら取り出して、それを広げて見せた。

「奈阿姫さまの絵姿じゃ。余り上手くは描けておらぬが、参考にはなるう」

「ははっ、拝見奉りまする」

そう言うのと、時護は恭しくその絵姿の紙を手を取った。うら若い、まだ少女のような下膨れの女性の姿があつたが、時護は思わず噴出すところだった。なぜなら、その絵姿は自分の知っている奈阿姫とは似ても似つかなかったからだ。本当の姫はもつとすっきりし、賢さの中にも憂いを秘めた、祖母の淀殿に似ていると言われている通

りの、凛々しく麗しい姿だったからだ。

実際、このような下手糞な絵姿では、奈阿姫を捕らえることなど、とても無理だろう。

「どうしたのじゃ、時護？ 何か不自然なことでも？」

と、目ざとい秀法尼が詰問したので、時護はドキリとする。

「これはしたり。なにゆえ、そのような？」

「そなたの目に、微かな嗤いがあつたような気がしたのじゃ」

「何を仰せでございます。確かに……余り上手い絵とは存知かねましたので」

「そうよの。そなたには絵心がお有りとか、以前秀忠様が申ししておりました。確かに、本物の姫は、もっと麗しゅうございまするが」

そんなことぐらい、分かっている。

時護は心の内で、呟いていた。

あの時は、ちょうど千姫が二番目の夫、本多と別れ、秀忠の庇護のもとに江戸城に居た時だ。時護が呼ばれて千姫の居室に出向いた折のこと、廊下で一人の美少女に出会ったのだった。少女は、かなり身分の高い出らしい服装と佇まいだったが、けれどもなぜか皆その少女のことは見てみぬ振りをしていたのだった。

不思議に感じた時護は、直ぐ近くの者に聞いた。

「あの女人は？ まだうら若い女人だが……」

「はいっ、あのお方は……実は、そのお」

「そんなに大層なお方なのか」

「ちよつとお耳を」

そう言つと、その従者は時護の耳元に近寄り、小声で囁いた。

「千姫様の養女、しかも豊臣家のご息女であらせられます、奈阿姫様と申すお方で」

「なに！？ 豊臣の者だと」

時護は絶句した。そういう噂は聞いてはいたが、この城内に入っているとは、余程のことなのだろうか？

「千姫様は、奈阿姫様を実の娘のように可愛がっておられ、時折鎌倉からお呼びになるのでございます」

「奈阿姫……」

そう呟くと、時護は奈阿姫とすれ違う時、しっかと姫を見つめた。奈阿姫は視線を感じたのか、時護の方をチラッと見つめ、それからさり気なく歩いて行く。その姿を、時護は忘れるはずが無い。

奈阿姫の背までの切り揃えた黒髪が揺れ、香が匂い、そして時護はその凛々しい美しさに打たれてしまったのだった。その奈阿姫を忘れるはずが無いではないか、二度と。

〔2〕

〔2〕

内密な話が終わると、時護は秀法尼の部屋を辞し、東慶寺の門から出た。時護の従者が、何も物言わぬ若き主君を、黙って見つめている中を、時護はただ黙々と歩みを進めて行く。

時護は、思い出していたのだ。その時既に得度していた千姫の私室に通された後、暫くしてそつと足音がしスルスルと襖が開いたのを。そして出てきたのは、先ほどの奈阿姫だった。

「ああ、千代か。ちょうど良い時に参りましたな」

と、千姫はさも愛しそくに言いかけた。政略結婚した豊臣秀頼とは子がなく、寂しい身空であつた千姫は、ことのほか秀頼の側室の一人、小石（おいわ、もしくはこいわ）の方の産んだ奈阿姫と随分仲が良かったらしいと聞くが、それは嘘ではなかつたようだ。

なぜなら、言われた奈阿姫もニコリと微笑んだのだから。

「千代、とは奈阿の幼名でな、わたしは今でも千代と呼んでおるのじゃ」

と千姫は、にこやかに時護に言った。「わたしの名から、“千”を取つたのでな」

「これ、千代。こちらにおわすは、我が父秀忠の又従弟にあらせられる、森時護という者じゃ」

「先ほど、ちらりとお見かけ致しました」

と、可憐な見掛けとは違い、奈阿姫は思いのほかはつきりと答え、静かに頭を下げた。

「徳川様に、まことにご厄介になっておりまする、奈阿と申します」

「本来なら、鎌倉の寺に居る所、わたしがこっそり呼んでおるのじや。姫もそれが楽しみであると思つてな」

「はい、その通りでございます、お母上様」

「千代はまだ齡よわい14にしかならぬゆえ、あの淋しい鎌倉の里では侘
しかろうて」

「そうですか」としか時護は答えられない。時護は、未だに滅び去
ったはずの豊臣家を憎んでいたからだ。その美しき末裔が目の前に
居るのを、ただ平静にはいられない。その上、時護とて、まだ
19歳にしかない若武者であつた。

時護は、奈阿姫に対して、何とも言えない複雑な感情を抱いた。

「ほんに、千代は我が姑であつた、淀殿に似ておるの。我が夫であ
つた秀頼様にも少しは似ておるが、それよりも、御祖母様にもつと」
「千姫様、そのようにこの城の中で豊臣の話をなさつてよろしいの
で!？」

「ああ、それは相すまぬ。そなたの祖父は、慶長の役で亡くなつて
いたというのに」

「いや……そのことはもういいのです。もう22年も前のことです」
こつ言つた時護だが、それは嘘だつた。

時護は、父森定護さだもりから、聡右衛門の悲愴な戦死話をいついつまで
も聞かされ続けていた。聡右衛門さえ戦死せずに名を遂げていたら、
もつと出世し徳川のお役に立てていたものをと、酒の席で幼い時護
とその兄弟達にぐちぐちと愚痴つていたのだ。

「わたしはの、三成が憎い。六条河原で斬首されたが、その首に唾
をしてやったのよ。それでも、その憎しみは晴れぬのじゃ。よつて、
その後、大坂で二度の戦の時、我はその復讐の為にと大いに働いた。
大坂城は紅蓮の炎に包まれ、城下の人々を切り倒し、大いに溜飲を
下げた。」

けれども、先代大御所様（「家康」）は豊臣を根絶やしにはなさら
なかつたのじゃ。男子の国松は殺したが、女子の何とかという姫君
は、孫の千姫様の頼みを聞いてその命を救つてしまった。女はの、

後々に子孫を作るというのに……全く、孫君には甘いお方じゃったのう！」

「幼い姫君を、六条河原で殺すことが出来なかったのではないでしようか」

と時護が聞くと、

「それが甘いのよ！」と父は激怒して、杯を投げつけるのが常だった。

「いつ煮え湯を飲まされるか分からぬ。何しろ、あの淀殿の孫ぞ！
どのような女人になるか分からぬではないか」

「けれども……それも先代大御所様のお考え、お情けだったのでございましょう」

「ふん」と父は本音を漏らした。

「で、その姫君は今どちらに？」

「鎌倉じゃ」と定護は吐き捨てた。「尼になさるらしい」

「それは良いお考えでは？」

「なあ、時護。それは甘いのだ。そなたとて、甘い男に過ぎぬの。」

男と言うものは、麗しい女子にはくらくらししてしまうものじゃ……

……

そう言う父の目は、酩酊状態で淀んでいた。その父の躁言からかもし出す憎しみが、知らず知らず時護を毒していたのかも知れない。

時護は思い出して、身を硬くした。けれども、奈阿姫の可憐さを否定する事だけは、どうしても出来なかった。

「森様は、慶長の役で……」と突如奈阿姫が、まるで時護の気持ちに察していたかのように、視線を時護に向けた。「済まなく思います」

「いや、そんなことは」と時護は、口ごもった。

事実、目の前にちよこんと座る奈阿姫には罪は無い。慶長の役の時
には、まだ奈阿姫は産まれてはいなかった。いや、自分だってまだ

この世には居なかったのだ。

あれからもうかなりの年月が経ったというのに、そして日の本の^{ひのもと}国が徳川の世の下に平穩になったと言うのに、豊臣への恨みと言うものは、消えていなかったのか……。それだけ、大坂の二つの戦火は激しく、人々の心に巢食^{くさ}っているということだろう。そしてその気持ちは、他ならぬ自分にも。

「さ、お二人とも、もう昔の遺恨話は止しましょうぞ。美味しい菓子があるゆえ、ごゆるりとしてくりゃれ」

「お母上様、森様をこちらへ呼んだのは……？」

と奈阿姫が控えめに聞く。そしてチラリと、時護の涼しい目元を見つめた。

「そうじゃった。時護はの、絵が上手いのじゃ。その絵を見せて頂きたいと思うたので」

「はい、その通りでございました。ここにございます」

と時護は、懷から畳んだ和紙を取り出した。花鳥風月と、面白い動物の戯画があり、奈阿姫も覗き込んで一心に見つめている。その横顔に黒髪がかかり、それを白い手で払い除ける仕草がまことに可愛らしく、時護は思わず眺めていた。

そして、いつか描いてみたいという気持ちすら抱いた自分を、恥じた。

「お上手！」と奈阿姫が言った。

「まこと、時護殿は、絵が生き生きしておるの」

千姫もしきりに感心している。そんな奈阿姫を、時護は知らず内に見つめていたのだった。

会ったのはその時一回限り。けれども、時護はなぜか奈阿姫を忘れる事が出来なかった。けれども、思い出すごとに、自分でも説明のつかない複雑な感情を振り払うことは出来なかった。それは、単なる男子が女人に対する興味、隠された憎悪、そして思慕とも何と

もつかないもので、時護はその後自分の煩惱を払うのに、かなりの努力をしたものだ。

けれども、時と言うものは少しずつ忘れ去って行くもので、いつしか朧げなる面影しか脳裏には浮かばなくなっていた。

そんな頃、又しても再び奈阿姫の名前を聞くとはい！そしてそれが、追っ手としての自分に対して命じられた相手であつたとは。

運命は、不思議なものだな。

「それはそうと、時護様、これから如何いたしましょう？」

と従者が聞いてきたので、時護はやっと我に返つた。そして獲物を狙う鷹のように鋭い目付きになると、和やかな思い出を払い除けるように凜として命じたのだつた。

「まず、姫君が以前尋ねたと思われる寺社を探せ。それと、親しい女人をな。出奔されたのが昨日だから、まだそう遠くには行けまい」「ははっ」と従者は頭を下げた。

〔3〕

〔3〕

鎌倉の東に位置する鄙びた武家屋敷に、やんごとない身なりの中年女性が辺りをはばかるように訪ねて来た。その屋敷は彼女を受け入れると、すつと扉を堅く閉める。その女性は、ホツとした安堵の表情を浮かべてみせた。

「葛城殿、如何致したのじゃ？」と奥から老女が出て来た。

「大変でございます、橘様」と葛城と呼ばれた女性は告げた。

「何じゃな、そう急いて」

「実は、奈阿姫様に追っ手がかかりましてございます」

「何じゃと！ それはまあ手早いことじゃな」

「直ぐにでも奈阿姫様を、どちらかへお隠し致しませぬと」

「ここが分かるであろうかの？」と老女は言ったが、葛城は迫った。追っ手は、あの森定護の嫡男、森時護でございますよ。徳川様も、追っ手にはいい者を選んだものですわ。あの森家は代々豊臣を恨んでいる家柄でございますし、先代大御所秀忠様の又従弟でもあらせられる方とか……油断してはなりません。姫様が茶の湯と称して、こちらにしげしげと足を運んだ事は、相手にも知られておるやも知れませぬぞ」

「北条家の縁ゆかりのある我らを！ そのような若造が！」

「お怒りはごもっともではございますが……ことは、姫様のお命が掛かっておりまする」

「黙らっしゃい！ 徳川は我が北条家を豊臣より譲り受けし後、全ての権力を手中にした。そして今度は、豊臣の血を絶やそうとしておるではないか！ わたしは豊臣に味方する者ではないが、若き姫を先代住持がお亡くなりになったからといって、直ぐに髪を下ろせとは、まことに蛇の生殺しも同然。まだ若き16の姫を寺に縛りつ

け、じわじわと豊臣の血を絶やすおつもりのようにやが、わたしはそのような卑劣なやり方には屈せぬぞ」

「けれども、橘様……」

そう葛城がなだめ様と腰を浮かした時、奥の襖がさーっと開き、一人の少女が現れた。あたかも、暗き世に光が燦然と差すかの如くに、その少女の辺りが、際立って色めき輝いて見える。

「あ！ 奈阿姫様！」と二人が同時に言うと、奈阿姫はスタスタとその歩みを進め、近付いた。そして座り込むと、じっと二人を見つめた。

「聞いておりました。葛城の言うことも、又橘の言うこともごもつともじや。わたしは、ここに居てはならぬような気が致します」

「まあ、姫様……わたくしは、そのようなつもりでは……」

「言つな、葛城」と奈阿姫は凜とした声音でたしなめた。

「わたしは、その森という者を知っております」

「えっ!？」と、橘も驚愕の声を上げた。葛城は余りの驚きに無言だ。

「二年前に会いました。江戸城で」

「左様でしたか」と葛城がやつと声を絞り出した。「如何にも、現家光様のお考えのようでござりますな」

「將軍様は多分お知りではないと思います。わたし達は、こっそりとお母上の部屋で会ったのですから。けれども、因果なものですね。今はあの方がこのわたしを追っているとは。」

森時護様は、見たところ、涼しげなお顔にてその中に巧みに隠してはおりましたが、我が豊臣に対する敵意がございました。わたしが、徳川様のご意向で既に豊臣の姓を捨てているというのに、そのような素振りは無く、わたしをあくまでも豊臣の姫として見ておられたのです。

あの方は賢いお方です。そして狐のようにわたしを追いつめ、きつと捕らえるに違いない。あの方を無視してはなりません。お若い

とは言え、怖いお方なのですから」

「姫様」と橘はほとんど泣き出しそうになり、袖でしょぼついた目を拭う。

「だからと言って、ここからどうやってお逃げになりますのか？」

「報国寺に参ります」と奈阿姫は言った。「貞元じょうげん禅師様なら、匿つて下さるかもしれません。少しの間でもいいのです。いずれ、わたしはそこから何とかして、他国へと逃げるつもりです」

「上方でござりまするか？」と葛城が聞くと、奈阿姫は黙ったまま顔を横に振った。

「いいえ、あの土地はわたしにとって余りにも酷い土地でございますから、東国にでも逃げようかと」

奈阿姫の脳裏には、大坂で過ごした幼少時代の楽しい日々や、後の禍々しい戦いくさ、そして腹違いの兄国松との別れの思い出が浮かんでいた。

暫く国許を離れていた腹違いの兄、国松は、後見人の常高院（じようこういん）初はつお市の方の次女「亡き京極正次の妻」と共に大坂城に来た折、この三つ違いの兄妹は最初は互いに顔を見合すばかりだった。

けれども時間と共に、この兄と妹は仲良くなり、城内で時々一緒に遊ぶようになった。二人はなぜか気が合った。城内で生まれ、何の自由なく育った千代姫（奈阿姫）と、少し疎まれていた国松は、そんな境遇のことなどどこ吹く風と戯れていた。

奈阿姫は秘かに兄を慕い、又兄の国松はやつと父秀頼が自分を認めてくれたことにより自信が付き、器量も大きくなった。何より、国松は子供ながら利発で勇敢で、そして誇り高い男の子だったのだ。

けれどもそれも長くは続かなかった。大坂冬の陣と夏の陣という戦が、二人の兄妹に暗い影を落す。

明らかに劣勢だと思われていたこの徳川との最後の戦は、強気の真

田幸村や淀殿、そして秀頼の必死の戦いも空しく、いずれ滅びる運命であった。それは国松と奈阿姫も子供心に感じていた。どちらも、徳川家康の孫千姫の血を分けた子供ではないので、捕らえられると死罪になるかもしれないのだ。

父秀頼と祖母の淀殿は、この二人を別々に逃そうと試みた。別れは辛かった。幼い兄妹は、別々に逃げ落ち、そして兄だけ捕まり、京の六条河原で死罪になったと、奈阿姫はあとで聞かされたのだ。まだ七つだった奈阿姫は、けれども豊臣の末裔の暗い行く末を身をもって感じた。

「わたしはもう二度と、上方には戻りませんまい」と奈阿姫は呟いた。

〔4〕

〔4〕

「弥太郎、それはまことか？」と時護は厳しい声で言った。「もしもそれが偽りならば、間違つたでは済まぬぞ」

「本当でございます。小町通りの裏に、橘家がございます。過去北条家の血を引く由緒正しい家柄と聞き及びますが……その橘の家に奈阿姫殿は、しげしげと通つておられた由。目的は茶の湯の指南ということでしたが、あの家はかねてより、徳川様に恨みのある家とか。そこに居られる橘の姑ゆい由比殿が、姫を庇よっているのではと言ふ噂がありまして」

弥太郎と呼ばれた若い侍が、時護の仮の宿の寺の一室で頭を下げた。

「で、その噂の根拠は？」

「由比殿が、昨日客人を家に呼んだと、その下女が言っております」

「なるほど。下女は若い侍には目が無いと見える。それとも、金子きんすでも渡したか？」

「い、いえ」と弥太郎は顔を赤らめた。まだニキビの消えない、うら若い侍だ。

時護は腕を組んだ。橘家は没落しかかっているとはいえ、鎌倉でも由緒正しい家柄だ。もしもその情報が嘘なら、とんでもなく恥をかく。かと言つて、この狭い鎌倉で若い女人が出かけるところと言え、限られている。

問題は、本当に奈阿姫を庇よっているかどうかだ。客人が別人なら、時護は大恥をかくし、下手をすると今度は何かこちらにお咎めがあるかも知れない。それは、一種の賭けだった。

「この鎌倉で、豊臣の味方をする者は限られておろつ。その一つが橘家というのだな」

「まことに左様で」

「その上、我らが奈阿姫を追っていると、あちらこちらで噂が流布されております。たった2日間だというのにこの有様。まこと鎌倉は狭うございますな」

ともう一人の、痩せた若武者が言った。

「どうなさいますか？ もしも放っておかれますと、豊臣の姫殿は何処かへ逃げおおせるかもしれませぬぞ」

「だから、女子おなごと言えども油断するなと感じていたのだ。大御所様は、情に負けましたな」と、時護はふと可憐な少女の姿の奈阿姫を思い出していた。思い出すと、言い知れない憎しみと、自分では認めたくないもつと別の感情が胸に浮かび、時護は脳裏から奈阿姫の面影を消し去った。

「豊臣の血を絶対に後世に長らえてはならぬ。それが我らの使命よ。だがしかし、姫を捕らえるのは、何も姫を厳しく断罪する為ではない。姫はいずれは住持になると覚悟を決めておられたはず。けれども、こんなに早く自分がその重責になるとは、思っていなかったに違いない。

あの東慶寺の前住持が亡くなられた後は、もつと別の経験あるお方が住持になられるはずであった。それが、うら若き奈阿姫が指名されたという事は、これは何を意味するのか。それは」

そこまで言うつと、時護は暫し黙り込んだ。

「家光様は、案外奈阿姫を危険視しているということかも知れぬ。若い女性とは言え、奈阿姫を担ぎ出して、豊臣家を再興させようとしている輩は、多分今でも多いのだな」

と時護は続けた。「何年経とうと、豊臣の徳川に対する怨念は消えぬのだ」

「あの戦は酷うござったようで、我が父もよく思い出話を致します」

と、弥太郎が遠くを見るように続けた。

「はてさて、橘家にはどう接すればいいのdarou?」
と時護は呟く。

「今晚中にも、押し入れば如何かと」ともう一人の方が強気に出た。
「卑しくも我らは徳川様のご意向で動いて居る者。橘家と言えども、
我らを通さないわけにはいくまいて」

「あその由比殿は、お歳ながらはなはだ気が強いお方ですから、
油断は禁物ですぞ」

「そうよの……」

時護は再び腕組みすると、熟考した。時だけが過ぎてゆき、どこ
から寺の鐘が鳴り渡る。もう夕暮れ時だ。

その時、急ぎ足で廊下を駆ける音がしたと思うと、襖が開いた。

「時護様!」と、息急ききつた若侍が、侍りつつ早口で告げた。

「桜井と申す八幡宮近くの武家屋敷に、さる若い女性が裏口から入
ったとか! 桜井家の下男が見ておりまして、わたしにそれを告げ
ました!」

「桜井家!？」と時護は顔を上げた。「余り聞かぬ家じゃな」

「桜井家は宮司を出すほどの家柄でしたが、今は没落ししがない暮
らしに甘んじているとか。けれども、どこから最近金目のものが
入った由。主人の桜井佐ノ介は、今夜こっそり宴を開く予定と聞き
及びました」

「で、その桜井家と奈阿姫との接点は？」と時護が急かすと、その
若侍は自信満々に述べた。

「桜井佐ノ介は、奈阿姫殿の和歌の師匠であられたことがありまし
て。それも、少しでも小銭を稼ぎたいが故に、姫に和歌を指南した
次第。時折、東慶寺に出向く佐ノ介殿を、寺の尼達が見ておりまし
たそうで」

「ふうん？」と時護は目を細めて言いつつ、なかなか返事をしない。

「時護様！ 今すぐにでも、桜井家へ！」とその若侍が言つと、
「いや！ 由比殿の所へ行くべきがお先かと」と弥太郎が遮った。

時護は目を瞑ると、長い睫毛を少し振るわせた。彼にはどちらが
真実か分からなかったし、どちらも違っているような氣もしていた。
けれども、このまま時を無駄にしていけない。幸い、鎌倉を出る
どの切り通しにも、女人は一人も通つてはいないと言つ。

「けれども時護様。奈阿姫様が、舟で海岸から脱出したとはお考え
にならないので？」

と瘦せた若侍がゆつくりと言つ。

「そうか！ 舟もあるな！ 滑川の方からも！」と弥太郎も膝を叩
く。

「どの方法で姫が逃げようとしているのか……残念ながら、わたし
にも確証はないが」

と時護は言つた。

「とりあえず、その桜井の家に向おう！ 弥太郎は、滑川の漁師達
に聴き回れ！」

時護はやつと立ち上がり、太刀を持った。

「何があつても、是が非でも、わたしは姫を捕らえねばならぬ！」

その頃、奈阿姫は橘家の奥間で瓢箪型の障子窓を少しだけ開け、
夕焼け空に雁の一群が飛んで行くのをじつと見つめていた。

「わたしは絶対に尼にはならぬ。そしてあの狐のような、森殿の手
にも掛からぬ！ わたしは必ず逃げなければならぬのじゃ。」

母上（「千姫」）、お許しなされ。わたしはやっぱり徳川の者には
なれませぬ！」

〔5〕

〔5〕

廊下のあちらこちらに、侘しい灯火が灯る夕闇の中、騒がしくその廊下を走る音の直後、由比の部屋に下女が入って来て告げた。

「由比様、先ほど桜井様の所に、森時護とその家来三人が押し入った由、今その下男が告げに参りました！」

それを聞いた橘由比は、ふふふと小気味良く笑った。

「やはり、あの者ども、浅はかな輩と見えますの。我らの仕掛けた罠に嵌るとは！ けれども油断は禁物じゃな。どこかから情報を得ているらしい故な」

「けれども今頃、あの方々は恥をかいておいででしょうね」と下女もつられて笑った。

「とにかく今晚の所は何とかしのいだが、なるべく早く奈阿姫様を報国寺の貞元げんじょうぜんじ禅師の所に送らねばならぬ。わたしが文を書きます。禅師が何とかして下さるであろうが……」

「前途は多難でありますな」と下女も相槌を打った。

橘由比が語ったように、時護と三人の家来達は桜井家に無理やり押し入った。そして桜井家の家人や家来達が驚いて止めるのも聞かず、ずんずん奥まで進んだのだった。

賑やかだが下卑た笑い声が漏れてきている奥の間に走り込むと、やはりそこには桜井佐ノ介と思われる中年の男と、うら若き女人が三隅に置かれてある行灯の光の中に座り、特に佐ノ介はその女人にしなだれかかっていた。前には食い散らかしたような跡があり、徳利も転がっていた。

佐ノ介は目をパチクリして、押し入った若侍達を見上げている。「やはり！」と時護の家来の一人が叫んで、佐ノ介に掴みかかるう

とすると、時護はさつとその逸^{はや}つた家来を押し留めた。

「待て！　そこにいる女人は、姫ではないぞ！」

「ええっ！？」

「よく見るが良い！　姫がこんなはしたない格好をしておるか！

わたしは、奈阿姫を見知っているのだぞ！　その方では断じて無い！　その上、この者の化粧といい着物といい、どう見ても……これは遊女だ！」

驚愕の表情を浮かべていた佐ノ介は、途端に顔を歪めてケタケタと笑い出した。

「まこと、その通りじゃ！　夜も夜に、我が屋敷に侵入するとは無礼極まるぞ！　わたくしが遊女を連れ込んでいたというのは、少々お恥ずかしいが、それがそなた達にとって意味のあることなのかな？　そもそもそなた達、何者なのじゃ！？」

叱責されて青くなつた家来達を一瞥した後、時護は素早く正座すると、両手を畳について深く頭を垂れた。

「我ら、森時護とその家臣達でございます。この度はまことに失礼をば致しました。けれども、これも徳川様のご指示であり、単なる狼藉ではございませんぬ」

「狼藉ではないか！　それとも、そなた達は太うつけか！」と怒りの収まらぬ佐ノ介は怒鳴った。

「森殿と言え、先の大御所様（秀忠）の又従弟であらせられるとか。そうでなければ、こちらが逆に成敗致したいところじゃが、まあ若気の至りと思つて許してしんぜよう」

「はい。まことに相すまぬことでした。それと言うのも、ある女人が逃走致しまして」

「その女人を探しているというのか」

「はい」

「その女人とは？」

「千姫様の養女、奈阿姫様でございます」と時護は顔を上げた。

「ほうお！」と佐ノ介は大仰に驚いて見せた。けれども、勘の鋭い時護には、それがどこか芝居がかっているように見える。

「わたしが東慶寺に和歌をご指南致しておりました、あの姫君か」

「はい、まことにその方でございまする」

「あの方が、逃げたとな！？ 何たる大胆なお方じゃ！」

「大胆……」と時護は思わず鸚鵡返しに言った。脳裏に可憐な少女が浮かんだが、その瞳の奥に潜む、キラリと光るものを少し垣間見た気がした。もう遅いが……。

「ほんに大胆不敵な姫よのう。やはり織田様や太閤殿の血を引いたお方ゆえ、そういうことも出来ようか！ 見た目は、ほんに可愛いと言つか、麗しい女人でしかないのに。それも、まだうら若い」

「は、さようですが、今は徳川様の庇護の元のお方。それなのに、出家直前に出奔なさるとは徳川様へのあてつけか、それともまだ未練があるのか」

「俗世の未練かの？」と佐ノ介は、傍らの遊女を見ながら含み笑いをしている。

「確かに、男子たるもの、あの姫を見ては他の女人が霞んで見えるものじゃな。この遊女すら叶わぬほどに」

「遊女と比較なさるとは！」と突如湧き起こった怒りに我を忘れて時護は怒鳴った。

「卑しくも、豊臣最後の姫。そして千姫様の養女であらせられる方をそのように……」

「分かった分かった。分かり申した」と佐ノ介は呆れたように手を上げた。

「そのような言い方、まことに非礼ではあつた」

非礼だと！？ 何と卑しい奴だ！ こんな家に姫が逃げ込むはずが無いではないか！ 今回は、わたしの思い違いだった。無念だが……。

「こちら是非礼仕りました。どうかご容赦下さいませ」

時護はひたすら頭を下げてはいたものの、この男には吐き気すら覚えていた。

「ふん、若者は血の氣が多いし、間違いも多々ある物じゃ。仕方あるまいて。ではさつさと、退いてくれぬか！」

「はい！ それでは」

「待て！」と佐ノ介は立ち上がるうとした時護を制した。

「は？」

「その姫を捕らえてどうするのじゃ。斬首にでもするのか？ それとも、土牢に監禁でも？ 古の大塔宮護良（いにしえ）のおおとうのみやもりよし」もりなが（親王のように）」

「いえ……まさかそのような」

「余程その姫君が怖いと見えするな、徳川様は。豊臣の血を徹底的に、根絶やしにならなりたいのですかな。ははははは」

時護は屈辱に唇を噛みながら、それでも恭しく下がった。あとの三人の家来達は、見るからにしょんぼりしている。下女達が嫌味な嗤いを漏らしては、通り過ぎるこの四人を見つめていた。

「さ、お早くお戻りをなされませい」と、門を警護する侍も慇懃無礼に述べる中、時護とあとの三人はうらぶれた桜井家を出たのだった。

門外には、月の光が芳しい春の花々を照らしていた。

夜半になっても、橘家の奥間にはゆらゆらと灯火が灯っている。

その側に、落ちつかぬに奈阿姫は座り、脳裏に焼きついていた森時護が、いつ自分の元に襲って来るかもしれないという、どうしようもない不安を抱えていた。

奈阿姫もまた、森時護をはつきりと覚えていた。大坂から逃げて以来思春期まで、ほぼ寺の中で過ごし、会うのは毎日尼達ばかり。時折警護の侍や侍医、それに和尚や指南に来る男達以外、同年齢の少女はおるか、少年にすら滅多に出会ったとの無い淋しい日々を過ごしていたのだ。

時々養母千姫からの文が嬉しく、奈阿姫もまた千姫に文を返していた。けれども退屈な日々の繰り返しは、奈阿姫を時々空しくさせていく。

当時の鎌倉は、北条將軍が居た時とは違い、侘しい田舎町になっていた。何の刺激も無い。それとなく目配りする尼達や、警護の侍達に囲まれ、一応“徳川の姫”として、一見何不自由無く暮らしてはいたが、七歳まで大坂城で煌びやかに暮らしていた様とは大違い。そして月日が経つにつれ、自分は結局俗世では過ごせず、一生寺の住持として生きねばならないと言う事実を知ることになった。それは、自らが、豊臣家最後の血統であることを知っていたからだ。知っていて自分の命を助けてくれた、徳川家の初代家康のご恩は忘れないにしても、歳若い少女にはかなり荷が重い生き様だった。

そんな奈阿姫が、初めてときめいた人、それが二年前に江戸城に呼ばれて、偶然廊下で出会った森時護だったのだ。

侘しい尼寺で、それでも「源氏物語」や「陽炎日記」などの平安

時代の書物に親しんでいた14歳の姫は、“ときめく”という感情がそれでもまだ分かっていなかった。

けれども千姫に会いにうきつきと廊下を歩いていた時に、向こうから来たまだ少年の面影を少し残した若侍にハツとして、一瞬歩みを止めていた。心臓がドキリとし、けれどもそれは甘味な動悸であり、頬が少し火照るのを感じたのだ。

その若侍は、冷たい視線を奈阿姫にチラリと与えただけで、直ぐに通り過ぎて行ったのだが、それが養母の部屋に再び現れるとは思ひもなかった。

きりりとした面立ちだが、自分を見つめる涼やかな瞳は厳しく、ニコリともしない。それがなぜなのかを知ったとき、奈阿姫の心は哀しみに曇った。あくまでも自分を徳川の姫としてではなく、それは豊臣の末裔としか見ていない、冷たい凍れる瞳でしかなかったのだ。

けれども奈阿姫は、自分の運命を嫌と言うほど知っていたので、それに逆らうことはしなかった。もしも、その若武者が森時護ではなかったら、どんなに嬉しいか……。奈阿姫は、思わずその首を垂れて許しを請うしかなかった。

けれども、時護は心から許したわけでは無いだろう、それぐらい聡い奈阿姫には分かっていたのだ。幾ら時護の絵が素晴らしくても、奈阿姫はただつかぬまの時を過ごしたという思い出だけを抱いて、鎌倉へ戻って行ったのだった。二度と会うことは無いと信じて。

けれどもそれは違っていた。今度会うときは、自分は時護の捕虜としてしか会えないのだ。それは奈阿姫にとっては、酷いことだった。いつそ、他の武者から追われたいとも思うほどに。

なぜなら、奈阿姫のときめきは、今も続いているのだから。ときめく相手に捕まるぐらいなら……と奈阿姫の思いは強くなるばかりで、どうしても、逃げたかった。自分の境遇から、徳川から、そして時護からも。

それに、自分が豊臣家を再興したいなどと考えたことは無いのだ。例え、それを望んでいる者が居たとしても。いや、現実には居るらしいのは確かだったが、けれども奈阿姫は自分の意志で逃げたかっただけなのだ。

「時護様、どうかこの千代（奈阿姫の幼名）を追わないで下さいませ。なぜにこのような定めになってしまったのか！ 神も仏も、この現世には居ないのか！ あれほど、日夜精進し、仏に祈っておりますのに、わたしはこれからどうすれば、どこに逃げれば宜しいのでしょうか？」

奈阿姫が崩折れるように畳に手を付いた時のこと、襖が開いて由比が現れた。

「姫様！ あの森と申す者達は、桜井家に押し入ったそうでございますぞ！ けれども、姫様を見つけられず、すごすご戻ったとか！ ほほほ、まことに痛快な出来事ですのお」

「え！？ やはりあの者達は……」

「そうです。今宵はこれで終わったとは言え、森殿は今頃齒噛みして悔しがっておられることでしょうの。けれども明日は分かりませぬ」

由比は座り込んで、奈阿姫の手を取った。

「わたしは貞元禅師に文を書きました。明け方前に、下男に持たせませゆえ、お許しが出たらすぐさま報国寺へいらっしやいませ。あの狐、ヒタヒタとこちらへ参る様子、目に浮かびます。若いとは言え、しつこく恐ろしいお方だと言ったことですので」

「そうですか」

「ですから姫様はこのままここでお休みなさいませ。わたしどもがあなた様をお守りしております。何かありましたら、直ぐにでもこの屋敷の裏手にある、誰も知らぬ塀の羽目板を外せる隠し門がございますので、そこからお一人でお逃げなさいまし。そして、東へと逃げるのでございます」

「ありがたく思います、由比様。もしもわたしを匿ったことが知れたら、あなた様の身に危険が及ぶかも知れないと言うのに」

「なんの。この老いたわたしが出来ることと言えば、そのことぐらいにございます。姫の茶の湯もほんに上手になりましたな。このようにお美しく成長された方が、髪を下ろして住持になれるとは、残念至極でございます。けれども、お輿入れはやはりご無理なのでしようね」

「殿方との婚姻は、もう諦めております」

と奈阿姫は答えた。「それなのに、わたしは思い切りの悪い者でございますわ。寺でしか生きられないと分かっているのに……それなのに、やはりわたしには覚悟が出来てはおりませんでした。本当に情けない女でございますね」

けれども由比はただ黙って、目頭を押さえただけだった。それからやつと途切れ途切れに声を発した。

「いいえ、あなたのようなお方なら、どのようなお人とお輿入れできたでしょうに。ほんに、酷い事でございます」

「もういいのです、由比様」

奈阿姫は、無理に微笑んで見せた。けれども、その時ふと脳裏に浮かんだのが時護であったことが、無性に悔しく感じられたのだ。た。

〔7〕

〔7〕

朝日が障子窓から差し込んできたというのに、時護はずっと目を覚ましていた。

昨晩の悔しさが、脳裏から去らないばかりか、朝が近付くことにその屈辱が増して行き、遂には一睡も出来なかったのだった。

自分の、極めて鋭敏だと自認していた判断が狂い、奈阿姫を捕まえるどころか、すっかり大恥をかき、家名を傷つけてしまったようだ。と言うより、自己陶醉に陥っていた自分の方をこそ恥じ、悔しさが去らない。同時に、二年前に会った、あの可憐な姫が夜叉のように変化して、自分を嘲笑しているように感じたのだ。あの清らかな表面を侮つてはいけない、と時護は肝に命じた。

「愚かしいことよ！ 自分が一番偉いと感じていたとはな。ともあれ、今度こそ逃しはしないぞ、奈阿姫！ 多分昨夜は橘家に居たに違いない。それに、あの遊女……あれもひょっとして、奈阿姫を庇う者達の罠だったのかも知れぬ。

それに気付かないとは、何と言う愚か者よの、我は」

時護はそう齒噛みしたが、腕を枕にしていると次第に眠りの内に吸い込まれて行き、うつらうつらし始めた。

けれども、時護の束の間の睡眠も直ぐに妨げられた。

バタバタと慌しく廊下を駆けて行く足音に気付くと、「御免！」と言う甲高い叫び声と共に、弥太郎が入って来たのだ。

「時護様！」

「あああ？ 弥太郎か」と時護は眠い目をこすりながら、起き上がった。

「済まぬ、このような体たらくを見せてしまって」

「いいえ、それは宜しいでございます。昨晚は、大変だった由、お察し致します。ただし、わたくし、ある情報を得まして、すぐさまお知らせせねばと駆けつけた次第で」

「何だ？ 滑川で？」

「いいえ、滑川では何の情報も得られませんでした。女人の姿一匹、無かったそうでございます。海岸線では女人は目立つので、それは確かそうですね。そうではなく……」

「もしや、橘の例の下女か！？」と皮肉っぽく時護が聞くと、時護より更に若い弥太郎は頬を染めた。

「あ……はい」

「なぜに又会ったかは聞くまい。それで？」と時護は欠伸を噛み殺す。

「今朝早く、鶏の鳴く前に一人の下男が、裏門より何処かへ出て行ったそうです。その下女、今朝は一番早起きして井戸の水を汲んでいたとかでして」

時護はガバツと起きた。

「で？ 行く先は？」

「あ、分かりませぬ」

「馬鹿者！ が、いい。それだけでも大したものだ。一番鶏の鳴く前に、出て行くとはな。一体どこへ行ったものやら、東か西か、それとも北か？」

「まだ暗かったので、よく分からなかったとかでございます」

「それにしても、お前、よくその下女を手なずつけたな」

時護はふふふつと微かに笑った。

「どうやら、橘家に姫が居るのは間違いないようだ。その下男の行き先も気になるが……。けれども今度失敗すると、徳川様が咄われしてしまう。慎重にしなければ、なにしろ、鎌倉は昔は北条執権が住むかなりの都で、日の本の中心だった時がある。住んでいる奴らは、今だに過去の栄光を夢見ている、誇りが高い者達ばかりだ。あ

「あ、疲れる」

時護は両手を畳について、天を仰いだ。奈阿姫は、近くに居るよううでなぜか遠くに感じられる。

「弥太郎、わたしはしばし寝る。その後、今後のことをよく練ろうではないか。それから腹ごしらえだ」

「腹ごしらえ……？」

「腹が減つては、戦はできぬからな。相手はただのうら若い女人ではない。侮るなよ、奈阿姫を。よくよく考えれば、姫の体内には、あの織田信長と太閤の血が流れておるのじゃ。一筋縄ではいかぬのが、必定！　よくよく心せよ」

「はつ。それでは時護様、ごゆるりと」

弥太郎は部屋から出た。その直後、時護は弱気な溜息を付いたのだった。

その頃、鎌倉の東、切り通しと呼ばれている細い通り道に近い禅寺報国寺では、貞元じょうげん禅師が、橘由比からの文を読んでいた。由比の筆跡は滑らかで美しいが、ゆひとだけ書かれてある表書きを見た途端、貞元は渋い顔になっていた。

なぜなら、貞元には心当たりがあつたからだ。橘家はかねてより徳川に恨みがあり、よって東慶寺の奈阿姫を利用して、徳川に目にも言わせてみせようという気持ちがあつたからだ。奈阿姫が逃げたとなると、徳川は慌てふためくだろう。それが愉快だったに違いない。橘由比は、決して奈阿姫の為ではなく、自分達一族の復讐の為に奈阿姫を翻弄しているだけだと、賢い禅師は見取った。

「うゝむ」と禅師は唸った。

「奈阿姫を匿えとな……。自分達が隠しおおせないと見るや、今度はこちらにお鉢を廻す気だろう。豊臣家と徳川に挟まれた姫が哀れよ。」

しかし姫は何ゆえ出奔されたのか？　豊臣家再興の野心などではあるまい。多分、それは……」

禅師はあどけない七歳の頃の奈阿姫の姿を、つらつらと思い起こしていた。禅師は東慶寺に行く前日、奈阿姫を一晚泊めたことがあった。けれども以来一度も奈阿姫に出会ったことはなかったのだったが。

「姫は、わたしのことを覚えて下さっていたのか……。仏に仕える身ならばこそ、このような時どうすれば良いのか考えるのじゃ。うむ、やはり、窮鳥は救うべきなのかも知れぬ」

貞元禅師はやっと納得して、返事を書いた。

『窮鳥の受け入れ 相仕りました』

第二章 報国寺、鎌倉〔1〕

第二章 報国寺、鎌倉

〔1〕

報国寺は鎌倉の東の端に建つ禅寺である。北には小川、辺りを林や山に囲まれたひっそりした寺だが、奥にはうっそうとした竹林や、洞穴などがあり、確かに隠れるにはもってこいの寺なのかも知れない。

さすがに森時ときもり護も、まだこの寺に目をつけてはいなかった。何しろ古都鎌倉には、寺社が多すぎる。それほど広くも無い鎌倉だが、北には高く険しい山、南は海、そして左右の山には、切り通しと呼ばれている狭い街道しかない。

鶴岡八幡宮から真っ直ぐ伸びる若宮大路の東西には、びっしりと武家や商人の家々が連なっている。けれども、今はもう昔日の面影は無く、侘しい古都に過ぎなくなっていた。

そして西の果て北鎌倉に、奈阿姫が七歳で預けられた東慶寺があり、ちょうど正反対の東側の果てに、報国寺がある。奈阿姫と報国寺との関係はほとんど無く、確かに誰からも目に付けにくい場所ではあった。

「禅寺に、女人を置くことはなはだ難しいということじゃな」と、幾分腹立たしげに、橘由比は貞元禅師からの文を読みながら言った。

「窮鳥を救うと言っても、結局反論しておるような気がする……」

「由比様」と、側に居た葛城がやんわりと口を挟んだ。

「なんじゃ」

「つまり……男子であれば良いということでは？」

「じゃが、奈阿姫は女子おなこじゃ」

「ですから……」と葛城は意味深に言い継いだ。由比は直ぐに、その後を察する。

「おお、そうか！……つまり、姫を男装させるといふのではないのか？」

「お察しの通りでございます」と葛城は得意そうに答えた。「さすがは由比様。姫を若衆に男装させれば、禅師もお引き受けなさるでしょう。あのように、女人にしては背が高いし、少年と言っても薄暗がりでは分かりますまい」

「まこと、いい考えじゃ！」と由比は手をポンと打った。

「どうやらこの屋敷、誰かが見張っているような気配でございます」と葛城は声を潜めた。「事は内密に謀らねば」

「そうよの……男子の装束などは、外からは頼めぬな」

「恐れながら、由比様の亡くなられた若様のお衣装が残っているのでは？」

「ああ……それか」と途端に由比の顔が曇った。

由比には、流行り病で失った愛息子が居たのだ。嫡男ではなかったが、忠基ただもとという次男で、嫡男でここの屋敷の当忠ただゆき之よりも愛していた息子だった。

当主忠之は、滅多にこの鎌倉には足を運ばず、江戸に自分の屋敷を構えているが、忠基は13歳で亡くなるまで、この屋敷に由比と共に住んでいた。元来病弱ではあったが、母親の由比とは仲が良く、よって忠基が亡くなった時、由比は今までこれほどまでに涙を流したことがあったろうか、と思うほど日夜泣き崩れていたのだ。

その忠基の衣装を、由比は大事に持っていたことを、葛城は知っていた。

「ちょうど忠基様と、背格好が似ておりますゆえ、姫が召されると、きつとお似合いでしょうね」

「忠基は、緑が好きであつたの……」と由比は呟いた。

「水浅葱^{みずあさぎ}」(浅葱色^{みずあさぎ}) 藍色よりも薄い色、水浅葱はもっと薄い色で水色に近い) もよく似合つておられましたね。ほんに賢い少年であらせられました。まことに残念なことで……」

「もうよい！」と由比は勝気そうに遮つた。「そういう運命にあつたのであろう。それよりも、奈阿姫には、緑より水浅葱の小袖の方がお似合いであらうの」

「そうですね」

「では、早速姫様には、このことをご承知願えなければなりませんな」

由比と葛城は、ひそひそと囁き合つていた。

橘家での企ても知らず、昼過ぎ時護は東慶寺の秀法尼から呼び出され、叱責されていたのだった。

秀法尼の前にかしこまつて座り、ガミガミと叱り付ける尼の小言を聞くのは、時護にとっては苦痛だったが仕方が無い。失敗は失敗だ。

けれども、時護とてこのまま手を拱^{いまね}いているのではなかった。時護は橘家の裏に見張りを付け、出入りする人々の様子を逐一知らせるように言いつけていたし、七里ガ浜や由比ガ浜にも、従者をうるつかせ、海から女人が逃げないようにと見張つていたのだ。

けれども、夕刻時下男がこそこそと裏口から戻つて来たのを聞いた時護は、嫌な胸騒ぎを覚えていた。下男は、裏口から入る前に、辺りをキョロキョロ伺つていたと言つのだ。

「もしや……我らのことを、由比殿は知つておられるのでは？」

と弥太郎が、東慶寺から戻つた時護に聞くと、時護は明らかに不快な顔つきのまま頷いた。

「それはあり得るな」

「どうなさいます？」

「今晚……押し入るか？」

「え！？　今晚でございますか」

「悪いが、弥太郎」

「いや。ですが昨日の今日でございますよ。まさか、今晚誰かが出てくることはありませんまい。明日にでも」

「いや、今晚だ！」と時護は言い張った。

「けれど、もし今晚押し入ったとして、奈阿姫が居なかつたらどうなさいます？」

「居る。姫は必ず、そこに居るはずだ」と時護は不気味に言った。

「各門を、各々見張っておるだろうな？」

「それは、もう承知しております。お任せを」

「今晚こそ、姫を捕らえる。もう失敗は許されない。我々の名誉にかけても、必ず捕まえてみせなければならぬのだ！」

並々ならぬ決意と覚悟を見せて、時護は言った。

〔2〕

〔2〕

奈阿姫の長い黒髪が、肩までバツサリ切り落とされた。髪は女の命であつたこの頃、黒髪を落すのは余程のこと。尼になるか、男装以外に髪を切ることは無い時代だ。特に、高貴な姫君はそうだったが、奈阿姫は躊躇わなかつた。逃げる為なら、どんなことでもする覚悟でいたのだ。

特に、森時護に捕まりたくは無ければ……。

葛城は、手早く奈阿姫の髪を、若衆のよういきりりと高く結い上げ、由比の亡くなつた息子忠基ただもとの形見の水浅葱色の小袖と、茶色の袴を身に付けさせた。そうすると、化粧を落とした奈阿姫は、暗がりの遠目には美少年にしか見えなくなる。

「よお、お似合いでございます。あ……これは失礼をば。姫様を若衆と同じとは」

「いいですよ、葛城」と奈阿姫は、差し出された手鏡を覗き込みながら微笑んだ。

「確かに、我ながら意外に似合っているな、と思うのですから。おかしいものですね」

「それでは、夕刻になりましたら、葛城と共に堂々と正門から出立なさいまし。あの森という若侍は葛城を知りませぬゆえ」

「正門から……大丈夫なんでしょうか」と不安が姫の胸をよぎつた。「ほほほ」と由比は笑う。「各門は、どうやらあの手の者が見張つておりますが、皆裏門から逃げるものと思つているようでございます。ですから正門から出て行く若衆が、よもやあなた様であるとは思ひもしないでしょう」

「そうなのです。実は、夜になれば、裏門から下女に姫様の衣装を

身に付けさせ、出かけさせることになっております。あの者ども、きつと下女の方を付けていくに違いございますまいて」

橘と葛城は、共に顔を見合わせて笑い合った。けれども奈阿姫に笑いは無かった。

己の誇りを捨て、男装までして逃げるべきなのか……ふと疑問が湧いてきたのだ。けれども、ここまできたらもう後には引けない。

奈阿姫は、差し出された短い太刀を帯に差した。

用意が整うと、葛城は奈阿姫に菅笠を被せ、報国寺まで案内することになった。

正門から一步出る瞬間、奈阿姫と杖を持つ葛城には一瞬緊張が走ったが、二人は深呼吸すると何食わぬ顔で出て行き、一旦は南の若宮大路を目指したが、直ぐに左に曲がり東を目指してわざとゆっくり歩き始めた。

「姫様、門の角に立つ若いお侍をご覧下され。あれは、ひょっとして森時護の手下かもしれないませぬぞ。けれども、一瞥も与えず知らん顔で通り過ぎるのでございますよ。いいですね」

姫はこつくりと頷くと、なるべく大股で歩いて行く。案の定、若侍はチラッと二人を見たが、袖に手を通すとつまらなそうに顔を背けた。

空では、埒わづに急ぐ鳥のカアカアと鳴く音がして、夕暮れが近付く。「報国寺は遠ございます。夜半に着くかどうか。明け近くになるやも知れませぬが、御足は大丈夫でしょうか」

「案ずるな」と奈阿姫は囁いた。「歩くのには慣れている」

「何か言われても無口でいるか、もしもどうしても言わなければならぬ時には、それらしくお語りなさいませ」

「分かっている」と奈阿姫は、少年らしく答えてニツと笑った。幸い姫の声は低音で、少年の声音と言えなくも無いのが幸いだった。

二人が出て行った後、由比はその場にへたり込んでいた。大事な、

息子の帷子をくれてやりそこまでして逃してしまった本意は、本当は奈阿姫を可哀想に思ったわけではないし、豊臣の味方をしたわけでもない。

ただ由比がやりたかったこと……それは、徳川に恥をかかせ、嘲笑したかったからだ。これが古い先短い由比のささやかな願いだった。

徳川家は嫡男忠之を江戸に連れて行き、もはや母親である自分の元には戻っては来ない。そして北条の誇りは、豊臣によって碎かれた。「どちらも、この日の本で栄華を極めた者ども。けれども、もう北条家には何も残ってはいない。忠基の小袖でさえ、あの姫に与えてしまった。」

けれども、女とは言え姫の勇敢な志だけは、わたしは認めざるを得ないの。姫にお味方したのは、きつとそのせいじゃ……。豊臣でも徳川でもない、ただ一人の女としての姫のお気持ちに同感してしまったせいじゃ。

そうとなれば、姫には是非逃げおかせて、徳川家の者達を翻弄していただきたいものじゃな。姫、心よりお祈り申し上げておりますぞ」

由比の心はやっと平安に満ちた。そして仏壇に向かうと、亡くなった夫、息子、そして姫の行く末をみ仏に祈ったのだった。

行灯に灯が灯った頃、面の門をドンドン叩く者達が現れた。やはり思った通り、時護達がやって来たらしい。

み仏に祈っていた由比にも緊張が走る。家の者達もそわそわしていたが、右往左往している下女や家来達を由比は叱り付けた。

「何をうるたえておるのじゃ！ 案ずることは無い。我らは何もしておらぬぞ。落ち着くのじゃ！」

「ですが由比様」と面の方から灯火を持ってやって来た下女が、慌てふためいてやって来た。「徳川様のご命令とかでございます。門を開けねば、反逆罪になるとか」

「ふん、大した脅しよの」と由比は鼻で笑った。「小童らしい言いようじゃな。橘家を小ばかにしよって」

「どう致しましょうか」

「もちろん、門を開けなされ」と由比は落ち着いて命じた。

「何も無いゆえ、心配は要らぬ」

「は、はい」

下女は慌てて戻り、やがて門の辺りから数人の足音が近寄って来た。由比は身だしなみを整え、そしてゆっくり立ち上がった。

「ま、これも戦と言えは戦じゃな」

時護は今度こそ逃さんぞ、という強い確信と覚悟を秘めて、ずんと橘家の奥に通じる廊下を進んだ。橘家の者達がおろおろしつつ、時護と二人の若侍の手下達を眺めており、下女達は袖で口元を隠しながら、何やらひそひそ囁き合っていた。その瞳には侮蔑と、奇妙な嘲笑が混じっていることすら気付かないほど、時護は興奮していた。

奥には、一本の廊下で繋がっている奥の間があり、その先にはもう何も無い。奈阿姫が居るのならそこだ、と時護は目をつけた。

そして、その奥の間の板張り襖の前に、当主橘由比が座っているのを発見すると、時護達は一斉に歩みを止めた。

由比は黙ったまま、静かに頭を垂れ、両手を突いて恭しくお辞儀をする。その様は、老女ながらこちらもひるむほど、凜としていた。顔を上げた由比は言った。

「何事でござりまするか？ 若い殿方が三人も太刀を持って、このようなあばら家に押し入るとは」

それはわざとらしい自嘲気味な言葉で、時護はムツとした。けれども、ここでもなつても意味が無いばかりか、躰を疑われるだけだ。

「橘由比殿か」

「はい、左様で」

「急に押し入って、相すまぬ。が、ここに東慶寺から逃げて来た、尼になる高貴な女人が居ると聞いたのでな」

「はて」と由比は首を傾げた。「このような佻しい館に、そのような立派な方が居られるとは？」

時護の苛々は益々募っていく。

「由比殿！ 隠し立てをなさると、為になりませぬぞ！」

「おほほほ、何を隠し立てすると？」と由比は袖口で嗤った。

「そなたは、茶の湯のご指南とか」

「はい、左様でございまするが」

「では、奈阿姫と申すお方、ご存知であろう？」

「な・あ・ひ・め？」と由比はゆっくり言った。「ああ、あのお方でございますか。類稀なき麗しいお方で、かつ千姫様のご養女でございますね。ええええ、知っておりますよ。以前はよくこちらにおいででしたから」

ふん、シラを切りおつて。全く食えぬお人よの。この老女、ただ者ではないな。

時護は改めて気持ちを切りかえた。

「そこをどいて頂こう」

「おや？ この部屋は、荒れた茶室だった部屋。狭いし何もありませんが……何か？」

「戯言はもう結構。そこをどいて下さらぬか。中を拝見したいのである」

由比の目付きが険しくなった。けれどもその瞬間、由比は「どうぞ」と静かに言つと、ふすまを開け始めた。その横顔が、どこか勝ち誇った武将に見え、時護はギクリとする。

けれども、時護には由比の心の内を詮索するよりも、その暗い部屋に入ることが先決だった。

二人の家来達が灯りを持ってワーツと押し入ったが、元来狭い上に確かに粗末な部屋で、あちこち入念に突いたものの、抜け道や隠れ部屋や隠し戸などは全く無い。その上、人が住んでいたような気配すらないのだ。ただ一つのことを除いては……。

「畜生め！ 又してもしてやられたか！」と一人の家来が口汚く罵

つたので、時護は「これっ」と叱り付けた。

「人様のお家ぞ、さたはる偵治」

その声音が奇妙に落ち着いていたので、由比のほうが今度はドキリとする番だった。

けれどもその時、弥太郎が息せき切って駆け寄って来たのだ。

「時護様！」

「何事じゃ、弥太郎」

「実はつい先ほど、裏門より女人が一人出て参りまして、南の方へと一心に駆け出したのでございます」

「何だと!？」と時護は振り返った。

「もしかして……その女人が……」

「追うのじゃ!」と時護は叫んだ。「絶対に逃すな!」

「はい! つい先ほどですので、そう遠くへは行かぬかと」

「つべこべぬかすな、弥太郎! ……ところで由比殿、失礼を致した。もうここへは二度と来ませぬゆえ、この無礼お許しあれ」

と時護が慌てて許しを請うまでもなく、由比は微かな笑みすら浮かべて、

「それでは、これでお氣が済みましたか?」と問うただけだった。

「御免!」とだけ言うつと、時護と弥太郎、あとの二人もバタバタともと来た廊下を走り去って行く。

「やはり、単なる小童。こわい森家の跡継ぎと言えども、その程度ではの由比は含み笑いをもらしていたが、その内声を上げて笑い出したのだった。

裏門から急ぎ出た四人の若侍達は、南へと急いだ。程なくして、薄衣を頭から被った、淡い桜色の装束の女人が駆けて行くのが月光のもとで見え出し、色めきたって女人を追いかけて行くと、女人もまた必死で走り出す。

けれども若い侍達にかかつては、女人の足では直ぐに捕まってし

まった。

「待て！」

そう叫ぶと、時護は女人の肩をぐいと持って、こちらを向かせた。すると、似ても似つかぬ田舎っぽい若い女の顔があった。

「あつ、こ、これは」

「どなたでございますか」とその娘は震えながら時護に向って言う。

「人違いでござった。まことに相済みぬ」

「ええええ？ 人違い！？」と弥太郎は啞然として言う。

「そうだ、別人じゃ」

「なんと！」

「ではわたしはこれにて」とその娘が礼をして去って行くのを、あとの三人は呆然として見送るばかりだ。

「してやられた！」と時護は悔しそうに唸った。

「又しても……失敗か。元々あそこには誰も居なかったのか」と弥太郎が呟くと、

「いや。違うな」と時護は静かに答えた。その顔には少し前までの、苦渋に満ちた表情は無い。

「あの部屋には何も無かったが、唯一つ香りだけがまだ漂っておった」

「では、香かうが？」

「そうよ。微かだが、あれは間違いなく姫の香であった」

以前千姫の部屋で奈阿姫に会った時に嗅いだあの香は、滅多に手に入らない高価な香であり、奈阿姫独自の香であったのを、時護は思い出していたのだ。その姫の懷から、袖口から臭う芳しい香は、時護の苛立つ若い心を、まるで包み込むように漂っていたのだ。忘れるはずが無い。

「姫は確かにあの部屋に居たのじゃ！」と時護は確信した。

「それでは、姫はまだ橘家に？ あれほど、各部屋隅々まで探し回

りましたのに。それ程大きくは無い邸宅でございますよ」と不服そうな偵治。

「もう誰も居ないはずです。客人と言えば……若衆とその侍女らしき者達しか……」

「なにい！」と時護は喚いた。「若衆と侍女!？」

「はい、正門から出て行かれました。ほんの一刻ばかり前でございます。夕暮れ時でした」

「それだ！」と時護は叫ぶと、その場で地団太を踏んだ。「その者達だ！」

「ええっ!? しかし、姫君では……」

「化けておったのだ」と時護は肩を落として言った。「まさか男装をしていたとはな。何と大胆な姫なのだ……」

「あれが……奈阿姫!？」と偵治も呆気に取られて呟いた。

「ああ! 相済みませぬ、時護様! まことにまことに、この偵治のせいでございまする」

「いや、違う。我らは、あの老獪な由比殿に負けたのじゃ。歳を経た女人を侮った罰なのじゃ……」

時護は力なく呟いていた。

〔4〕

〔4〕

鎌倉の小町を出て東の方角、岐れ道わかれみちから段々道が険しくなり、奈阿姫と葛城は道を急いだ。時々暗闇の中に、怪しげな魑魅魍魎が居るような気がして、奇妙な動物の鳴き声にもビクツとして振り返るが、もとより真つ暗で何も見えない。

こついつ時刻に一番怖いのは、追剥だ。幸い何事も無く、二人は夜中に報国寺まで辿り着いた。門の扉には、待っていたかのように一人の小僧が立ち、さつと二人を中に招き入れたので、二人はやつと人心地が着いた。

小僧は暗いのでよく分からないながらも、この若者がまさか少女とは気付かない。

「さ、お早く。お客人を奥に通すように、わたしは言われております」

「恐れ入ります」と葛城だけが答えた。

「どなたかは存じませんが、貞元禅師が大切にお迎えするお方ですからね」

と若い小僧は無邪氣に言う。「さぞや、ご身分のお高い方だろうとお察し致します」

「訳ありますから、それ以上は」と葛城がこのお喋りな小僧に釘を刺す。

「あ！ はい、申し訳ございません」と小僧は謝った。

どこをどう通ったのか分からないながら、少し坂道を上がった所にかなり大きな建物があり、その中を二人は案内された。

そしてさる部屋へと丁寧に通されると、そのかなり乏しい灯りの中に、一人の僧がどっしりと座っていた。黒い袈裟に闇の中でも光

る鋭い目だ。

「貞元禅師様ですよ」と葛城が奈阿姫に囁くと、姫はやつと菅笠を取って座り、頭を下げた。

「失礼致します。奈阿と申します。この度は、お世話をお掛けいたしますが宜しく」

「おお！ 姫様か。若衆に男装なされてまでとは、用意周到ですな」
「はい。禅師様、屋敷は四方八方、森時護の家来達に見張られておりまして」

と葛城が言つと、直ぐに奈阿姫が続けた。

「恥ずかしながら、こういう格好で参りました。女人の滞在は、この寺にとつても宜しくないと思いましたので」

「まあ、仕方の無いことでしょう。窮鳥を救わねば、仏の道に反すると思ひましてな」

「ありがとうございます。けれども、わたしも次にはどこかに参る所存でございます」

と健気にも奈阿姫は答えた。

「暫くここで休んでいきなされ。それから先のことは、自ずと知れましょう」

「そうは行かないのです。あの森という若侍、執念深く姫様を追い詰めていくような気が致しますゆえ」と葛城はにじり寄つた。

「是非、鎌倉からは出なければなりませんまい」

と奈阿姫も言つた。「けれども、今は少し疲れました」

「当然のことでしょうな。お二方とも、お休み下され」

「あ……わたしは早朝にここを出立致します。そして暫くは、ほとぼりが冷めるまで、この近くにある兄の家に逗留しております」と葛城は言つた。

「葛城、本当にありがたく思います、まことに相すまぬことです」

奈阿姫は、葛城に向かうと頭を下げた。

「姫様、その内に豊臣の息のかかった者達を探し出し、もっと遠く

へお連れ致します。それまでここでご辛抱下されませ」

「葛城！」

そう叫ぶと、奈阿姫は思わず葛城の手を両手で挟んで首を垂れた。「本当に、わたし如きの為に、危険な目にそなたを合わせてしまつて。己の我がままさを今更ながら感じてしまいます。わたしは愚かな女でございますね。色々な人を巻き込んでしまつて」

奈阿姫の目から、初めて涙が溢れた。

「姫様！」と葛城も感極まつて言う。二人はすっかり手を結び合わすと、互いに泣いた。貞元禅師はじつと二人を見守っていたが、決して彼自身は感傷的にはならない。

「それでは姫君はこちらへ。そして葛城殿は、あちらへ」

禅師が無情にも義務的に手で示すと、葛城は離れがたいようにしていたが、やがてそつと奈阿姫の手を離れた。

「では、姫様。どうかご無事で。くれぐれもご用心なさつて下さいませ」

「葛城もお達者で」

奈阿姫は目を伏せ、葛城は案内されるままに闇の中に消えた。急に本物の寂寞間と不安が押し寄せて来るように感じる。

「さ、姫君はこちらへ」

と呼びかける貞元禅師の言葉に、奈阿姫はやつと顔を上げた。

「これから、わたしの客人の泊まる僧坊へと案内致します。が、ここは女人禁制の禅寺。決してお顔をお出しなさらぬよう。そしてその若衆の格好をあくまでも続けて頂きたい」

「はい、禅師様」

「朝晩と、まだ幼い茶坊主があなた様にお食事をお運び致しますが、決してお言葉を発せられぬように、ご注意くださいませ」

「分かりました」と奈阿姫は素直に答えた。

やがて、奈阿姫は暗い廊下を、乏しい灯りを頼りに何処かの部屋

へと通され、そこで寝泊りするようには禪師に言われた。

禪師が襖を閉めた時、奈阿姫は春だというのに、まるで真冬のようなうすら寒い寒気を感じて身をすくめた。どうやら裏山の側らしく、山からは獣の発するような音がする。灯りを消すと真っ暗で、姫は薄い布団に入ったもののなかなか寝付かれなかった。

闇の中に目を凝らしながら行く末を案じている内に、やがて姫の目は塞がっていく。けれども、胸の中のざわざわする不安感は夢に影響したらしく、狐の面を被った者に追いかけられる悪夢を見た。『捕まえたぞ！』と狐の面の男がむんずと奈阿姫の細腕を掴むと、その男はカラカラと笑いながら面を外した。恐れていた時護の整った白い顔が現れ、奈阿姫は夢の中で逃げようと苦悶し、声なき叫び声を上げたのだった。

〔5〕

〔5〕

「作戦はやり直しだな」と時護は欠伸をしながら、若い家来達を集め、車座になつて争議していた。鎌倉の西にある、ひっそりと佇しい武家屋敷の一室だ。森家の分家である、芦田源衛門の一室を、彼らは借りていた。

「あれから半日経つたが、あの時の悔しさは到底晴れそうも無いぞ」と時護はつい本音を喋る。それ程、この家来の若侍達とは幼い頃から親しい間柄なのだ。

「こうなつたら、何でもやります」と弥太郎は言つた。「どんな乱暴狼藉でもやってみせる。これ以上、恥を掻くよりはいい」

「鎌倉では、森時護達は盆暗頭だという噂を聞き、わたしも屈辱で一杯です」

と、これは偵治。「せっかく、間近に奈阿姫を見ていたというのに

……」

「何か覚えていたら、申せ」と時護は腹立たしげに問うた。

「ですから、以前申しましたように、背は女人としては高く、痩せぎす。けれども、顔は菅笠の為、見えませんでした。あ！水浅葱色の小袖を着ておりましたな」

「ちえつ、そのような若衆はどこにも見当たらないそうだ。それに、横に居た侍女も見つからない。が、今更橘家には入れないし」と弥太郎はブツブツ不平を言う。

「女人達はもういい。けれども、例の下男を忘れては居ないか？」

「下男？ ああ、どこかに朝早く出かけたとか言う」

「そうよ、弥太郎。お前の懇意の下女から、その下男の名は聞けぬか？」

「それが」と弥太郎は手を頭にやった。「どうやら、向こうも察し
たらしく、下女は出てまいりません。由比殿が下女を出そうとはし
なくなり申した」

「会えぬのか？ ふん、どこまでもずる賢い由比殿よ」

そうふくれっ面で言つと、時護はボタンと仰向けに畳に横になつ
た。

「あゝあ、事は簡単に済みそうであつたのに、そうはなかなかいか
ぬか……」

「しかし時護様、その下男夕刻に何処から戻りました小男ではない
かと」

と、いつもは無口な家来が口を出した。

「なんと！ 嘉幸よしゆき、そなた見ておつたのか！？」

「いや……その日の夕刻、こそこそと中年過ぎと思われる下男が、
何も持たずに裏門から中に入つて行つたのを見ておつた次第で。け
れども、その下男が朝早く出て行つた者と同じ人物かどうかは……」

時護はガバツと跳ね起きた。

「嘉幸、そいつを又見れば分かるか？」

「はい、分かります。小男だし、特徴のある鼻をしておりましたか
ら」

「そいつを見張れ！」と時護は命じた。「裏門と表門、正門からも
いつか必ず出てくるであらうて」

「小男の下男」と弥太郎は呪文のように繰り返した。「小男、ねえ。
して、もしも居りましたら？」

「外に出ていた折に、捕まえろ！ そして白状させるのじゃ。どん
な手を使つても、白状させてやる！ 文ふみなどをどこへ持つて行つた
かをな！」

「けれども、気の長い話ですな」と、偵治が続けた。

「こうとなれば、少しぐらい時間が掛かっても構わぬ。今度こそ、
はつきりした証拠を捕まえてやろうではないか！ みなの方！」

「はいっ」と皆口々に答えた。

けれども、三日経っても四日経っても、その下男は門から出る気配がなかった。

「今日もダメか……こうなれば、持久戦だな」

桜の頃は当に過ぎ、ムラサキグサ（＝藤）もそろそろ終わりに差し掛かった頃（5月中旬）、やっと時護達に朗報が舞い込んだ。

「例の下男！ 由比殿と共に、雪ノ下の方に出かけましたぞ！」

と弥太郎が駆け込んで来たのだ。

「雪ノ下か！ しかし、由比殿と一緒にとはな」と時護は腕組みした。

「時護様、帰りはその下男一人かもしれませぬぞ！ なぜなら、どうやら由比殿は茶の湯の友人である方の所にお泊りのご様子」

「下男だけ、出てくるかのお？」

「一か八か、その屋敷を見張っております」と偵治も言う。

「確かに、四の五の言っているらしい。もうあれから10日は経つからな。一体姫はどこに行ったのじゃ？ 男装までして、いずこへ？」

「まさか、もう鎌倉を出て行かれたかも」

「弥太郎、そのようなことは絶対にない。各切り通しでは、女人や若衆を一人も通すな、と命じておる。事実そのような人は、通っていないそうさ。幾ら男装していても、うら若い、しかもかなり美しいとなると……」

時護も脳裏には、つと振り返った若衆が、奈阿姫の姿に重なって現れた。

「姫を実際知っておられるのは、やはり時護様だけですからな」と弥太郎が言うと、時護はふと頬を赤らめた。そして途端に無口になる。

「姫を捕らえるのは……姫を救う為でもある。逃亡と言う大罪から救う為でも。あの方を死なせたくは無い故にな」

そう自分に言い聞かせるように、時護は呟いていた。

〔6〕

〔6〕

奈阿姫は男装したまま、じつと報国寺の奥の僧坊の一室に蟄居していた。

少しずつ季節が過ぎ行くのが、狭い障子窓からでも見える。少し前まで遅い雪空だったのに、いつの間にか春爛漫だ。

茶坊主は、毎朝と夕刻、判で押したように食事を持ってやってきては、黙ったまま膳を下げに来る。その繰り返しだった。まだ若い、と言うより幼い10歳くらいの少年僧で、賢そうな瞳が印象的な茶坊主だった。多分、稚児としてこの寺に来たのだろう。

奈阿姫は名前ぐらい聞きたかったのだが、それもできずただ黙っていた。けれども時々その小僧の視線が自分に注がれているのに気付いて、ハツとする時があった。いつ、バレルのか、それともいつあの狐の面をした時護達がここにやって来るのか……考えただけで、気が沈む。

姫は悟った。その茶坊主に、どことなく兄の国松が似ているのを。父秀頼に疎まれた国松がやって来たのは、奈阿姫がまだ千代と呼ばれていた四歳の時。三つ年上の国松は、常高院に連れられて大坂城にやって来た。秀頼の跡取りと言われていたのに、父秀頼と祖母淀殿は孫どころではなかった風で、必ずしも国松を愛していたようには見えなかった。

けれども国松は聡い少年で、かつ大胆さと繊細さの両方を持つ、将来は大坂を背負って立つ器量を持っていたのだ。それにいち早く気付いたのは、実は奈阿姫だった。

広大な大坂城内の廊下を駆け巡り、様々な部屋を覗き込み、拳句

の果ては二人してかくれんぼをしては、父秀頼に怒られていた兄と妹。腹違いではあったが、どちらも織田信長と豊臣秀吉の血を受け継ぐものである、という自負心は変わらず、特に国松は幼いながら後々は豊臣家の再興の天下を夢見ていた。

そういう英才教育を施されていた国松だが、淀殿からはどこす冷めた目で見られていた。淀殿にとって、秀頼こそが唯一の希望、唯一の愛情的であり、孫である国松やまして千代姫などは、どうでも良くなっていたのだ。

それを、淀殿の妹、常高院（＝初）は諫めていたが、淀殿にとって、憎いのは実の妹の嫁ぎ先の徳川秀忠だった。そしてその背後に居る、まだ老いたりとは言え、日の本の実権を独り占めしている家康その人！

「国松や、よく聞くがよい。あの徳川の大御所殿は、関が原の戦で勝って以来、誇っているのじゃ。末の妹の江（ごう）お江与の方とも言う」を自分の息子秀忠に取り込み、わらわ達三姉妹の仲を裂いてしもうた張本人じゃ。

それまでわらわ達は、決して仲違いなどしたことはなかったというに、江を取り込んでからは、すっかり天下人として君臨し、いつかはこの豊臣家を滅ぼそうと画策しておる。決して、あの者を信じるでないぞ、国松。東国に江戸という新しき町を作り、大坂城にも匹敵する巨大な城を建て、すでに東国一円全てを手中に収めておるのじゃ。

太閤閣下がご存命の折は、あれほど閣下に誓いを立てておったのに、亡くなるや変貌し、権力の虜としての己を、暴露された。まこと、閣下が猿なら、大御所は狸、それも大狸ぞ！ わが秀頼に、孫娘の千姫まで差し出しておるが、油断はならぬ。きつといつか、それも近い内に、この大坂を手中にしようと企んでおるはずじゃ。

すでに忍びの者達からは、そのような文が来ておるでな」

ある日、まだまだ色香の褪せぬ淀殿は珍しく国松を自分の膝元に

置くと、そう言い含めた。その言葉には、言い知れぬ悔しさが滲んでいることに、まだ幼い千代姫も感じ取った。

そして何より、歳の割には賢い国松が、それを感じ取らないはずが無い。

「お祖母様、この国松が父上と共に、ここ大坂を守りますゆえ、どうかお心をお静かに」

「まあ、国松！」と淀殿は顔を少しだけほころばせる。「そなた、何と聡い男おのこぞ。まことの豊臣の者じゃ。太閤閣下おのこに似ておるの。心強いものじゃな」

淀殿は始めてそつと国松を抱き締め、瞳を塗らしていたのを、奈阿姫は今も鮮明に覚えていた。

やがて淀殿の言った通り、戦が始まり、せつかく仲良くなっていた国松と千代姫は、大坂夏の陣の前に別々に城を脱出することになった。前年の戦でも負けていた豊臣側は、既に覚悟していたのだらう。

秀吉の血を受け継ぐ最後の二人の孫を、無事に脱出させようと懸命だった。

千代姫を連れ出そうとしたのは、なんと正室の千姫その人だった。気位の高い千姫ではあったが、不思議と奈阿姫とは気が合い、「千代、千代」と呼んでは、一緒に戯れている姿がよく見受けられていた。

元々奈阿姫の養育係りは、側室の一人である成田甲斐姫であったが、正室の千姫はそんなことには頓着せず、奈阿姫を可愛がっていたのだ。

そして、いよいよという時、千姫は奈阿姫と成田甲斐姫を共に連れて行くと言い出した。

「秀頼様、千代をわたくしの養女と致します。そして養育係として甲斐姫も連れて行きます。どうか、千代をわたくしにお渡し下さい

ませ」

「ならぬならぬ！」と横に居た淀殿は叫ぶ。

「どうせ、お前の言うことなど、あの大御所殿が聞くはずが無い。そなたと言う可愛い孫が大坂城に居ると知っておりながら、火を放つ氣ぞ！　そういう残酷なお方じゃ。そなたはともかく、奈阿の行く末はもう知れているも同然ではないか！」

「では、千代をここに置いておく！？」と千姫は、ここに来て初めて、キツとした険しい顔を姑淀殿に向けた。「わたくしのお祖父上は、わたしの懇願をきつとお聞き入れてございますわ！　ここで野垂れ死にさせるのは、余りにも可哀想では？」

「野垂れ死にと申すか！　誉れを守る為に、最後まで戦うのが、野垂れ死にかつ！」

淀殿は立ち上がると、千姫に向かっていこうとした。けれども、それを秀頼が止めたのだった。

「母上！　それと千も、どちらもやめらっしゃい！　どちらの言い分もごもつともなれど、わたしは娘の奈阿をここで死なせたくはございませぬ。母上、徳川の大御所殿が憎いのは分かりますが、ここは千の言う通りにしてやつては下さらぬか？」

わたしは娘を生かしてやりたいのです。この可愛い娘を」

淀殿は、じつとして怒りに震えながらも堪えていた。

「それと、千。今までご苦勞であつた。徳川から豊臣へと嫁いで来たこと、心苦しゅうあつたであろうにな。最後の願いじゃ、この奈阿を何としてでも守って下され」

秀頼は、千姫に向かって静かに首を垂れたのだった。

奈阿姫は千姫と甲斐姫、そして数人の手勢と共に城を脱出することが決まった。奈阿姫が甲斐姫に手を引かれて行こうとした時、廊下の端から国松が走り寄って来た。

「千代！」と叫ぶと、国松は奈阿姫の手を取った。「千代！　わたしもう直ぐ別の道から、ここを出る。だから、千代。絶対に生き

抜くのじゃぞ！　そして又わたしと会おう！　絶対じゃ、約束するか、千代？」

国松の目は真剣だった。

「はい、兄上様」と奈阿姫は答えた。

「千代……生きてくれよ、千代……」と国松が言うのを、

「さ、姫様、お早くなされませ」と甲斐姫が急かした。二人の兄妹はこうして別れて行ったのだった。けれども、もう二度と会うことは叶わずに、奈阿姫は後に国松が京の六条河原で首を打たれる折、気丈にも「豊臣家は永遠じゃ！　この食わせ物の家康はいつかは滅びよ！」と叫んでいたということを聞いた。

「兄上……」

奈阿姫が永訣の時の兄国松を思い出して、箸を持ったままわつと泣き伏すと、茶坊主だけが、怪訝な表情で奈阿姫を見つめていた。

〔7〕

〔7〕

空は曇りで、月明かりも余り無く、辺りは漆黒の闇の雪ノ下界限。橘由比は、例の下男とさる屋敷に入ったまま、出て来ない。こちらの森時護と家来達は、苛々しながら待ち続けていた。

「時護様……本当に下男は出て来るんでしょうかね」

と弥太郎が囁いた時だった、門がギイツと開く音がすると、中から人影が出て来たのだ。こちらは全員声を潜め、そして口を噤む。

「それでは、これにて。明日、由比様をお迎えに参ります」と言う声は、例の下男。

「夜道、気をつけて。最近は何騒なので」

屋敷の下女らしき女性の声がすると、紙に包まれた蝋燭の灯を下男に渡した。その仄明るい光に照らされた小男を見ると、嘉幸は「うっ」と言う声を微かに発した。

「時護様、あの男でございます」

そしてその声を潜めて囁いたので、時護は血が騒いで唸った。

「そうか！ では、皆の者、あいつの後を付け、角を曲がったところで捕まえる！ 絶対に逃すなよ！ これ以上の恥は掻きたくないからな」

時護はそう言いつつ、自分もスラリと太刀を抜いた。見事な刀だ。かたな

そうとは露知らず、件くだんの下男は灯りを持ちつつ、いい気持ちで歩いていく。どうやら、幾分酒をふるまわれたらしい。

下男はすっかり油断していた。彼が角を曲がって、狭い小道に入るや否や、よく訓練された時護の家来達が、さっと下男を取り囲むと直ぐに口を塞いで引き倒した。下男は叫び声も上げられずに、羽

交い絞めにされる。持っていた灯りがよく舗装された道に落ち、あつという間にもみ消された。

「うぐぐぐぐぐぐ」と下男が恐怖に身悶えするのを、時護は冷酷に見つめると、自分の刀の刃を下男の首筋に当てた。

「どうだ、嘉幸、この者か？」

「左様でございます」と嘉幸も又冷酷に答える。下男はただただ震えているだけだ。

「おい、お前の名は？ 叫び声は上げるなよ。叫ぶと、この刀にお前の首が載るからな」と時護が問うと、口を塞いでいた弥太郎がその手を離れた。下男は、闇の中で見ても真つ青なのが分かる。

「さ、佐吉でございます……」

「佐吉か。その方、由比殿からの文を何処かへ届けたであろう？」

「ふ、ふ、ふ、文……」

「知らないと言わせない」と弥太郎がイラついて佐吉の首を絞めた。

「どこへなのじゃ、正直に答えないと、この時護様の刀がそなたの首を刎ねてしまうぞ」

「あわわわわわわ。そればかりは……後生でございます……わたしには妻子がございまして……」

「お前のような雑魚の妻子など、糞くらえだ！」と弥太郎が怒鳴った。

「なあ、佐吉とやら」と今度は時護が奇妙に優しい声を出した。

「今更、あの由比殿に忠義立てしてどうする？ 何かあったとしても、そなたの責任ではない。わたしは正直者のそなたの生き様の邪魔はしないつもりだ。そなたは、ただ知らん振りをしておればよいのだぞ」

「されど、わたしは由比様を裏切れぬ……」

時護の刀が、ほとんど佐吉の顎の下に当たった。

「妻子を考えろ。佐吉！」

「ほう、く、じ」

「は？」と弥太郎が問い返す。「何を言っておる？ はつきりせい！」

「ほうこく……寺で」

「ほうこくじ？」と時護。「ああ！ 報国寺か！ あの禅寺の」

「報国寺とは！？」と誰かが尋ねた。「余り聞きませぬな」

「馬鹿者！ 報国寺は東の切り通しの近くにある禅寺じゃ。足利持氏の嫡男義久殿が自害なさった寺。又、新田義貞の鎌倉攻めの戦時に亡くなった者達の塚が多数あると言われている」

「さすがは、時護様ですな。よく歴史をご存知で」と弥太郎が感心したが、元々生きた心地も無い佐吉は、由比を裏切ってしまったという後悔で益々消沈していたる。

「そこへ文を届けたのだな」と時護が念を押すと、佐吉し無言で頷いた。

「まさか、そこに姫君がおられるのでしょうか」と嘉幸が用心深く問うと、時護も「ああ」と言うばかりだ。

「そなた、文の中身は知るまいな」

「滅相もございません！ 我ら下々が、主人の文を盗み見るなど。それに、わたしは字も余り読み書きできず……」

「さもあらん」と時護は言うつと、目で「離せ！」と命じた。自由になった佐吉だが、やはり恐怖の余りガタガタ震えている。

「佐吉と申したな。そなた、由比殿が、女人を隠していたのを知っておるか？」

「女人ですか……ああ、はい。わたしはチラツと見ただけでございますが、それはお綺麗な若き女人でありました」

「やっぱり！」

嬉しさの余り、時護は思わず喝采したくなった。これでほぼ奈阿姫の行くえは、手中にしたも道理だ。

けれども、報国寺は禅寺。簡単に自分達武士を中に入れてくれるはずが無い。橘家や桜井佐ノ介とはわけが違う。高僧が断ると、まず中には入れない。それに、もしもやましいことのある禅師ならば、時護達を入れてくれるはずが無い。

又一つ困難にぶつかри、時護の喜びは一瞬にして消え去った。果たして、どうやって寺の中に入り込むかだ。

「去れ！ そなたの顔はもう見たくは無い。早うに去れ」

「へ、へ、へゝい」と返事するなり、佐吉は暗い夜道をよろししながら走って行った。

「分かりはしたが、まだ先は長いな」と時護は呟いていた。

〔8〕

〔8〕

「なに！？ 姫は報国寺におわすと言うのか！」

法秀尼の甲高いイラつき声が、東慶寺の奥の間に響いた。

「それも、禅寺ゆえに男装をしておるとな！ 戯けたことを」
たわ

「戯けごとではございませぬ。これは確かなる証拠があつてのこと」と時護も必死になつて食い下がる。

「証拠、証拠と申すが、今までももう何度も恥をかいておるのじゃ。今度間違つたら、そなたこそ、お咎めが無いとは言えぬぞ！」

秀法尼は苛々と扇子を、片手に叩き付けている。その様子を、時護はじつと見つめていた。

「果たしてそうであつたとして、どのようにして姫を連れ戻す気じゃ？ あそこの貞元禅師は頑固なお方じゃ。そうそうそなた達を寺には入れまいて。ま、そなた達が寺の周りを探るのは勝手じゃが。だが、姫はそう簡単には寺の外には出ぬぞ」

「けれども、奈阿姫様もいつまでも男装のまま、禅寺には居られますまい。やがては、出てまいりましょう」

「もう、出奔されて半月ぞ。姫は一体どのようにしてお過ごしされているのやら。」

実はな、この事、千姫様の耳にも入られたらしゆうて、この寺に厳しい文が来たのじゃ。夏までに、是非とも奈阿姫を見つけて連れ戻せ、とな。そうでないとお江与（＝江）の方様が、実の息子の將軍家光様に対して強く迫られる由。そうなれば、姫のお命も危ないと思はせじゃ」

「お江与の方様が、血を分けた奈阿姫様にも冷たくされるとは！」
と時護は絶句した。そしてなぜか、心臓が不安でざわざわ波立つ。

「お江与の方様は、家光様を春日の局に取られたといつも仰せであった。自分は生母なのに、家光様との仲は余りよくは無く……複雑な心境なのであろう。」

と言うより、強く出られたと見えて、実は実の姉上淀殿のお孫に当たる奈阿姫をお守りしたいのでは、とわたしは思っております」「左様でしたか」と時護は呟いた。

「出来ますれば、奈阿姫様自らお戻りであれば、罪は問われませんか。わたし達も、ただの姫様の気まぐれと片付ければいいことですから」

秀法尼は初めて人間らしい溜息を付いた。

「実は、この噂江戸にも一部の者達に伝わって居るらしいのじゃ。その中には、豊臣家の再興を願う不逞の輩も居ると聞く」

「さすれば、尚更姫君を早く捕らえねばなりませぬな」

そう言いつつ、時護は東慶寺を後にした。苦い思いが時護を遅い、若宮大路で歩みが止まる。

一体どうすればいいのじゃ。どうやって、寺に侵入しようか。無理やりに押し入ることは出来ぬし……。

悩みぬく時護の前に、黒い袈裟を着た若い二人の坊主が通り過ぎた。

「日蓮上人の辻説法の場所はどこかな」

「確か……小町の辺りであつたかの」

などと言う話し声が聞こえて来る。

「ちえっ、坊主達は気ままでもいいな」と思った瞬間だった。時護は何かが閃いた。

「そうだ……姫も男装している由、それならわたしも……坊主に化ければいいのだ。そうなれば、報国寺にも入れるかも知れぬ！ あそこの禅師は、わたしの顔を知らぬからな」

時護は思わずニヤリとした。姫を捕らえるためなら、髪を下ろして坊主に化けるなどという、天をも恐れぬどんな罪でも犯すつもりだった。どうしても……どうしても、姫に会わねばならないのだ。そして……。

「それからどうする？　もしも本当に姫が報国寺に居たのなら、わたしはどうする？」

坊主に化けたとなると、もはや腕力や刀では姫を脅すことはできない。まして、寺で捕らえたりすると、寺中が大騒ぎになるだろう。自分の身元も知られてしまい、下手をすると森家お取り潰しになるかも知れない。そうなれば、弟達や母はどうなる……。

せつかく良い案だと思ったのも束の間、再び時護は思案のどん底に落ちていく。

その頃奈阿姫は、東慶寺の奥庭に出ていた。あれほど禅師が出てはいけないと言っていたというのに、まだ若い姫が、禅寺の狭い一室に蟄居し続けることなど不可能だった。

鬱蒼とした竹林を抜け、ふらりと歩いて行くと、そこに小さな石の地蔵が数体あり、思わず奈阿姫は額ずいていた。

「これが……鎌倉攻めのときの、死者の霊を慰めているという地蔵群か……」

跪いた奈阿姫が一心に祈っていると、背後から唐突に声がした。

「あの……あなた様は、本当は女人なのですか」

奈阿姫がパツと振り返ると、そこには例の茶坊主が水を入れた桶を持って立っていた。その茶坊主の賢そうなパツチリした瞳が、じつと奈阿姫に注がれている。その時奈阿姫は、この者を偽ることはできないと悟った。

「なぜそんなことを聞くのじゃ」

「だって、あの……この前、わたしの前でお泣きになっていましたよね。確かに女人の声と仕草でしたので、もしやと」と茶坊主は臆

せず言う。

やはりばれたか、と奈阿姫に戦慄が走った。けれども、その茶坊主はニコリと笑うと、黙って人差し指を自分の口の前に立てた。

「大丈夫ですよ。わたしは誰にも言いません。これも訳あつてのことでしょうから」

「そうか」と奈阿姫は幾分ホツとした。「そなた、名は何と申す？」

「杉丸と申します」と茶坊主は答えた。「あ、あなた様は？」

「な、菜の花とでも呼んで下され」と奈阿姫は答えた。

「そなたはわたしの亡くなった兄じやによく似ておりますの」

そう言われた杉丸は、照れたように微笑んだ。

「それはそうと、ご両親から離れて辛うはないのか？」

「両親はもう居りません」と杉丸は淋しげに答えた。

「そうかそうか。わたしもそうじゃ。似たような身の上なのじゃな」

二人は目を見交わすと、微笑み合った。

第三章 潜入〔1〕

〔1〕

「それは……危険でござります。どうかお止め下さい、時護様！」と、時護からの計画を打ち明けられた弥太郎は、色めきたって止めにかかった。

「そうまでなさる必要があるのでしょうか」
と偵治もひたひた呟く。

じつと腕組みしていた時護は、その時やっと目を開けた。

「それは必要なのじゃ。みなの方、分かってくれ。こうでもしないと、あの寺には入れぬ」

「けれども……御怪我は本当でなければなりませんまい」

「そうだ、弥太郎。その傷はお前に頼むぞ」

「がしかし……」

弥太郎は気が重そうに何かむにやむにや口ごもった。

「生かさず殺さずの傷じゃ。剣の上手いそなたなら、何とかしてくれようぞ」

「ですが、時護様。その傷が化膿でもしたら、如何なされます？」

「その時はその時」と時護は静かに言った。「それも仏運であろう」

「失敗したら、お母上やご兄弟が悲しまれますぞ」と弥太郎は必死で止めようと、身を屈ませた。

時護は暫く家来達を見回していた。子供の頃からの親しい家来達、というよりむしろ友人に近い。けれども、時護の決心は固かった。「武士は、何よりも恥を重んじねばならぬ。わたしのことよりも、奈阿姫を取り逃がす失敗だけは、もう決して許されぬのじゃ。これは徳川様からの、密命。運悪く傷が悪化したら、それは我が命運が尽きる時。」

その時は、そなた達が何としても奈阿姫を捕まえるのじゃ。な、分かってくれ、弥太郎！　そしてみなの方！」

時護は静かに頭を下げた。まだ若い家来達は、皆シーンとしている。

けれどもやがて弥太郎が悲痛な面持ちで、言葉を絞り出した。

「分かりました、時護様。深手でないような傷をつけると、仰るのですね。それではわたしがそれを承ります。そしてそのせいで時護様が……もしも……もしもお亡くなりにならば、その責はわたしが追います。わたしも時護様の後を受けて、切腹を……」

「ならぬ！」と時護が声を荒げた。

「命を賭けるのは、わたしだけで沢山じゃ！　後を追うなどもつてのほか！　それに……弥太郎の腕だ、きつとうまくやってくれるはず。そうではないか？」

時護は無理に笑って見せたのだった。

その日の夕刻時、報国寺の門を激しく叩く者達があつた。そして彼らは門番が門を開けると見るや、その場に、ある人物を投げつけるように置くと、急いで夕闇の中に去つたのだった。

ちょうど夕餉に向つていた貞元禅師の元に、慌しく僧の一人が駆け込んで来るや、

「禅師様、ちよつとお耳を！」と禅師に近寄り何事か耳打ちする。

「なに！？　門前に若武者が怪我をして倒れていたと申すか？」

「はい。何人かの若侍達がその者をほつたらかして、逃げてしまつたとのことで、門番は苦慮しております」

「して、その者の怪我の具合は？」

「そう酷くは無い様でございますが、けれどもこのまま返すわけにもいかない有様でして、今僧房の薬師（くすし＝医者）が手当てを致しておりますが」

「そうか……今の若侍達は、喧嘩ばかりしておるようじゃが。戦が無くなつたというのに、血気盛んじゃの。手当てが終われば、僧坊

にて少し休息を与えてあげなされ」

そう言い置くと、禅師は何事も無かったかのように、又箸を上げた。

けれどもその後、禅師がその怪我をした若侍を見舞うと、薬師が禅師に囁いた。

「思ったより、怪我が深いようでございますな。出血もかなりありました。暫くは動かさせませぬ。どうなさいますか、禅師。この者、どの家の者か口を閉ざしておりまする。

多分、己の軽はずみな行いを恥じているのでございましょう」
「そうか」

そう一言言うと、禅師は行灯だけの薄暗い室内に入った。その部屋は、もっぱら病や怪我人の為の僧坊だったが、どことなく陰気な小部屋だ。

一人の若侍が、蒼白な顔をこちらに向け、眼差しを禅師に注いでいた。切れ長で涼しい目元、苦痛を我慢している一文字に結ばれた形のいい口元。

上半身に白いサラシを巻かれているが、所々赤い血が滲む。

「如何なさった、お若い方」と禅師は横に座ると、柔らかな声で尋ねた。

「血気に逸ったかの？」

「かたじけない」とだけ若侍は短く謝った。息をするのも苦しそうだ。

「そこもとのお名前を聞かせて頂きたい」

「わたしは……ただの馬鹿なものでございます。ですが名を名乗って、我が家に恥はかせられませぬ」

「では、なんとお呼びすれば？」

「……柏木とだけ」と時護はとっさに言った。

「柏木。さて、『源氏物語』の成さぬ恋をなさった若君のお名前で

ございますな（＊柏木は源氏の妻の一人に恋をしてしまう人物。後に生まれた不倫の子、薫君の父）

「あ、はあ」と時護は顔を赤らめながら答えた。「済みませぬ、このような名を使います」

「なんの。ここは禅寺。薬師の言う事を聞いて、早くご回復なさいますように、ご養生なされ」

「まことに、相すまぬことでございます」

時護がそう言ったあと、禅師は席を立った。

「ところで、常円」と禅師は廊下に出ると、お付の若い屈強な僧に耳打ちした。

「あの若武者、怪我をするほど乱暴者には見えぬ。それに話し方に品がありすぎる。よく見張れよ」

「はいっ、分かりました」と常円は答えた。

そしてそういう事とは露知らぬ時護は、苦痛と寒気で震えながらも、首尾よく報国寺に潜入できたことを内心喜んでいた。

「柏木、か。不倫の末、死んでいく若者だったな……」

ふと明証しがたい不安が時護を襲い、時護は暗い闇を急に間近に感じたのだった。

〔2〕

〔2〕

時護の怪我は、思ったよりも重くなっていた。

弥太郎からわざと受けた腕と胸の傷口が、初夏には珍しい暑さの為に膿み、幾らサラシを換えても膿と出血は止まらない。高熱も出て、このままではさすがの若い時護の身体も、次第に弱っていくばかりだ。

時護はうつらうつらと朦朧とした意識のまま、床に伏せていた。薬師が時々やって来るが、思わしく回復しないので悩んだ薬師は禅師に言った。

「柏木と申す者、さっぱり良くなりませぬが、如何致しましょう。本名も名乗らず、これではご家族にも知らせられませんな」

禅師は黙っていたが、やはり得体の知れ無い若者の存在を、悩ましく思っていた。

そして時護その人も、次第に焦ってきていた。このままでは、奈阿姫を見つけるどころか、その前に自分が死んでしまうかもしれないのだ。

時護は、後悔していた。けれども、こうするより他無いことも承知している。結局、どちらに転んでも、時護に道は残っていないかったのだ。姫を見つけれなければ、自分が死ぬ覚悟であることを……。

馬鹿な奴よ、我は。追い詰めているつもりが、逆に自分が追いつめられていたのだな。家光様の幕府から、家族の名誉から、己の方が追い詰められていたとは！そしてこの苦痛から逃れたいと、少しずつ願うとは！我は愚か者じゃ……愚か者……。

が、ああ、姫はどこに居るのじゃ。この寺のどこかに、居られる

のか？ 姫は……。

ある日の夢の中に出てきた、14歳の時の姫のあどけない眼差しを、時護は恋しいとまで感じていた。追い駆けても追い駆けても逃げていく奈阿姫は、その黒い髪を乱しながら、チラっと自分を振り返るのだ。その瞳が、何とも色っぽい。

近くに居ります。直ぐ側に……。

声なき声が甘く囁き、時護は目が覚めた。

「ああ、夢であつたか」

「大丈夫ですか？」とすぐ目の前に、茶坊主が、くりくりした目で時護を見つめていたので、時護は驚いた。

「何か夢でも？」

「ああ……そうだな」

「でも、何だか楽しそうでした」

「ははは、そうか」

「ご家族の夢ですか？」と茶坊主が、桶の水に布を浸しながら問う。
「いや……家族ではない。けれども……なぜだか、大切な人の夢だった」

「思い人（＝恋人）、でしょうか」と茶坊主が、ませた言い方をしたので、思わず時護は苦笑いした。

「こら、言い過ぎじゃ」

「熱が少し下がっております」と茶坊主は、濡れた布を時護の額に置きながら、そつと言った。「良かったですね、柏木様。禅師様も心配しておられました」

「そうか」と時護は溜息をついた。そう言えば、少し楽な気がする。

「もう柏木様が来られて、5日になります。ようやくご回復の兆しが現れてホッと致しました。さあて、これから、おかゆを持って参

ります」

「これ、そなたの名は？」

「杉丸でございます」と茶坊主は答えた。「それでは、これにて」

10歳ぐらいの杉丸は、丁寧^{ていねい}に礼をして出て行った。

「佇まいが、どこか他の童^{わらわ}とは違うな」

と時護は敏感に感じ取っていた。

それから二、三日すると、時護は見る見るうちに回復して行った。けれども件の茶坊主は二度と現れなかった。あれは幻なのか、と時護は思う。不思議な茶坊主だ。

やっと床に座って食べられるようになると、時護は本来の鷹のような鋭さを持ち出してきた。そして杉丸の代わりにやってきた、鈍臭い13ぐらいの茶坊主におかわりを頼みながらさり気なく聞く。

「いつか、10歳ぐらいの茶坊主が一度だけ来たが……それからは全く来ぬが、その童は仏のお遣わしになったものなのだろうか？以来、わたしは良くなっていったのだが」

「ああ、杉丸ですね」とそのニキビだらけの茶坊主は言った。

「あの稚児は、普通の稚児では無いのでございますよ」

「ほうお？」と時護は、木の椀を受け取りながら言う。「では？」

「どうやら、尊い方のご落胤とかで、禅師様がお引き受けなされた稚児でございます」

「尊い方？」

「それが」

そう言つと、その茶坊主は辺りをキョロキョロして誰も居ないとすると、それでも身を寄せて時護に小声で耳打ちした。

「柏木様、これはご内密にお願い致します」

「何じゃ、仰々しいな」

「実は……これは噂ではございますが……家光様のご落胤とか」

「ええっ！？」と時護は、思わず持っていた椀を取り落としそうに

なつた。

「家光様の？ まさか……？」

「ですから、これはあくまでも、噂でございませうがね。あつ、わたしとしたことが、言い過ぎてしまつて。ではこれにて」

「いや、待て待て。わたしは何も言わぬ。このような退屈な寺に居ると、そのような突拍子も無い噂も飛び交うのが、必定だ。しかし、杉丸はなぜ来ぬ？」

「それは」と一度立ち上がりかけた茶坊主は又座りなおした。

「実は、杉丸は奥の僧坊に居ります、禅師の大切な客人と申す若衆のお世話をしておるのでございますよ。わたしもチラツとお見かけいたしました、それはそれは美少年であられました。寺の、その道（＝衆道＝同性愛）の者などは、涎を垂らしている有様で。では失礼致しました。ごゆるりと」

「若衆！？」

今度こそ、時護は驚きのあまり、椀を取り落としたのだつた。

それは、姫だ。奈阿姫に違いない！

〔3〕

〔3〕

奈阿姫は、夜も更けた頃合いを見計らって、そつと部屋から抜け出し、報国寺の侘しい裏庭に出た。貞元禅師からは、部屋から出るなど言われていたのに、若い姫にとっては、じつとしていることが耐えられなかったのだ。折りからの涼しい夜風に、虫の声が姫を招く。

事実は膠着したまま、日々が過ぎて行く。けれども、奈阿姫を迎えに来る者もおらず、既に初夏近くなっていた。奈阿姫に焦りが無かったとは言えない。常に誰かに見張られて息が詰り、今まで何とかここまで逃げ延びてきたというのに、これでは何の為に寺を出奔したのか分からなくなっていた。

己の考えの浅はかさに、姫の心は少しずつ蝕まれ、自暴自棄になつていく……。

結局、わたしは逃れられないのだわ、自分に課せられた運命からは。仏の道から逃れることなど出来ようか！ 何処へ逃げたとて、結局は広いお釈迦様の掌の中でしかわたしは生きられぬのじゃ。愚かだったのかも知れぬな……。

暗闇の中で、奈阿姫がそう思案している時だった、突然背後から肩を掴まれたのは！

「誰じゃ、何者なのじゃ！」と姫は低い声で叫ぶと、クルリと振り返った。目の前には、中背の若い僧が居るではないか。

「菜の花殿……」とその若い僧は、苦しそくに言いかける。

「何じゃ、この手を離せ！」

「す、済みませぬ」

そう素直に言つと、その僧は手を離したものの、その場から去るうとはしない。奈阿姫は、自分が短剣を帯びていないことを後悔した。それよりも、部屋から勝手に出てしまったことを、もつと後悔していた。

「菜の花殿、どうかお聞き下され」と僧は苦悶しつつ続ける。その姿は、危険な感じではなかったが、どこか思い詰めた表情だ。

「どこの誰ぞとはお聞き致しませぬ。けれども、わたくし、順按じゅんあんの胸は、あなた様を見る度苦しゅうなるのでございます」

「え？」

「菜の花様……お慕いしております」

「馬鹿な！」と奈阿姫は一蹴した。どうもこの順按という若い僧は、奈阿姫が男だと思い込んで、あるうことか懸想（けそう＝恋い慕う）しているようだ。この時代にはよくある話ではあったが、もとより奈阿姫は男子ではない。

けれども、ここでは奈阿姫は、あくまで男子であり続けなければならぬのだ。

「済まぬが、わたしにその気は毛頭無い」と奈阿姫は素っ気無く言つた。

「そうですか。けれども、禅師様に匿われているとなれば、禅師様があなた様を……」

「戯けたことを！」と奈阿姫は叫んだ。「そのような関係ではない」

「では、なにゆえ、あなた様は一室に籠ったきりなのでありませんか？ 禅師様の思われ人でなければ」

「お前は、勘違いをしている」と奈阿姫は順按に言つた。

「わたしは……禅師様からの庇護を受けてはいるが……あくまでも、他のことでだ」

「そんなにお美しいのに……誰からも思われていないはずがありません」

と奇妙にきつぱりと順按は言った。

「わたしの気持ちは本気です。決して遊びでもなく、戯言たわ言でもありません。あなた様のことを考える度、仏のことすら忘れてしまうのでございます。煩惱がわたしを支配し……何も耳に入って参りませぬ」

「勝手にするがよい」と奈阿姫は冷たく言った。

「一度でよいのでございます、菜の花様。わたしの思いを遂げさせて……」

「何をしておられるのですか、菜の花様」

そう背後から問うた声は、灯火を掲げた杉丸だった。その声を聞くと、順按はあとも見ずに暗闇に駆け出して行った。

「菜の花様、勝手に出ては困ります。皆が皆、あなた様のことを男だと思つて、慕つておる者、数知れず。わたしはあなた様に何かがあると、禅師様から叱られますので」

「済まない、杉丸。わたしもうっかりしていた」

と奈阿姫は、動揺する心を隠してそう静かに述べた。

「ま、美しいものを愛でたいのは仕方ありませんが」と杉丸はませた口調で言う。

「そうそう、実は門前で切られた若侍がここで手当てを受けておりまして、その方が一度あなた様にお会いしたいということでございます。」

もう20日程前でしたが、ようやく何とかご回復し、明後日にはこの寺を出て行くとか。その前に、評判のあなた様のお顔だけでも拝見したいと。本当に、殿方は“好き”ですね。男ばかりの世界では仕方ありますまいが」

「その方の名は？」

「柏木様と申します」

「柏木……『源氏物語』の中に出て来る人物と同じ名じゃ。して、その者、わたしのことを男だと信じておるのか？」

「はい。その方も、傷が癒えるとなかなか眉目秀丽なお方なのですが……まさか、妙な行為はなさりますまい。ただ貴方のお顔が見たいだけ仰せてございます」

「そうか」と奈阿姫は呟く。

「お命も危なかった方でした。けれども、あなた様のご意見通りのお薬をさし上げると、みるみる内に良くなり、一度御礼を致したいとのことで。わたしが二度目に伺った時に、そう仰せて」

「命が危うかったと？ ああ、その方か！ では良くなられたのじやな」

「はい」と杉丸が明るく答えた。

「ちょうど宜しゅうございました。今から少しだけそちらにお出向きなさいませ。お顔を拝見するだけで、満足とのことでしたので」

「さぞ危ない目に合われたらしい。それは良かった。そういう方の願いは、聞いてさし上げねば。けれども、こっそりとほんの一時だけじゃぞ」

「はい、もちろんでございます」と杉丸は答えると、先に立って歩き出した。奈阿姫は杉丸の後に従ったものの、どこか違和感を抱くけれども、その傷ついた侍を哀れと思う気持ちの方が勝ってしまっただった。その相手が、自分を待ち受ける狼だとは知らず。

〔4〕

〔4〕

時護はわざとらしく布団を被りながら、その足音が近付くのを待っていた。今まで長い間待ちに待っていた瞬間が、やっと訪れようとしていたのだ。

「ああ、み仏の加護じゃ、やっと姫に出会えるぞ。そしてもう二度と逃さぬ！ 姫をここから連れ出し、寺に返す時がやって来た。これでわたしの任務も終わる。家名も傷つかず、姫も助かるのじゃ……良かった。ここまでする甲斐があったというものだ」

二つの忍び寄る足音がピタリと止まった。

「では、お一人でお入りを。わたしは少し離れて待つております」と杉丸が言ったので、奈阿姫は躊躇いもせず中に入った。スーツと板襖が閉められ、乏しい灯火の元、凜々しい若衆の姿が近寄るのが、時護に見えた。

「柏木殿か？」と言いかける若衆は、やはり奈阿姫その人！ けれども二年前とは違い、臭うような麗しい色香だ。これでは、寺の僧達が騒ぐのも無理は無い、と時護は思う。けれども、そういう雑念は直ぐに払わなければならない。

「あ、はい、さようで」

「今回は、まことに大変でありましたな」と奈阿姫の声がした。

「菜の花様、もう少し近こう」と時護は哀れっぽく頼み、それに従って奈阿姫の顔が近寄って来た。

けれども奈阿姫が時護に気付いたのも、時護が奈阿姫の手首をむんと掴んだのも、ほぼ同時だった。

「あ！ そなた……」と奈阿姫。

「姫君ですな」と時護の方は押し殺した声で言い放つ。

「離せ」と奈阿姫は衝撃を受けながら、小声で叫んだ。けれども時護は万力のような力で、決して奈阿姫の手首を離そうとはしない。

「いいえ、離すものか！ 離しませぬぞ、豊臣の姫君。観念なされませ、もう逃亡は終わったのですぞ」

そう言うのと、時護は布団の上に取り上がった。

「姫君、明日はわたしと共にここを出るのでございます」

「嫌じゃ」と奈阿姫は尚も抗った。もみ合う二人の顔が近寄るや否や、ほとんど同時に倒れ込んだ。時護の直ぐ目の前に、奈阿姫の顔があり、二人は荒い息をつきながらお互いに見つめ合う。

「姫……」と時護は喘ぎながら言うと、衝動的に奈阿姫の口元を自らの口で塞いだ。余りにも唐突だったので、奈阿姫も一瞬何が起ったか分からず、そして又時護の方も、なぜそうしてしまったのか自分でもうろたえる。

けれども奈阿姫はハッと我に返ると、

「馬鹿者！ 何を致すのじゃ、柏木殿！」

と、口を離れた途端にそう叫ぶと、時護の頬を掴まれていない手で思い切り引つ叩いた。わざと声を大きくしたのは、相手が時護だと悟られない為だ。

それを瞬時に察したのか、時護も又我に戻った。

「あ、これは失礼を仕りました、菜の花殿」

と時護は大声で言う。けれどもまだ奈阿姫の腕は離さず、直後、押し殺した声で耳打ちした。

「随分探しましたぞ、姫君」

「離せ、と申しておる」

「いいえ、例え離れたところで、あなたのご身分はもう知れてしましますぞ。宜しいのですか」

「そなたこそ、偽りの名を騙ったと言われよう」

「けれども、わたしの背後には幕府が居りまする」と時護は不気味

に囁いた。

「それでは……先ほどの口吸い（＝口付けのこと）は何じゃ!？」
と奈阿姫も又負けずに言い返す。髪が乱れて一部が頬にかかり、1
6歳の乙女の顔になった。

時護は一瞬、「可愛い」と感じて、我が身を恥じた。

「あれは」と時護は言いよどむ。

「あれは、咄嗟に……つまりわざとでございます。この廊下の陰に
はどなたかが居りましょう？ それゆえ……」

「杉丸しか居らぬ」と奈阿姫は答えた。「あの茶坊主は、頭の良い
童じゃ。そしてわたしが女であることも気付いておる」

「姫君」とそう問いかける時護は、もう我慢がならなかった。なぜ
必死になって奈阿姫を追っていたのか、その目的すら判別しがたく
なっていたのだ。己の欲望からか、それとも徳川幕府の命だからな
のか？

時護は奈阿姫をぐつと引き寄せると、再び口付けをした。今度は
なぜか奈阿姫も逆らわない。二人は肌をピタリと合わせたまま、長
い間口付けを貪るように続けていた。

「わたしは……わたしは、自分がもう分からない……」
と時護は喘ぐ。

「我が身を傷つけてまで、あなたに会おうとしていた目的が何か」
「わたしを、寺に返す為であろう？」と問いかける奈阿姫の声音が、
いつの間にか少女のそれに返っていた。

「それはそうだが、そしてその為にここまで来たと言うのに……あ
なたに会った途端、そんなことはどうでも良くなった。長い間、あ
なたのことが忘れられずにいたのだと、今知った……」

「わたしも……お慕い申し上げておりました」と奈阿姫は、手首が
離されたことも気付かずそう静かに答えた。

「姫!？」

「お慕いしておりました。もう二度と会わないと思っていましたのに。だってあなたは、わたしの仇、そしてわたしは先ほどまで、追われる身でありましたのに」

「姫！」

そう小さく叫ぶと、時護はしっかりと奈阿姫を抱き締めた。

〔5〕

〔5〕

「わたしもそなたを……慕っていた。今はひと時、わたしの者になつてくだされ」

と時護は奈阿姫の耳元で囁いた。その言葉は、甘く奈阿姫を包み込む。

「この夜の闇が、全てを隠すでしょう。今までのことはもうよい。今はただ、そなたと一つになりたいのです」

奈阿姫は、初めて抱かれる男子の胸元に身を寄せながら、愛される悦びを感じていた。

時護が姫の袴を解き、そしてその下に手を差し出し優しく触つても、奈阿姫はじっとしていた。時護はまだ傷が万全ではないせいか、どうしても心もなくなるのだが、それもまたゆかしく感じられる。やがて姫の下半身が時護に曝け出されたが、奈阿姫は格別恥ずかしいとは思わなかった。その白い下肢や、そこに隠された秘密の場所すら、今の時護には卑しい欲望からというより、神聖で愛する人の素晴らしい場所を頂くのだ、という気持ちになる。

処女らしく堅く閉ざされたその場所は、最初は拒み、そして徐々に開けられ、時護を迎え入れた。

「痛むのですか」と時護は奈阿姫を気遣いつつ、そう甘く尋ねる。姫の身体が反り返っていたからだ。

「あ、ええ、少し。でも、いいのです」

「後悔はなさいませんか」

「後悔など、どこかへ捨ててしまいました」と奈阿姫は身体を開きながら、そう同じく甘く答えた。男の身体を知り、そして知ることがどんなものなのか、けれどもどんなに痛くても、その痛みすら愛

の快樂の中に消えてしまふのか……それを初めて知ったのだ。
危険など、今の二人には考える余裕さえなかった。

「ああ、姫！……姫……愛しい……我が姫……」

と時護は至福の快樂の中で奈阿姫に囁き、そして高みに登りつめる。
このような感覚は、遊女では決して味わえなかった。快樂の中味は
一緒に、質が違う。そして心が、萌える……。

ふと見下ろすと、奈阿姫の瞳が濡れていた。

「これはこれは！ 大層痛むのですか？ わたしが乱暴にしたせいで」

「違うのです」と奈阿姫は答えた。「嬉しゅうございます、わたし
そう言つと、奈阿姫は幸福そうに時護の胸を掻き抱いた。

「一生、わたしはお慕いする方とは、まぐわえないのかと思つていました。わたしには、睦みごとはないのかと諦めておりました。ですから、千代は幸せにございます」

時護は奈阿姫を見つめながら、微笑んだ。奈阿姫もまた、微笑み返す。

「このひと時が、永遠に続くと言しいのに！」

「ああ、そればかりは」と時護は残酷な現実を目覚めた。「もう二度と出来ませぬとは！」

「夜の闇もいつかは薄明かりに消え果てしまいますね」

と奈阿姫も答えた。

そして二人は起き上がった。

「何と言う運命じゃ。我らはもう二度と……」と時護が言つと、

「わたしは寺に戻らねばならないのですね」と奈阿姫も呟く。

「自ら戻られると、罪は問わないとの家光様の仰せにございます」

そう答える時護は、既に武士に返っていた。

「もう逃げ仰せぬのじゃな」と姫も言つた。「よいでしょう。寺に戻ります。そなたの手柄にもなりましょうし」

奈阿姫が頷くと、時護は再び奈阿姫の口元を奪った。

「この契りは二人だけの秘密と致しましょうぞ」

「分かりました」

そう答えると、奈阿姫はニツコリと笑った。牡丹の花のように。

二人は身なりを整え、奈阿姫も又居住まいを正すと、静かに立ち上がりそして襖を開けた。その直前、チラッと時護を振り返って見たのだが、時護の視線が違う場所にあるのに気付いた。

「何じゃ？」

「あちらに」と時護の驚愕した顔がある。その視線の先には、屈強な常円、先ほど自分に言い寄ってきた順按の顔が並び、何よりも恐ろしいのはその端に、貞元禅師が居たことだった。

彼らは突っ立ったまま、じつとこちらを見つめている。そのただならぬ有様に、奈阿姫の足が止まった。

「菜の花様、いや、奈阿姫殿。ここで何をしておられましたのじゃ」

自分の素性をズバリと言う禅師の言葉に、奈阿姫は戦慄を覚えた。

「我れを奈阿姫と申すのか!？」と奈阿姫は驚愕して立ち尽くす。

「もう嘘は通用いたしませぬな」と答える禅師の声は冷たい。

「分かった。わたし奈阿は、明日寺に戻る決心をしたところじゃった」

「決心はまことに良いことなれど、今なさったことは……」

「何じゃと?」

「殿方とまぐわうとは! しかも、寺の中では、仏の罰をも恐れぬさまではございませぬかな」

「こ、これは違う!」と時護がにじり寄った。「間違いじゃ。我らは……」

「密会なさったのか、そこもとは」

「それも淫らな行いで、寺を汚しよって」と順按が皮肉っぽく言った。

「お二人は、以前からこがれておった間柄でしたか。そして柏木殿、そこもとは姫に会いたいが為に、こちらにいらしたのか！」

「違う！ わたしは森時護と申す。幕府の命を受けて姫を探し出すために、ここに潜入していたのだ」

「それなら何故、姫とこのような淫らな行いをなさっていたのか？ 共に駆け落ちしようとなさっていたとしか思えぬ！」と禅師は怒鳴りつけた。

「住持となられる姫とまぐわうとは、大罪ですぞ！」

その時、奈阿姫と時護は、運命が暗転したのを覚えた。

〔6〕

〔6〕

奈阿姫はもとの部屋に戻され、そして以来以前より厳しい監視を受けていた。時護はさすがに病後ゆえに、縄を打たれてはいなかったものの、常円が常に見張っていた。二人はあの時以来引き離され、どんな言い訳も聞いてもらえなかった。

確かに、激情に身を任せたとは言え、徳川方の時護と豊臣の血を引く奈阿姫にとっては、あつてはならぬことだったのだ。

関が原以前の昔ならば、二人の関係も大目に見てくれていただろう。けれども、今はそうではない。そして、貞元禅師は、二人に裏切られたという思いを激しく受け、許そうとしても許すことが出来なくなっていた。

さりとてどうして良いか分からず、禅師は悶々と日を送っていた。追う方の時護と、追われていたはずの奈阿姫が、いつどうしてそのような関係になってしまったのか……もはや若いとは言えない禅師にとつては、どうしても理解しがたい不可解なことにしか思えない。いや、激情に身を任せて契つたはずの当人の二人でさえ、どうしてこうなったのか、本当のことは分からなかった。ただ夜の闇の魔法、そして以前の一度のときめく邂逅だけで、厳しい環境で育った若い男女が萌え上がって行ったのは、それは自然の成り行きだったのかも知れないが。

なぜなら、二人は知らない内に、お互いに憧憬を深めており、そして後の無いぎりぎりのところで、もうこうする他、思いを遂げる手立ては無かったのだからだろう。

少なくとも、奈阿姫も時護も後悔だけはしていなかった。あの切羽詰った甘く切ない夜の出来事は、とりわけ奈阿姫にとつては一夜

限りの夢として胸の奥に仕舞っているただ一つの、艶かしい思い出になっていた。

けれども一方では、自分のせいで、時護の運命がどうなるのか心配で心配で、奈阿姫は食事にも満足に手をつけれない。杉丸の運んで来る食事にも、ほとんど残すことが多くなった。

そして思い出すのは、恋しい人のことばかりだった。面影だけを慕い、ただ溜息だけをつく毎日が続いた。けれどもそれも直ぐに過去の出来事になる。多分近々、奈阿姫は東慶寺に送還される手はずになっていた。そして直後、髪を下ろして尼になり、住持に就任することが決まっている。

もう二度と、殿方との逢瀬は出来ない身分になってしまうのだ。もちろん、時護と会うことはもう無いだろう。

「菜の花様……いや、姫様、食事にお手を付けられませんと、わたくしが叱られてしまいます」

と、ある日、膳を下げて来た杉丸が突然重い口を開いた。既に奈阿姫は、どこから借り受けてきた質素な女ものの装束に着替えさせられており、せっかくの橘由比の好意の水浅葱色の小袖も、甲斐のないものになっていた。

けれども、女人の装束に戻った奈阿姫は、本来の麗しさを益々際立たせてはいたが、杉丸の呼びかけにもほとんど反応しなかった。

「姫様……」

「分かっております。けれども、食欲は無いのでございます。相済みませぬ、杉丸」

そう答えると、奈阿姫は少しだけ頭を下げた。

「こんなことになって、禅師様に恥をかかせ、本当に申し訳ないと思っております。けれども、わたしは一片たりとも後悔はしておりませぬ」

凜とした奈阿姫の言葉に、杉丸は黙り込んだ。けれども、直ぐに、

「あちらの……殿方も又、お食事は余り摂られていないとかお聞きしております」

と言いつ添えた。

その言葉に、奈阿姫は激しく動揺した。

「時護様も！？……で、お体は大丈夫なのか」

「時護と言うのですね」と杉丸はませた口調で言う。「お体は大丈夫の様子ですが、心が折れてしまっているようでございます。それに……言い難いことですが、お咎めがあるかもしれないということですが」

「あの方のせいではありませんね！」と突如奈阿姫は叫んだ。その声に、燃えるような気性が現れているのを、杉丸は感じ取った。

「わたしのせいなのです！ わたしが抗えば良かった！ 叫べば良かった！ あの方を拒めば、それで済んだものを、わたしは、わたしはその後のことも顧みず……契ってしまったのです、激情の赴くままに。そうするのではなかったのかも知れませぬ」

「男の方と女人の間柄と言うものは……わたしには分かりません」

「そなたには無理であろうの……理解するのは」

と奈阿姫は素直に答えた。

「けれども、いずれそなたも成長し、分かる時が来るかも知れませぬ。わたし達は、初めて会った時から、こうなるのを希望していたのかも……。いや、わたしにも本当のことは分からぬ。まして、時護様にも分かるはずがございません」

けれども、これだけは言っておきましょう。罪はわたし一人で充分でございます。殿方を誑し込んだ女として、わたしを断罪してもよいのです。でもあの方だけは、お救い致したい」

激しい奈阿姫の言い方に、杉丸は気おされていたが、やがて言った。

「お二人が、どちらも徳川様のお方々ならば、問題は無かったのか

もしませんね」

「そうですね……わたし達は、どちらも過去の家名と血筋の為に、交わってはいけなかったのでしょう」と奈阿姫は、ほとんど聞こえないような小声でそう言った。

「わたしは徳川様に拾われた身であつたことを、あの陶酔のひと時、忘れておりました。本来は、兄国松のように殺されていた身であつたのを……」

〔7〕

〔7〕

橘由比は、奈阿姫が報国寺に居ることを悟られてしまったのを聞いた。それは、ちょうど前日、これ以上黙っていることに耐えられなくなった佐吉から、時護によって夜道捕まり白状させられてしまった、と告白された直後のこと。寺からの文で、全てを知ったのだ。その貞元禅師からの文には、寺にまんまと潜入した時護に、姫が見つかってしまったこと、そして事もあるうに、奈阿姫と森時護が契ってしまったことなどが書かれてあった。それは由比にとっては、衝撃的な出来事だった。

せつかく、奈阿姫を護つてやろうとしていたのに、禅師によれば、二人はどうやら密会する為に、そしてもしかすると、二人して駆け落ちする為に、報国寺で会っていたと言うのだ。これをどのように徳川方に報告すればよいか大いに迷っている、と禅師の文はそう認められていた。

「まさか！ あの姫君と森殿が……密会を！」と由比は驚愕して、その文を握り潰す。

「わたしは、あのいたいけな姫によって、利用されただけなのか？ いや、可憐に見えて、その実、既に時護と情を通じておったのか！？ なぜじゃ？ いつ、二人は知り合つたのじゃ？ いつ……？」考えれば考えるほど、由比には分からないことばかりだった。又、時護が、自分の身を傷つけてまで、しつこく奈阿姫を追っていたのは、それは幕府の命令だけではなかった、というのも不可思議に感じる。

けれども、禅師によると嘘偽りは無いと言う。二人は、明らかに恋する仲であり、事もあるうに寺の中で、睦みごとをしたのだと。

それも、奈阿姫は豊臣最後の血筋の姫君であり、そして時護は由緒ある徳川方の者、先の大御所秀忠のまた従弟なのだ。

由比の驚きは、又、東慶寺の秀法尼も同じことだった。いや、むしろ由比よりも秀法尼の方が、驚愕と絶望は激しい。

「あの姫君、虫も殺さぬ容姿にてありながら、徳川の若君と恋仲であつたとは！ それにしても、いつ二人は出会つたのであろう。7歳の時より、この侘しい寺にてずっと監視し続けていたと言うのに、そして豊臣の血筋を絶やそうと画策して、早く尼にしようとしていたと言うのに、それも時護殿と出来ていたとは！

はてさて？ 時護殿も、一体どういう見で、あの姫に誑し込まれたのであろうか？ 分からぬ、わたしにはさっぱりじゃ」

秀法尼は頭を抱えた。けれどもキツと顔を上げ、新たなる難問にぶつかったのだった。

「ところで、もしもお二人の間に、お子が出来ていたら如何しようぞ！？ このままでは奈阿姫様も、お命が危ない！ 時護殿も又、このような徳川への裏切り行為、許されるはずが無い。ああ、わたしはどうすれば良いのじゃ……」

橘由比と秀法尼の嘆きと懊悩も知らず、二人は部屋に監禁されていた。けれども、やがて何かのお沙汰が下されると覚悟して、日々空しく過ごしているばかりだったが、ある日の夜更け、騒々しい鐘の音と廊下をバタバタ走り回る人々の足音で、奈阿姫は飛び起きた。耳を澄ますと、「火事じゃ、火事……！」と坊主達の騒ぐ声がある。

「なに？ 火事じゃと？」と奈阿姫が恐怖に凍り付いていると、やはり煙が襖の隙間から入り込んできた。

「小火^{ほや}じゃ、しっかりせい！」とたしなめる禅師の野太い声もする。
「小火^{ほや}か……けれど、時護様は？ 時護様は何処じゃ？」

奈阿姫は夜着に小袖を被ると、布団の上で居住まいを正した。

「ここで焼け死ぬも、これも仏罰かも知れぬな……」

姫は覚悟を決めて、静かに座していた。

けれども、重い板襖がスルスルと開き、杉丸の顔が覗いたではないか。背後には、遠く紅蓮の炎が見え、杉丸の顔がほの赤い。

「杉丸か？」

「姫様、こちらへ！ 早くこちらへ！」

「どこへと申す？」

「わたしが案内あない申し上げます。ご無事な場所へと」

「出てもよいのか、わたしが」

「小火ほやとは言え、危のうございますから」

「でも」

「お早う！」と杉丸はもどかしそうにやって来ると、奈阿姫の手を引つ張った。そして、

「今しかありませんよ、姫君」と囁く。「逃げるのなら、今しかございせん」

「逃げる……わたしが？」と思わず奈阿姫は立ち止まった。

「わたしは、時護様を置いて、一人逃げることは出来ませぬ！」

「時護様も一緒にございます」と杉丸はキツパリ言った。

「何と！？」

驚きつつ奈阿姫が立ち上がると、煙の中に確かに時護の姿があった。病み上がりの蒼白な顔と同じ白い小袖に、どこから得たのか鼠色の薄衣を羽織っている。

「時護様」

「姫……もうこれしかござらぬ。逃げましょうぞ！」

「でも」と奈阿姫はどうしても決心がつかない。そして背後のめらめら燃える炎もまた、奈阿姫の足を止まらせた。

「杉丸、逃げると言うがどこへじゃ？」

「良い所があるのでございます」と杉丸は自信有りげに答えた。

「姫！ もう時間がござらぬ。杉丸様を信じましょう」

「杉丸……様？」

奈阿姫が怪訝な顔をしていると、我慢がなくなった時護は奈阿姫の手首を引っ張り、自分の胸に引き寄せた。

「もうこれしかないのです、姫。わたしと逃げて下さらぬか」

その言葉に吸い込まれるように、奈阿姫は時護に抱きつき、そして三人は煙の中、外に飛び出して行った。

第四章 逃亡〔1〕

〔1〕

報国寺で小火^{ほや}があり、幸いにも本堂などに燃え移らなかったものの、僧坊の一部が焼けてしまったことを聞いた矢先、弥太郎や嘉幸^{よしゆき}達は、もっと衝撃的な事実を知った。

それは、火事で一時的に逃げ出した小僧の一人が、一晚宿を借りた芦田源衛門の家臣に語ったことらしく、

「小火によって、奥に匿われていた若衆に化けていた美しい少女と、傷ついて寺に保護されていた不貞の輩の若侍が、あるうことが共に逃げ出してしまった」

と言ったのだ。そしてその小僧は更に追い打ちをかけるようなことまで口走ったという。

「どうやら、このお二人は以前からなさぬ仲であり、駆け落ちしてしまつたらしい」と……。

報国寺の門前に捨て置いたまではいいものの、その後とんと連絡の無かつた時護がどうなつたか心配、というより不安になつていた家来達は、啞然として互いに顔を見合すばかりだった。

「まさか、そんな事があつていいはずがない！」と弥太郎が叫ぶと、「よもや、時護様がそのような戯^{たわ}けたことをなさるはずが……」と嘉幸^{よしゆき}も言い継ぐ。

けれども、偵治だけはゆっくりした口調ながら、誰もが言いたくないことをズバリと言つたのだつた。

「がしかし、小火は昨夜だと言う。本来ならば、時護様は真つ先にここに姫君をお連れして下さるはず。それが今でも出来ぬとなれば……その小僧の言つたことにも一部、真実が隠れているかも知れんな」

この言葉を聞くと、皆がシーンとなった。弥太郎が拳を握ると、唐突に膝を叩いて言う。

「そんな……そんな馬鹿な事があっていいのか！ 時護様は、命がけで奈阿姫を追っていた。それが、よりもよって、豊臣最後の姫と駆け落ちだと！？ 馬鹿な！」

「されど弥太郎、奈阿姫は麗しい女人だと聞いておる。もしや、あの妖婦に誑かされたとしてもおかしゅうはないぞ」と偵治さたはるが尚も言った。

「姫が時護様のことを知って、誑かしたと？」と弥太郎。「そうだな……時護様には、子供の頃から親の決められた許婚がおったが、余り好きではないと仰っておられた。それもこれも家名の故だな。」

それに、余り遊女などと遊ぶことも無く、品行方正にあられたゆえ、尚更奈阿姫の色香に迷ったとしても、変ではない」

「弥太郎、それに皆の者、もう少し待とうではないか？ 必ず時護様は、姫君をお連れ戻されるはずじゃ。早々早まるな。小火で頭がおかしくなった小僧の戯言など信じるな」

と誰かが言つと、

「そうじゃ、時護様を信じようではないか」とあちこちから声が上がった。皆も又夫々頷きあった。

けれども、その頃やほ小火のドサクサで逃げ出した奈阿姫と時護は、報国寺奥の洞窟に逃げていたのだった。

杉丸の先導の元、辿り着いたのは、足利氏の墓群と言われている報国寺境内の端の洞窟だった。

「一応ここまでは誰も来ないでしょう。ここは聖所ですから。それに怖い場所だとも言われ、ここの僧の方々も滅多には参りません。足利氏の魑魅魍魎が出ると言われているのです」と杉丸は二人に告げた。

「ですが実はこの奥に、狭いですが通り抜けられる横穴があるのでございます」

「なぜそなたは知っておるのじゃ？」と訝しげに奈阿姫が問いたただすと、杉丸は闇の中でニツと笑った。

「一人で淋しかった折、時折ここで泣いておりました」

「まあ、それは可哀想であつたの」と奈阿姫は我が身を顧みてそう呟いた。

「その時、野良猫がここに来て、ふっと奥に消えたのでございます。それでわたしはその猫を追つて、奥に入り込みました。少し怖かったけれど……でも、猫に会いたかつたゆえか、それ程恐怖を感じる暇もなく……その時狭い横穴を見つけました。奥を覗くと、ずっと先に微かな光を感じました」

「それは！」と時護も驚いて言つた。この杉丸の可愛らしい容貌には相応しくない、ずっしりとした男気や勇気を感じたからだ。

「明日になりましたら、又来ます。その穴は見つけられ難いゆえ、わたししか知りません。どうかお二人、それまで決してここから出られませぬように。幽鬼が漂う場所ではありますが、それも仕方ないことです。」

けれどもお二人一緒ならば、何とかなりましょう」

そう落ち着いて述べる杉丸に、奈阿姫が言つた。

「そなたはなぜ、わたし達を逃してくれるのじゃ？」

言われた杉丸は、微かな灯火の中で黙り込んだ。

「ともかく、わたしの言つたようになさいます。では」

そう一言だけ言つと、杉丸は闇に消えた。あとは漆黒の洞窟に、奈阿姫と時護しか居ない。

「行つてしまいましたな……」と奈阿姫はぼそつと言う。「わたし達を残して」

「外の阿鼻叫喚もここまでは来ませぬな」と時護も相槌を打つた。

「あの者を信じて宜しいのでしょうか」と奈阿姫が心細そうに言った。すると時護は直ぐ側に息づく奈阿姫の頬をそつと撫でた。

「信じねばどうしようもありますまい、姫」

「どうしてこうなってしまったのか……。時護様には危険な目に合わせてしまいました。わたしの為に、本当に相済まないことでございます」

時護は奈阿姫の肩を引き寄せた。

「そんなことはない。危険な目に合わせたのは、むしろわたしの方です。あなたを抱いてしまった故に、こうなってしまった。禅師殿も我らを信じては下さいます。せつかくあなたが、自ら寺に戻ろうとしていたというのに、禅師殿達は誰も……」

「もうよいのです」と奈阿姫は、暗闇の中でも時護の胸の温もりを感じた。

「千代は今、幸せでいます」

〔2〕

〔2〕

暗闇の中、奈阿姫と時護は暫く無言で居た。けれどもやがてどちらもホツとしたのか、奈阿姫は静かに顔を時護の胸から離れた。

「時護様……千代は決心致しました。明日、わたしは自ら寺に出頭し、時護様とはお別れ致したいのでございます」

「え？」

「これ以上あなた様と共に居ると、あなた様の身が危険だからでございますわ。わたしと共に逃げたと喧伝されると、後々のあなた様の名誉にも影響致しますようし、何よりも変な噂を立てられるかも知れませぬ」

「姫！」

「ご心配なく。わたしは決してあなた様と逃げたとは言いません」

明日、杉丸が来てくれ、その先の穴から出た折に、別々の路を行きましょう、ね？」

時護は黙り込んでいた。そして手探りで愛しい奈阿姫の顔をなぞった。

「あなたと別れるなぞ……考えられぬ」

「けれどもそうしなければ、どちらも捕まってしまう。それに、もうどこにも逃げられせんわ。狭い鎌倉……いずれは捕まえられ、時護様に罰が下りでもしたら、千代は生きてはいられません……お願いでございます、時護様。ひと時の逢瀬、一生の良き思い出でございます」

時護はそれに答えず、無言で姫を抱き寄せた。

「こうしているだけで、嬉しゅうございます」と奈阿姫は囁いた。

「江戸に参ろう！」

唐突に時護が言ったので、奈阿姫は暗闇で見えないはずの時護の顔を見上げた。

「何と仰せでございますか!？」

「江戸に行くのじゃ」

「けれども江戸は徳川様のご城下。切り通しも通らねばなりますまいが、それは無理と言うもの、不可能でございます」

「そうかどうかは分かるまい。何かに化ければいいのだ」

「狐か狸、物の怪の類ならば出来るでしょうが」

そう言つと、なぜか奈阿姫はクスリと笑った。

「冗談ではありませんぞ」

そう言いつつ、時護も又つられて笑った。時護の脳裏には、鮮やかに奈阿姫の笑みが見えていたのだ。

「我らはもう、昔の因縁は断ち切ろうでは無いか、姫。あなたは豊臣の姫ではなく、わたしも又徳川の者では無い。単なる恋しい者同志。江戸で新しい生活をしようではないか。わたしは長屋に住み、名を変えあなたと夫婦めおととしてひっそり慎ましく暮らしたい。さすれば今まで、森家の嫡男として押し付けられていた、重い責務から逃れることが出来る。

本当はわたしは自由に学問し、自由にくらしていたかったのだ。姫、このわたしの言葉、お分かりか？」

「ええ」と答えつつ、奈阿姫にはそれが不可能に近いことを知っていた。

「姫、我らは別の人間になりましょう。さてさて、岐わかれ道と言う所をご存知か？ 実は、その北には、大塔宮（おおとうのみや）だいたうのみや〃大塔宮護良親王）様の墓があると言われておる淋しい場所……そこに暫く隠れておりましょう」

「大塔宮様と言えば、確かその辺りに、土牢のあとがございました

ね」

「おお！ 知っておられたのか」

「もちろんでございます。あの悲劇の宮様のお話は、ここ鎌倉ではよく語り継がれておりますわ。でも女人には淋しい所ゆえか、寺では行った者はおりませぬが。ただ道すがらのどちらかの尼様が、そこへ行かれて大塔宮様の菩提を弔ったとのでございました」

奈阿姫には、その『太平記』の悲しい物語が思い出された。時護はその辺りで身を潜めようというのだ。確かに、あの辺りは余り人が来そうに無い場所かも知れなかった。けれども姫は嫌な予感に身を震わせていた。

時護の言っていることは、子供じみていて、とてもそれが真実になるとは信じがたい。けれども、それもひと時の夢。奈阿姫は、いずれ時護からも離れるつもりでいたのだ。なぜなら、それもまた時護の為なのだから。

このままでは、時護は大罪を背負うことになる。彼は罰せられ、多分切腹。そしてお家も断絶になるかも知れない。それを時護が知らぬはずが無い。知っていながら、時護はわざとそこから顔を背けているのだろうか。

やがて奈阿姫は、時護の胸の中でいつの間にか眠ってしまった。た。

起きたのは、誰かに身体を揺らされたからだだった。

「姫様……お起き下さい……姫様」

それはくぐもった声だった。

「はっ……ああ、いつの間にか眠って仕舞った」

「姫様、もう朝でございますよ」

それは杉丸の声だった。微かな灯火に杉丸と時護の影が映る。

「寺の小火はもうすっかり収まり、皆はあなた様方を血眼で探しております。急がねばなりません。その穴と言うのをお教え致します。ここに糶ほしいいがございますゆえ、それを持ってお逃げ下さい」

「かたじけない、杉丸殿」と時護が頭を下げた。

「それじゃわたしの後を付いて来て下され」

杉丸はそう言つと、這い蹲つた。

「杉丸殿」と今度は奈阿姫が後ろから尋ねた。

「なぜそなたは、我らを助けようとなさるのです？」

杉丸は這い蹲つたまま暫く黙り込んでいたが、ややあつて答えた。

「さあ、それはなぜでしょうね。けれども、わたしも実の父から見放され、ここに預けられた身。姫様の境遇に、どこかわたしを重ねていたのかも知れません。鳥のように、又野良猫のように自由であつて欲しいと、そう願つたのかも」

「見放された……？」

と奈阿姫が呟くと、時護がそつと耳打ちした。

「姫、杉丸は家光公のご落胤と聞いておりまする」

「え？」

と驚愕した奈阿姫は思わず振り返つた。けれども、時は容赦なく過ぎ行き、待つてはくれない。程なくして、三人は暗闇にポツカリと開く、外へと通じる狭い穴に到着したのだつた。

〔3〕

〔3〕

地上の光は眩しい。けれども振り返ると、生い茂る雑草でもうその穴は見えず、先導してきた杉丸の姿も見えなかった。

時護は泥で汚れた奈阿姫をひしと抱いたが、それは一瞬のことだった。例え汚れようと、奈阿姫の麗しさ、匂い立つ品位は隠しようが無い。けれどもそれも、ほんのひと時のあだ花のように思われた。姫は今疲れはて、ぐったりと時護にもたれている。

奈阿姫をとんでもないことに巻き込んでしまったという後悔は、今の時護を棘の様に苛んだ。けれどもここまできたら、もうどうしようもない。前に進むだけなのだ。例え前途が絶望的であったとしても、何とかやれることはやらなくてはならない。

「時護様……わたし、千代に縄を打って、寺に戻して下さい。そうすれば、少なくともあなたの名誉は保たれますわ」と奈阿姫は弱々しく抗った。

「それはできぬ」と時護はきっぱりと否定した。「それに今はもう無理でございます。わたし達は、もう恋仲として喧伝されておりまゝする。報国寺で落ち合つて密通したと、多分誰もがそう信じている。そんな中に、あなたを放り込むことは出来ない。罪はわたしにあるのに、豊臣の姫であるあなたに、どんな罪状が付くかも知れぬ。

それはわたしには、耐え難いのです。まして、あなたに縄を打つなど、わたしにそのような酷いことが出来るはずが無い！」

奈阿姫はつぶらな瞳を時護に注いだ。少し前まで、寺に戻ろうと決心していたが、確かに今更もう時護と離れることなど、奈阿姫には出来そうもなかった。

「わたし達は、地獄の底まで一緒なのですね」

「そう、その通りなのです、姫……愛しい人」

そう答えると、時護はやっと少し微笑んだ。

「わたし……時護様にずっと付いて参ります」

と奈阿姫は不可能なことに知りながら、そう誓った。

「何があっても、時護様とは離れたくありません！」

「わたしもそなたを離したくは無い。そなたとわたしが、ただの平民ならば良かったのじゃ。……されど、先行きは暗い」

時護は暗澹たる気持ちになったが、寄り添う奈阿姫を何としても護られねば、という強い決意を抱いた。

「さあ姫、立ち上がりもうわたしの先導で付いて来られますか？」

「なんのこれしきの疲れ、どうということもありませぬ。どの方角を行くのでしょうか？ 時護様の行かれる所へ、千代も参ります」

そう健気に言うと、奈阿姫も立ち上がった。時護は、今改めて、奈阿姫の背が普通の女人より高く、自分より少し下に過ぎないのを感じた。

「以前、岐^{わか}れ道のことを言いましたな」

「はい」

「その先の、大塔宮様の祠^{ひら}の辺りに参りましょうぞ。あの辺りは、滅多に人の来ぬ所でございますゆえ、どこか隠れ家があるかも知れません。わたしは下帯に幾らか銅貨を忍ばせております。はした金ですが、何か身に付けるものや食べ物の類ぐらいは賄えるでしょう」

「あの辺は、見捨てられた場所。ああ、お可哀想な宮様……！ あのように荒れ果ててしまっているとは！」

「その場所こそ、我らが隠れ家にピッタリではありませんか、姫！」

と時護は我が意を得たりと言う。

その時、

「千代、と呼んで下さりませ」と唐突に奈阿姫は言った。「義母千

姫様の千を取った呼び名。わたしはとても気に入っておりますわ、この“奈阿”という本名よりも」

「そうだな」と言うと、時護は微笑みつつ抱き寄せた。

「千代の方が、そなたには相応しいかも知れぬ。“豊臣の奈阿姫”と呼ばれるよりは。今より我らは、もう豊臣や徳川と言った古き名は捨てよう」

「それでは、時護様は……柏木様とお呼びしていいのですか」

「柏木、か。いいだろう」

二人の恋する者達はやっと立ち上がり、初夏の逆光の中を歩き始めた。

岐れ道までは、報国寺から逆に鎌倉に近くなってくるので、街道はどうしても人通りが多い。彼らは、川沿いに獣道を進んだ。崖は険しく、ボーっとしていると危うく崖から転がり落ちそうになるのを、二人はしっかり手を取り合って進んで行った。

奈阿姫と時護の“駆け落ち”という衝撃的な出来事は、鎌倉の武家達や寺社、そして幕府を震撼とさせたが、けれども庶民や農民達には全くあずかり知らぬことだった。又、幕府はこの出来事を隠密裏に処理しようとしていたので、尚更下々には伝わっていない。

そのことが、逆に彼ら二人にとっては幸いだった。

道々に出会った農民達は、彼ら二人がどこから逃げて来た若侍とその若妻だと信じ込み、僅かな金で食べ物をくれたし、彼ら二人が身に纏っていた絹の小袖の代わりに、自分達の持っていた粗末な麻の衣服と交換した。

彼らは見たことも無い絹の小袖に喜び、逆に奈阿姫と時護は、粗末な服を身に纏うと、遠目には一般庶民と変わらなく見える。けれども間近で見ると、やはり奈阿姫には洗練された気高い美しさを有し、又時護は脇差は差してはいないものの、とても田舎の若者には見えなかった。

どっちにしろ、彼ら農民達には何も知らされておらず、又どうで

も良かったのだ。如何にも曰く有りげな若い二人ではあったが、余り手にしたことのない銅貨と絹は、農民達をくらくらさせてしまっていた。

こうして二人は、夕刻前には岐れ道に着き、それから北東に伸びる細い坂道を登って行った。奈阿姫も時護も全てを捨て去った若者達は、自由な息を吸いつつ、幸せだった。それもほんのひと時の幸せなのだったが。

〔4〕

〔4〕

「杉丸や」と貞元禅師は、目の前にちよこんと座る茶坊主の杉丸に向って、襟を正して言いかけた。

「はい、禅師」と僅か十歳ばかりの杉丸は、とても子供とは思えぬ態度と言葉遣いで禅師の問に身構える。

「嘘はつかぬと約束してくれ、いいな」

「はい」と杉丸は言う。どうも緊張しているのか、身体が小刻みに震えているようだ。けれども、禅師を上目遣いにキツと見る瞳は鋭い。瞳だけで、何かに対して反抗している雰囲気漂っているのを、禅師は感じ取った。

「火をつけたのは、そなたじゃな」

この禅師の意外な言葉にも、杉丸は微動だにしなかった。

「実はな……常円がそなたが僧坊に火を放っていたのを見ていたのじゃ」

「左様ですか」とだけ杉丸は答えた。

「杉丸や！なぜそんな事をした！？なぜじゃ」

禅師は身を震わせながら、詰問するが、杉丸は口を一字に結んだままだ。

「よかるう、言いたく無いのならばな」と禅師は悲しい思いを抱いて言った。

「がしかし、そなたが奈阿姫とその思い人森時護殿を逃したのはなぜなのじゃ。姫から頼まれたのか？」

「頼まれる？そのようなことはありません。全てわたしの意志からでございます」

と杉丸は誇りを傷つけられたように言い放つ。それは、孤独な少年

の精一杯の口答えのように聞こえた。

「最後に聞こう。そなたは自分がどのような罪を犯してしまったのか、分かっていない。本来ならば、厳しいお咎めが幼少のそなたにもあつてしかるべきなのだが、そなたのお父上の格別の配慮の上、何とかかなりそうじゃ。」

だがな、そなたの逃したあのお二人には、厳しい裁きが待つておるのじゃぞ。例え逃したからとて、彼らは必ず捕まる。現に、ここにもお上からの者達がやつて来た。その者達は、躍起となつて、秘かに鎌倉の隅々まで調べまわつておる。やがてはあのお二人も捕まり、結局は不幸な結果となろう。それを分かっているのか、杉丸！」杉丸の身体がわずかに震えた。けれども、杉丸は禅師を見返しながら答えた。

「あのお二方には、自由を与えたかったです！」
禅師はやつと杉丸の本心の一部を垣間見た気がしたのだった。

その頃、奈阿姫と時護の二人は、なだらかな細い坂道を登りつめ、やがて幾分平らな、鬱蒼とした森の端に辿り着いていた。その先には、小さな鳥居が朽ちて傾いており、なにやらおどろおどろしい雰囲気だ。

「この先が、大塔宮様の土牢と墓がある所じゃ」

と時護は、チラッと奈阿姫に振り返りながら小声で言った。

「ほんに、薄気味悪い所でございますね。宮様は、こんな場所に幽閉されていたのでしょうか。さぞやお心細かったことでしょう」

「けれども、我らの隠れる場所としては、ピッタリではござらぬか」

「そうですね」と奈阿姫は同意した。

「どこぞに、祠などが無いでしょうか」

「進みましょう、柏木様」

「怖くはありませんか、千代殿」

「なんの」と奈阿姫は首を振る。その仕草が可愛らしく又愛しく、思わず抱き締めたい気持ちを時護は諫めた。

「あなた様とご一緒ならば、どんな所でもそこはこの世の極楽」

「あはははは。千代殿は、大袈裟なことを仰るものだ」

「いいえ、決して大袈裟ではございません。これこそ、わたしの本心でございますわ」

「千代殿……」

そう言い掛けると、堪らず時護は奈阿姫を抱き寄せ、大木の陰で激しく口付けした。けれども奈阿姫はもはや抗わず、されるがままになっている。一度知った官能の炎は、姫自身をも焼き尽くすようだった。

控えめに、けれども大胆に、奈阿姫は時護の口付けに応えた。そして時護の身体に両手を廻して、そつと時護を見つめる。その眼差しの初々しさ、色っぽさに、時護の情熱の炎は益々募っていくのだった。

「今宵、祠か小屋でも見つけなければ」

「野宿でも構いませぬ」

と奈阿姫は気丈に答えた。「もう外でも寒くはございませぬから」

「大坂城では、さぞや贅をこらした育たれ方をなさったのに……わたしの軽はずみな行動ゆえに、野宿までとは！ 相済まぬ、千代殿」

「まあ、そんな他人行儀な！」と奈阿姫は笑った。

「我らはもう他人などではありませぬ。契った仲なのですから、柏木様も遠慮なさらずに」

やがて二人は、もう一つの傾きかけた小さな鳥居の先の土手に、ポツカリと開いた穴を見つけた。その近くには、木片が掛かり、そこには『大塔宮護良様土牢跡』の消えかかった字が微かに残っている。

奈阿姫はゆつくりとその穴から先を覗いた。

「底は深うございますね。このような狭く暗い場所に、宮様は入れられていたのですね、さぞやご無念だったことでしょう！」

「『太平記』にある通りですな。もつと大きなものかと思っ
ていましたが……無残なことじゃ。後醍醐天皇の皇子でありながら、その
為に犠牲になられたとは！」

奈阿姫と時護は沈痛な面持ちでそこに佇んで居たが、やがて気を
取り直すと、更に先、林の奥へと進んで行った。

〔5〕

〔5〕

2日経つても時護は現れず、遂に弥太郎達家来は、時護がやはり噂通り奈阿姫と駆け落ちしてしまったという酷い事実を信じざるを得なくなった。こうなつては、家来達は幕府の命によって秘密裏に二人を探し出すことになる。

時護と奈阿姫の似顔絵を絵師に描いてもらった紙を、鎌倉の小町、雪ノ下、若宮大路の各辻のあちらこちらにその似顔絵が貼つてもいいのだったが、それではもはや二人は『お尋ね者』となつてしまう。そして下々の人々に、全てが明らかになつてしまふだろう。それだけは避けたかった。卑しくも徳川家の血を引く武者が、寺に預けられていた少女と逃げ出した、とあつては、恥の上塗りだ。

それで彼らは、周辺の村々に出かけて、その紙を農民達に配つていた。その絵姿は、かなりお粗末だったが、結果は直ぐに出た。

ある村で老婆が弥太郎に、

「この二人なら、見たことがある」と言つたのだった。

「朝方、このような若いお方がこの村にやつて来た。嫁がそういえば、綺麗な小袖を持つており、詰問した所その中の若い女人から食べ物と交換に貰つたと白状した」と。

ガタガタ震える嫁が現れると、奈阿姫から貰つた絹の小袖を弥太郎に渡した。それは薄浅葱色ではなかったが、質素ながらもれっきとした絹の上布だ。

「見かけました。その方がわたしにこれを下さつたのです……」
と嫁は答えた。

「ただし、この絵よりもずっとお綺麗でした。お背が高く、横に佇む若いお侍は傷を負っているようでしたが、とても凛々しくただの

庶民には見えませんでした」

「あの」と嫁の夫が遜って言う。「我が嫁に咎がかりませんでしょうか？ 嫁の腹には、やや（＝胎児）がやどっておるのでございまして」

「咎などはないから安心しろ」と、弥太郎は言ったがその声には棘があつた。

「ただこんどそやつらを見つけたら、すぐさまお上に届けるのじゃ。絶対に隠しだてはするなよ」

「あのう……あのお嬢様には、何か？」

「余計なことは聞くな！」と弥太郎は腹立たしそうに怒鳴りつけた。

「は、はいはい」と嫁、夫、そして言いつけた姑も縮こまる。

「今度ここに来ましたら、必ずお上に言いつけます」

と夫が言つと、

「縄で縛るなり、倉に閉じ込めるなりして逃してはならぬぞ！ そ

の折には、褒美を取らしても良い」

「はーっ」と三人は深く頭を下げた。地面に着くほど深く。

「奴らは罪人じゃ。残念だが捕らえねばならぬ大罪人なのじゃ。分かつたな」

「はっ、はい」

地面に這い蹲るような村人を残して去る弥太郎の心には、複雑で悔しい思いがあつた。少し前まで自分達の側に居た時護は、既に幕府の反逆者として追われているのだ。あの熱狂的な奈阿姫を追う時護の思いは、いつしか、本当に狂おしく奈阿姫自身を追っていたのだと悟つた。

「それにしても、こうまで時護様を狂わせてしまう女人とは、一体何者じゃ！？ まこと豊臣の姫は恐ろしい存在じゃの。先の大御所様がその姫の命を助けたは、間違いだつたのかも知れぬな。あの時護様を、あの素晴らしい方を、色欲の虜にさせ逃げおおせる気であつたのか」

「それとも……もしや、時護様は以前より奈阿姫様をご存知で、そして、そして我らを欺いていたのだろうか？ 分からぬ、わたしにはさっぱり分からぬぞ！」

と偵治が腕組みした。

「もしもお二人が本当に一緒に居て、捕まった暁には、時護様はどうなる？ そして姫君は？」と嘉幸が問うと、後の者は黙り込んだ。

「少なくとも、森家にはお咎めがあろう。お家断絶かも知れぬな。母上殿はそれはお嘆きだ。豊臣の悪霊に掛かったのだと嘆いておられる」

「関が原の怨念か！？ それとも夏の陣で滅びた、豊臣の霊のなせるわざとな？」と一人が言い出すと、皆恐ろしそうに沈黙した。

「それは分からぬ。だが、時護様を探すのじゃ。時護様は、姫に騙されておるのじゃ。それを信じるほかあるまい。あの純真な時護様をこのまま見捨てて殺すわけには行かぬ。……切腹させてはならぬぞ！」と弥太郎は吠えた。

「奈阿姫の身体の中には、あの織田信長や秀吉、淀殿の血が入っておるのじゃ。全く恐ろしき蛇蝎のような、あるいは夜叉のような姫なのじゃな」

「だが弥太郎。家光様の血にも、織田信長公や淀殿の血が入っているのじゃ。淀殿は大御所様（＝秀忠）の正室、お江与（＝江）の方様の姉君ゆえな。因果なものよの」

偵治は、静かに呟いた。

弥太郎達家来が血眼で探しているとは知らず、奈阿姫と時護はもう別世界、二人だけの世界に漂って居た。全ての恐れや恐怖、不安すらも何処かへ飛んで行ったかのように、二人は常にしっかと手を繋いでいる。

「もはや日も暮れましたな」と時護は、暮れ行く空を眺めて言った。

「雁もねぐらへ飛んで行きました、我らもどこかで休みましょう」

「でも、祠も何もありませんでしたね」

「そうですね。だが」とそこまで時護が言った時だった。目の前に、崩れかかったあばら屋が現れたのだ。

「空き家のような。けれども、我らにとってはありがたきあばら屋だ。入りましょう、千代殿」

「はい」と奈阿姫は素直に言った。そして時護を恋しげに見上げた。

「どんなに狭くとも、汚れていても、ここは極楽でございます」

「極楽、か」

そう呟くと、時護は心から微笑んで見せたのだった。

〔6〕

〔6〕

時護が見つけたあばら家は、以前は人が住んでいた気配がある家だったが、中味はすっかり荒れ果てていた。

土間には壊れた釜戸、幾つかの欠けた茶碗、そして埃まみれの板張りには、藁が敷かれたままだ。窓の障子紙は殆ど破れ果て、戸板だけが何とか使える有様。けれども、季節は初夏で、閉ざさなくとももついい気候なのが幸이었다。

二人は板の間に腰掛け、だまつたままわずかばかりの握り飯を食べ、井戸水を飲んだ。

「こんな侘しい場所で、そしてこのような粗末な食事しか与えられぬことを許してください、千代殿」と食べ終わった後に、時護は頭を下げた。

「何と仰るのです、柏木様」と奈阿姫は驚いたように遮った。

「ここは我らにとって、何物も進入出来ない聖域なのですわ。極楽なのです」

「済まぬ、姫」と時護は乾いた声でそう言った。

「見て下され、あの月を」

奈阿姫は、つと話題を変えて、夜空を見上げた。冴え冴えとした夜空に、無数の星々を従えた満月が辺りを明るく照らしている。時護も言われて初めて夜空を見上げた。

「ほんに綺麗な満月ですね」

「本当に！　そして星の数があんなに多いとは！」

「あれらは、亡くなられた人々の魂なのでしょうが」

と問いかける奈阿姫に、時護は何と答えていいかわからず、口ごもった。ただ時護ができたことと言えば、そつと奈阿姫を抱き寄せて、

その肌の温もりを確かめることぐらいなのだ。

奈阿姫は安心したように身を任せると、やがてうとうと眠ってしまった。先行きの分からない明日は、どのように明けるのだろうか。

「それもこれも、御仏の意のままじゃな」と呟く時護も又、その粗末な床で眠りに伏した。

翌朝二人は同時に目覚めた。奈阿姫は時護の懷に抱かれた小鳥のように、そしてその髪は時護の脇の直ぐ下にある。

時護は奈阿姫の髪を撫でた。姫はそのままの姿勢で居たが、ふと時護を見つめる。あかるい光の中で、奈阿姫を間近に見たのは初めてのような気がする。そして姫の喉下の白さが、時護の欲望に少しだけ火をつけた。彼は奈阿姫に覆いかぶさると、その口元を奪った。

「千代殿……今一度のまぐわい、お許し願えませぬか？」

喘ぎながら時護が囁くと、奈阿姫は黙ったまま時護の胸をかき抱いた。

「暁の光の元で、千代殿をしかと見届けたいのです」

「それはわたしとて同じこと」と奈阿姫は大胆に、かつ恥らいつつ答えた。「あなた様の全てが見とうございます」

時護は身に付けていた庶民の衣を急いで脱ぎ捨てた。贅肉の全く無い、けれども白い包帯のサラシがまだ痛々しい若い男おとこの姿が現れた。奈阿姫は少しだけ微笑むと、恋しい人の下帯を自ら解く。

時護は、荒々しい感情の赴くままに、奈阿姫の粗末な帯を解き、その小袖を開いた。ほの白い奈阿姫の初々しい全身が露わになり、時護の欲望はもう止まることが出来なくなっていた。

姫の、まだまだ乙女の肉体はコリコリして堅く、それは素晴らしなものだった。時護は丁寧ていねいに、けれども夢中になって姫の全身に口付けをし、愛撫を続ける。

「千代殿！ 千代殿がこのまま御仏のみに仕え、住持になられるの

は、なんともつたないことか！　このような美しい身体を持ちながら」

そう叫ぶ時護を受け入れる奈阿姫もまた、最初の体験とは違い、痛みだけではない別の快楽を感じとっていた。

「柏木様……我らは罪を犯しているのでしょうか？　夫婦ならば良いことが、我らではダメなのでしょう。我らは地獄へ落ちるのですか？」

「そんなはずがごきますまい。我らは互いに好いているのですぞ、千代殿」

「それなのに……この世では許されぬことなのですね……ああ」

奈阿姫の最後の言葉は、悦楽の内に消えていく……。

互いに全てを忘れて貪っている内に、日が高く登っていた。

時護と奈阿姫は全裸の体の上に、しどけなく衣を打ちかけたまま、じつと座っていた。姫の頭はずっと時護の胸元にある。

「このまま、時間が止まれば宜しいのに」

「さよう。けれどもそれも詮無いこと。浮世は続きます」

奈阿姫はやつと頭を離すと、脱ぎ捨てられていた衣を着始めた。その白い輝くばかりの身体が再び衣に覆い隠されていく様を、時護は残念そうに眺めていたが、やがて自分も着始める。

「わたしには、許婚があります」と初めて時護は告げた。

「え！？」

「僅か10歳の時でした。親が決めた許婚で、一度だけお会いしたことがございます。少し小太りの……姫君でしたが……」

時護は言いにくそうに続けた。

「愛してはおりませんでした。けれども森家の長男たるわたしには、それに対して抗うことはまかりならぬことだったのです。あなたに会うまでは……」

「そうのですか」

「求めていた理想の姫君が直ぐ近くに居たと言うのに、それは豊臣

の最後の姫。そしていずれは、尼寺の住持となられるお方であつたとは！ 運命の酷さに、わたしは初めて気付いたのです」

「それはわたしとて、同じこと」と奈阿姫も静かに続ける。

「けれども、あなた様はわたしのこと、お嫌いだと、又憎んでおられると思つておりましたのよ」

「そういう風にしか、わたしは育てられていなかったのをごさいます。けれども、今は違う！ 命を賭けて、わたしはあなたをお慕いしているのです！」

奈阿姫は至福に包まれて、時護の告白を聞いたのだった。

〔7〕

〔7〕

鎌倉から西に遠く離れた姫路の地。白鷺城と言われている美麗な城、姫路城の千姫の部屋に、早馬の文ふみが届いた。

千姫が手に取ると、「かひ」と書かれてある。

「おや？ 甲斐姫からか？ 何じゃ？」

と、天下一の美女と歌われた千姫は、その文を手にとった。甲斐姫というのは、成田甲斐姫と言い、豊臣秀頼の側室の一人だった女人で、千姫の養女奈阿姫の養育係として、鎌倉の東慶寺に七歳の幼き奈阿姫と共に入った女人であつた。

千姫は奈阿姫よりも僅か12歳年上でしかなく、又甲斐姫もそんなに年上ではない。今はまだ28歳に過ぎない千姫ではあつたが、養母として奈阿姫のことを常に気に掛けていたのだ。

よつて、甲斐姫から早文が来たという事は、奈阿姫に何かあつたに違いないのだ。

「何ごとじゃ？ 姫は息災ではなかつたのか？ 病にでも倒れたのか……」

そう言いつつ千姫は甲斐姫からの文を読んで、のけ反るほど驚いた。

「なんと！」

言いつつ絶句した千姫の乳母めのとは、

「如何なされました？」と首を傾げる。千姫の顔は、みるみる蒼白になつて行つた。

「奈阿姫が……」

「姫様が如何なされましたので？」

「出奔したそうじゃ」

「ええっ!？」

「それも、若侍と共に駆け落ちしたそうじゃ」

「ま、まさか！」と乳母も腰を抜かさんばかりに驚愕する。

「それもな、森時護殿とだそうで」

「森殿と！」

「本当だとは思いたくないが……何かの間違いであって欲しいものよ」

千姫の顔は曇り、文を畳み返す手元も震えていた。

森時護のことは覚えていた。江戸城に秘かに帰っていた折、鎌倉から呼び寄せた奈阿姫と、自分の父秀忠の又従弟の時護を会わせたのは、誰あろう自分なのだ！

けれども二人の間には冷たい空気が漂っており、どう考えても好いた仲だとは思えなかった。あれから二年余り……二人の間には、何が起こったのだろうか。

「時護様は、豊臣家を憎んでおいでではなかったのでしょうか」

と乳母は言う。「それなのに、まさか姫様と」

「男と女の仲は分らぬぞ」と千姫は言う。

「嫌っているようできて、実はそうではなく、好いているようできて、けれども違うことも度々じゃ。あの二人、鎌倉のどこかで秘かに逢っていたのではないだろうか？ けれども駆け落ちとは、何たることじゃ！ 二人とも、気がはやっただに違いない。これは狂気の沙汰ぞ」

「何とかしなければ、お二人とも破滅でございます」

と乳母は悲痛に叫んだ。

「千代はまだ16歳、そして時護殿は確か21ぐらいであったの。若い二人じゃ、どこかで情念が燃え盛ったのかも知れぬ」

それから千姫は、崩折れるように座り込んだ。

「ああ！ わたしが二人を合せなければ良かったのじゃ。何と迂闊なことをしてしまったのだろうか」

千姫は悔やんだ。悔やんでも悔やみきれない。なぜなら、大坂夏の陣のあと捕らえられたまだ幼い奈阿姫の助命を、祖父である家康に必死の形相で頼み込んだのは、他ならぬ千姫だったからだ。

「兄国松殿は致し方ないとして、いたいけな七歳の姫君を河原で斬首とは！ それは余りにも酷うございます！ 徳川の名を廃れさすやも知れませぬぞ、おじ様。徳川は何と情けの無い残酷な者かと下々の心も離れてゆくでしょう」

「だがしかし、いまはいたいけない幼女であっても、いずれは聡い、かつ美麗な姫君になられよう。さすれば、女人は子を孕む者ぞ！ 豊臣のな」

「わたしの養女にして下されませ！」と千姫は家康にすがりついた。「わたしが、かの姫を徳川の姫として寺に預けます。そして若い内に髪を下ろし、その住持と致します。一生、男子とは縁の無い生活が続けさせる所存です！」

千姫の決死の形相は、目に入れても痛くないほど可愛がっていた家康の心を揺り動かした。本当は、胸の奥では「危うい」と感じつつも、家康は奈阿姫の助命を許可したのだった。

そして、祖父家康の危惧は、今まさに本当になろうとしている。養女千代姫（奈阿姫）は、今恋に墜ちてしまっているのだ！ 何もかも見えなくする、盲目的な恋に。そして相手は、柔らかで整った面差しの、若き侍、森時護だ。どんな女人でも、一瞬は振り向くと言うほどの魅力のある男子でもある……時護と！

「ああ、わたしは何と言う事をしてしまったのじゃ」

千姫は文を抱きながら、泣き伏した。

「どちらの命をも、危うくしてしまった！ わたしのせいじゃ、何もかも！」

「千姫様のせいではございますまい！」と乳母は言った。「どちらも籠の鳥であつたのでございます。それが放たれた時、大人たちの

恩讐を超えて、二人は恋に落ちたのでは無いでしょうか」

「そうか」と千姫は涙に濡れた顔を上げた。「それではわたしはどうすれば良いのじゃ」

「何とかして、家光様に助命を嘆願いたしましょう。少なくとも、奈阿姫様だけは。世間知らずの姫君を、時護殿が誘惑したと申せば済むこと」

「けれどももしも千代の体に、ややが宿ってて居たらどうするのじゃ」

「やや、ですか」と乳母は嘆息する。

「その時は、姫様にもお命の危険が迫るかも知れませぬ。ですが、時護殿をお救いすることは……もはや不可能かと存じます」

「やはり、そうであろうの。恋に狂った時護殿の行く末は暗いであろう。そう！わたしは弟（＝家光）に文を出すつもりじゃ。昔のように、千代の助命願いを。何と言っても、千代はもう豊臣家の者ではなく、徳川の姫君。そして将来は、尼寺の住持となられるお方なのだから」

千姫はもう泣いてはいなかった。

第五章 離れても〔1〕

第五章 離れても

〔1〕

「もう食料も尽きました」と翌日の朝、時護が言った。しょぼしょぼと小雨が降り、陰気な日和だ。

「千代殿、これから村を廻って、どこから食料を手に入れて来ます。その間、しばし……」

「お待ち下さい！」と、奈阿姫は底知れぬ予感に震えながら、時護を引き止めた。

「わたしは……このままでもいいのでございます」

「それでは、餓死してしまいますぞ、千代殿」

「いいえ！ いいのです！ それよりも、あなた様と居たい！」

奈阿姫は、時護の袖を掴んだ。

「ほんのひと時の辛抱ですぞ。わたしとて、あなたと一刻も離れていとうはない。けれども、何とかしてこの場を凌ぎたいし、それに

……」

「それに？」

「少し、俗世を探りたいのです」

「ああ、やっぱり」と、奈阿姫は納得した。

これは恐れていたことだった。昼夜二人は激しく求め合い、愛し合っていたが、けれどもそれは、所詮世俗から遠く離れた二人だけの世界での夢うつつ。

それが終われば、時護はやはり武士の端くれ。鋭い鷹のような瞳を持つ時護の心は、休まるはずが無いのだ。心はやはり、何とかして鎌倉からの脱出を試みることは分っていた。けれどもそれには、

食料や軍資金が要るし、切り通しを通らずして鎌倉から出る獣道を探さねばならない。二人だけの愛欲の世界に浸りきっているのはダメなのだ。

それに時護は、刀を欲していた。武士としてしか育っていない彼には、刀が是非とも要る。必要ならば、盗むという大罪を犯してもいや、大罪はもう既に犯していた。豊臣最後の姫、奈阿姫との駆け落ちは、もう既に充分すぎるほどの大罪だ。捕まれば、恐らく命は無いだろう……。厳しいお咎めの末、切腹。それが時護を待ち受けているのは確かなのだ。そしてそれは、愛する奈阿姫との、永遠の別れを意味していることも。

けれども、このままで居ることは出来ない。奈阿姫を餓死させる、などという残酷なことだけは。

「千代殿、わたしは必ず戻って参ります。それまではわたしを信じて待っていて下され」

その瞳の真剣さに、奈阿姫は袖を離れた。

「そうですか……。考えれば、あなた様をいつまでもここに縛り付けてはおられませぬな」

それから奈阿姫は、自分の持っている最も不安なことは何か、を見抜いた。それは時護がこのまま自分を置いて一人で逃げて行ってしまうか、それとも自分のことを幕府に告げるためではないか、ということだったということに。

けれども、奈阿姫はひと時でも時護を疑ったことを恥じた。それに、時護がどう心変わりをしようと、もう奈阿姫には時護を非難することも、出来はしなかった。そして仮に時護が自分を売ったとしても、決して時護を憎むことなど出来ない、そう覚悟していたのだ。

「あなた様を信じて居ります。ですから、どうかご無事で……お戻りを」

「ああ、姫！　わたしがあなたを捨てるとお思いか？」

勘のいい時護は激情に駆られて、奈阿姫を抱き締めた。もしかすると今生の別れかも知れない、という気持ちがふと湧いたのも確かだったが。柔らかい奈阿姫の若い肉体が、時護を益々切なくさせるが、未練は断たなくてはならない。

「きつとすぐ戻ります。千代殿はご安心して、わたしの帰りを待っていて下さい」

「はい。神仏にお祈りしておりますわ」

雨で薄暗い室内で、奈阿姫は精一杯微笑んで見せた。

「それでは」

そうキツパリ言うと、時護は立ち上がり、土間から出て行った。振り返りたいのを我慢しつつ、雨の中を下って行く。

その頃、既に時護の家来達は、時護が奈阿姫を連れ戻すだろうという樂觀論を遂に捨てていた。そして秘かに、各村々の百姓達に探りを入れていたのだった。

半分は海岸から西、寂れ果てた大仏の辺り、あと半分は報国寺の辺りや東北の方角、貧しい百姓達の所だ。例の、服と食料を交換したという一家にも再度会っていたが、その一家は明らかに、ひくついた顔つきで家来達を迎えた。

「代わりないか？ 例の者どもは来なかっただろうな？」と偵治が詰問すると、一家はただただ這いつくばっている。

「いいえ！ もうあのお侍と女人はいらっしゃいません」

「嘘を付くなよ！ 嘘を付いたことがばれたら、そなた達一家は皆殺しだ」

「め、滅相も無い……」

この百姓の一家は、明らかに真から怯えきっており、嘘を付いているようには見えない。

「ちえつ。時護様達は一体どこに行ってしまったのじゃ？ 切り通しも通っていないとなると……もう食べる物もないはずだ……」。

もしや、北の森の奥で、野垂れ死にでもしておられるのか？ ……
はて、北？ そうだな！ 北があつた」

弥太郎は、何かが閃いて手を打った。北とは考えもしなかった。
なぜなら、鎌倉は南は海、東西は切り通し（狭い街道）、北は険しい山に囲まれ、そこから逃げる人間が居るなどとは、思えない土地柄だ。その上、北には大塔宮護良親王の悲劇の牢と墓があると云われ、夜な夜な親王の亡霊が出るという噂がまことしやかに喧伝されていたからだ。

だから、誰もその辺りには行つたことがなかったし、誰も行かないと思ひ込んでいた。けれども、あの二人ならば……。

「そうだ！ 俺は迂闊だった！ 時護様なら、そういう無茶も平気で出来るお方なのだからな」

〔2〕

〔2〕

時護は雨の中、ずぶ濡れになりながら、闇雲に森の中をさ迷っていた。この北の辺りには、百姓も余り住んでいないようで、まるで先の見えない闇の中に迷い込んだ気がするほどだ。

食べ物の為と奈阿姫には告げたものの、本当は時護に行き場所は無かったのだ。ただただ焦るばかりで、武士として育った時護はこういう困難な時に何をすべきか、本当は分からない。

ただじつとして、奈阿姫の側に居るのも辛く感じていたし、実際奈阿姫の危惧していたことは事実だった。二人で、投降することが一番のような気がしていたが、自分の罪だけではなく、恐らく奈阿姫も殺されるのが分っていたからこそ、時護は居たたまれなかったのだ。

どんな酷い詮議^{むじ}が待っていようと、それは己の浅はかさのためではあっても、あくまでも自分だけで充分だ。愛する人を残酷な魔の手には渡したくは無い。死に装束の白無垢の姫が、短刀を自らの首に当てる姿を想像するだけで鳥肌が立つほど辛い。

奈阿姫の首元からほとばしる真っ赤な血潮の幻を感じて、時護は身震いした。雨に濡れた全身が、初夏とは言え少しずつ寒く、ぶるぶると震えが来る。

その時、向こうに僅かばかりの畑とみすばらしいあばら家に近い家が軒見えた。軒には大根がぶら下がり、家の前の木には、まだ熟れていない枇杷^{びわ}の実が見える。時護は恥も外聞も忘れてその家に近寄り、大根を二、三本奪い、それから枇杷の木に実っている、硬そうな黄色い枇杷を幾つかもぎ取った。

けれどもそこまでで、家の中から一人の百姓が出てきて、大声を

上げたのだった。

「どろぼー！ 泥棒じゃ~~~~！」

時護が慌てて、袖や懷に枇杷を入れている内に、一人の息子と思しき屈強な若者が家から走り出てきた。手には重そうな鍬を持って、それを頭に上げて振り回している。

時護は急いで逃げようとしたが、何かに蹴躓^{けつまず}いて倒れ込んだ。大根や枇杷が、こぼれ落ちて散乱し、時護が泥棒であることは明らかだった。

「ぬ、ぬ、盗人^{ぬすっと}じゃあ~~~~！」と息子も叫び声を上げ、時護に打ちかかる。辛うじて避けたものの、父親が時護に覆いかぶさった。老人と言えども、そこは力有る百姓。こちらは刀が無ければただの若者。そして、腹も満たないふらふらの身だ。どちらが強いが、今は一目瞭然だった。

息子は鍬を下ろすと父親に加勢し、時護は屈強この上ない息子から散々蹴り上げられ、それから襟を掴んで殴られた。

「このお、盗人！ 貧しい百姓からも、何かを盗むとは世も末よのお！」

盗人か…… そうだ、わたしは盗人になり下がったのだ……。

抗いも出来ずに殴られ続けながら、時護は消えていく意識の底でそう思った。そして時護は半ば意識を失って、その場に倒れ伏した。

「おっ父^{とあ}、こやつ武士のようないでたちじゃな」

「そんな若者が、このような鄙^しに來て、盗みを働くとは何事じゃ？」

二人はぐったりした時護を見下ろしながら、そう罵った。

「なかなかの色男じゃがな。なにゆえ、こんなことまでするのだろうて」

「侍なら、食べるものなどはあるはずじゃがのお、おっ父」

それから息子の方が、息も絶え絶えの時護にぞんざいに喋りかけた。

「おい、お前！ お侍に見えるが、なぜ俺達の食べ物盗むんじゃ」「す、済まぬ……」と、時護は横たわったまま切れ切れに言った。「本当は、金でもあれば買いたかったし、何かと交換したかったが、それも今は何も無く、叶わず……」

「随分、堕ちたもののよ、おめえは」と息子は罵ると、時護を蹴りつけた。

「ああ、うつうつうつ」と時護は苦痛に呻く。けれども、それにもめげず、時護は言い継いだ。

「お恥ずかしいことに、腹が減っておるのじゃ……いや、わたしだけではない。むしろ……わたしの恋しい女人の為なのじゃ。許して下さい」

「女人？ 慕っておる女人とな？」と父親の方が、少しばかり気を許した。

「お侍がなぜに、その女人と……ああ、さようか」

と息子は、冷笑する。「おめえ、そいつとは成さぬ仲なのじゃな。共に逃げて来たのじゃな。違つか。誰かの人妻かなにかか？」

「人妻ではない。がしかし……成さぬ仲というのは、本当だ」と時護は静かに答えた。今更嘘をついても始まらない。

「本当は、我らの親族は敵同士であった。もともと結ばれてはならぬ間柄だったのじゃ。その上、好いた女人はいずれは住持となるお方だった……それなのに、我らの思いはもう離れられぬほどになっていった。結果、逃げるほか無くなり……」

この時護の言葉に、父子は黙り込んだ。

「お侍でも、そのような感情を抱くことがあるのかと、初めて知ったぞ」

と息子が感じ入って言う。

「そうじゃな。そういう場合は、逃げる他無かるうて」

「ほら」と息子は逞しい腕を、時護に差し出した。「立て！ 何や

ら、哀れに感じてきたぞ。その女人の為に命を賭けるとは、今時珍しいお侍じゃな。大いに気に入った」

「かたじけない」

この思わぬ展開に、時護の瞳が少しだけ潤んだ。そして息子の腕を掴んで、立ち上がった。雨の中泥だらけ、着物もはだけて古傷の上に更に新しい傷が痛む。けれども、人の情けのありがたさを感じた。まして、百姓などに感謝を抱いたことなど、今まで無かったのだが。

「さあ、持つて行け。泥に塗れたが、食えるじやろ。お前のいい人に与えてやれ。傷には、枇杷の葉が良いと言う。この葉っぱで傷口を押さえる。それから枇杷の実の方も、な」

そう言つと、息子は散らばった枇杷や干し大根を拾つと、枇杷の葉を数枚もぎ取つて時護に与えた。

「済まぬ。本当に相済まぬ」と時護は頭を下げた。涙か雨か分らぬ雫が、その頬を伝つて行つた。

〔3〕

〔3〕

時護は、雨に打たれながら、百姓父子から貰った枇杷の実数個とその葉数枚、そして日干し大根を懷に抱きながら、もと来た道を急いでいたが、結局道に迷ってしまっていた。

時護は空腹に襲われ、不覚にも泥だらけの大根に喰らい付き、あちこちをさ迷う。早く奈阿姫に会いたいと切望しつつ、けれども盗もうとした大根を喰らう自分の浅ましさに、自己嫌惡に陥っていく……。

ここまで墜ちてしまった自分が情けない。少し前までは、徳川家の血を引く森家の嫡男として何不自由なく育ち、いずれは森家の当主となる身だったのだ。それが、どこでどうおかしくなってしまったのか、今は恋しい人と共に逃避行するような有様……。それも、到底成功するのはおぼつかない将来だというのに、ここまで来てしまった。

今更森家にも顔向けできず、又、家来達にも幕府にも言い訳がたない。時護は、少し小高くなった丘の木の下で雨宿りしながら、この絶望的な状況を何とかして打開したいと、空しい思いを抱いていた。

人の気配がしたのは、その時だった。このような鎌倉の北の果てに、ざわざわと木々をかき分ける音が、下方からしてきたのだ。ちょうど時護が木の下にしゃがんでいたそこから、誰かがやって来るのが見下ろせた。

この雨の中、それも村里ではないこんな森の中に分け入るのは一体……？

「ちえっ、もうわたしは疲れたぞ」と一人の声が腹立たしそうに聞

こえた。

え！？ あの声は、もしや……。

「弥太郎、まあ焦るな。ここを過ぎると、村がある。小さな鄙びた村だがな、そこが北にあるわたしが知っている村里じゃ」

「あの沼地では、蛭に血を吸われたし、マムシもうじゃうじゃ居た。こんな所に、あの時護様と、深窓の姫君が居るはずが無いではないか！」

あの声の主は、弥太郎と、偵治じゃ！

時護の心臓は、バクバクと波打った。そしてこんな奥にまで、家来達が搜索している事に、激しい衝撃を受けてもいた。

「それに、もう食料も尽きたじやろう。お二人は、どこかで谷にでも転落したのかも知れぬな。それとも、誰かが匿っているのか」

「匿う者は、打ち首とおふれを出しているのだが」

と偵治は言いにくそうに続けた。

「幕府に逆らつて、お二人を庇う者等、もうこの鎌倉には居るまい。ああ、時護様も早く出てきて下さればよいものを！ もう間に合わぬとは言え、森家断絶は何とかして救わねばの。我らも又、俸禄を取り消されるかも知れぬし」

「もう間に合わぬと言つのは……つまり」

「そうよ、時護様はご切腹、そして姫君もどんな罰を受けるかも知れぬと言う。江戸城に送られて、姦淫の罪で……まあ、わたしには分からねぬが」

時護の心臓は今にも止まりそうに、飛び跳ねた。切腹、そして奈阿姫もまた……。自分の切腹は覚悟しているが、恋しい人の不幸は耐えられぬ。

「あの女め！　やはり豊臣の血は、根絶やしにすべきだったのじゃ！」

偵治の呪詛の言葉が時護にも聞こえる。

「あの夜叉め、魔物めが！」

「口を慎め、偵治。卑しくも、織田様の血を引く者ぞ、そして千姫様の養女であらせられるお方じゃ」

「じゃがの、弥太郎。わたしは悔しいのじゃ！　何ゆえ、時護様はあの女と逃げてしまったのかと思うとな」

そう吐き出すと、偵治はすすり泣いているようだった。時護からは、二人の頭しか見えないが、菅笠二つが雨に打たれている。その雨が、偵治の涙のように思えた。

ここで、わたしが出てきたら、あの二人はどんな気がするのだろうか？　喜ぶのかそれとも憎むのか……。

ふと、ふらりと二人に声を掛けたい衝動に駆られる。あの二人とは幼い時から兄弟の様に育った仲なのだ。恐らくは、奈阿姫よりもっと縁の深い間柄かも知れない。

けれども時護は、その衝動を必死で抑えた。自分の帰りを待つ奈阿姫が居るのだ。その姫を放って、己だけ樂をしたいなどそんなことが出来るのだろうか？

どちらを選らぶのじゃ、時護！？　今声を掛ければ、少なくともわたしの苦悩は終わる。あとは肅々と、武士の最後を則るまでのこと。

けれども姫は、千代殿は、今腹をすかしてわたしを信じつつ、待っているのじゃ。そのような人を捨て去ることができるのか、時護！　恋しい人は、最後まで守るのが、せめてものわたしの男としての道では無いだろうか。侍の道を捨て、男としての道を全うしなければならぬ。そうでなければ、姫と契ったあれは、嘘偽りになる。

それは罪になつてしまつてはいか。

時護がじつとしていると、やがて二人は北へと去つて行つた。もう後戻りはできないのだ。時護は全身全霊で、奈阿姫を護る道を決めてしまつたのだ。そしてそれは実行されなければならない。

先がどうなろうと、時護は最後まで奈阿姫と共に居ると決めた。そういう心境に入ると、不思議な静かな安寧が時護に訪れた。

「もう迷わぬ。わたしは千代殿と共に居るのじゃ。そして共に、果てるまでのこと」

再び、時護は奈阿姫の面影を追い求めながら、道無き道をさ迷つていた。

〔4〕

〔4〕

奈阿姫は待つていた。ひたすら、待ち続けていた。ふと、時護に對する不信が起ることがあつたが、それを急いで払拭し、ただひたすら待ち続けていたが、夕刻になって雨が上がり、時護は戻つて来なかつた。

その時まで、奈阿姫は自分がお腹を空かせていることすら気付いていなかったが、さすがに庭先に涸れずに残つていた古井戸で水を汲むと、グビグビと飲んだ。辺りはひっそり静まり返つた森の中だ。けれども、奈阿姫は森には慣れていた。

姫が七歳から十六歳まで住んでいた東慶寺は、裏手が険しい山になつており、うつそうとした林が頂上まで続いている。そして、その中の一本道を登りきると、その頂近くから鎌倉が一望のもとに見渡せた。（＊現在、頂上までの道々は、有名人達の墓地となっております。結構、きついです）

奈阿姫は、裏手の山を登り、遠く鎌倉の町を眺めるのが好きだつた。そしてその先の海を想つた。新田義貞の鎌倉攻めの時には、海から大軍が来るとは思わずに右往左往した人々のことを思つたものの、姫にとっては海が唯一の逃げ場のような気がしたものだ。

けれどもそれは儚い夢……。奈阿姫は、ほとんどその寺と裏山から出ることは叶わなかつた。そしてただ一度、二年前に江戸城に入つた折に出会つた時護以外には、ときめく人を見たこともない日々だつた。

「時護様……」と奈阿姫は呟く。けれどもその中には、恨み言は無かつた。

時護が戻らなくても、それはそれで仕方ないと姫は考えもし、覚

悟もしていたのだ。時護は卑しくも誇り高い武家の出。気が代わったとしてもおかしくはない。むしろ、自分の為に犠牲になるよりも元の鞘に戻って欲しいと、奈阿姫は願っていた。

けれども実際には、それはもう遅すぎたのだったが。

夕暮れになると、さすがに奈阿姫は、台所に打ち捨てられていた火打石で、湿った小枝を掻き集めて、囲炉裏端で燃やした。けれども、雨に濡れていた小枝や藁は、なかなか勢いよく燃えてはくれなかった。

段々日が翳り、辺りが暗くなって初めて、奈阿姫は“孤独”という言葉を思い出した。そして又、“見捨てられた”という言葉も。

「柏木様……いや、時護様！ 千代は捨てられても構わないのでございます。このまま、戻って来なくてもいいのでございます。ご自分のお仲間のところに戻られても、決して千代は恨みませぬ。ですから、時護様には、お幸せになって頂きたいのです」

遠くで、何かの獣の声がし、鳥の鳴く音が聞こえた。辺りは、本来に森閑としていた。ひよっとしたら、時護は道に迷い、未だこの森の中でさ迷っているかも知れない。そう思い至ると、胸が潰れるようだ。

奈阿姫は、囲炉裏端に座り込むと、自分の胸を両手で抱いた。昨夜の睦ごとの余韻が思い出されてくる。

時護の、痩せてはいるがしなやかな白い肌の感触を思い出すと、再び官能の残り香が自分を包み込んでくれるように感じる。男を美しいと思ったのは初めてだった。そして、男女の睦みごとがどのように甘みな物なのか、今更ながら思い知った。

切っても切れない仲とは、そのようなものなのだと。その時、二人は、豊臣の姫でもなく徳川の侍でもなく、男でもなく女でもなくオスとメスになってしまうのだ。官能の中では、全ての恥じらいが無くなり、奈阿姫は時護を受け入れる為に身体を開き切り、そして

時護は荒々しく入り込み、自分を征服していく。

けれども姫は知っていた。その中に、恋しさ愛しさが存在すること。だからこそ、恥じらいも何も無くなり、裸の肉体と心の全てを委ねられる。それは恥辱ではなく、愛の行為に他ならないのだと。

けれども、今時護はここには居ない。その甘みな感触も、震えるほどの愛撫の悦びも無い。奈阿姫は両手で自分の胸もとをかき抱くと、初めて孤独の苦しみを感じた。そして身を二つに折ると、嗚咽し始めた。

時護は戻らなくていいのだと、あれほど強がっていたというのに、このざまは何だろう。結局自分の本心は、時護を求めているのだ、共に居たいのだと、証明しているではないか。だから涙が溢れ落ちてくる。

「時護様……」

もう一度、奈阿姫は小声で呼んだ。何も返って来ない夜が恨めしかった。そして姫は、火が消えた囲炉裏端の側に静かに横たわった。眠りが全てを忘れてくれると思ったのだ。

けれども、ガタつという物音で、奈阿姫は起き上がった。

「何奴！」と気丈に叫ぶと、

「ち……千代……ど・の」と途切れ途切れに答える声がするではないか！

「時護様っ！ 時護様なのですか！」

月明かりで透かして見ると、土間にうずくまる人影がある。

「時護様！」

姫は裸足で駆け下りると、その人影にひしと抱きついた。

「お戻りになったんですね！」

「そうだ。戻らないとでも、お思いか？」

と力無い時護の声が応えた。「そのような卑怯者ではないぞ、わたしは」

「心配致しました」と奈阿姫は時護に抱きつきながら、泣き伏した。そして冷たい時護の肌を感じた。濡れ果てた小袖が、張り付いている。

「冷たいわ」と奈阿姫は呟いた。「こうまでして、わたしの元に戻られましたのね」

時護の持っていた大根と枇杷が、暗い土間に転がり落ちた。

〔5〕

〔5〕

奈阿姫と時護は、時護の持つて来た大根と枇杷を食べた。煮炊きしていない大根だったが、奈阿姫は文句一つ言わない。

やがて二人は、お腹が満ちてくると、そのままの姿で泥のように眠りに付いた。翌日目が覚めたのは、もう朝も遅い頃だ。雨はすっかりあがっており、少し暑いくらいの気候になっていた。

「もう何も無い」と時護は奈阿姫に告げた。それと、自分の家来だった者達が、もう直ぐそこまで迫っているという事実を。

奈阿姫は黙ったまま、時護の背中のサラシを解き、解毒作用があると云う枇杷の葉を傷口に当てていた。無理をしたせいか、時護の傷は幾つか開き、そこから新たな血と膿が出ているのだ。

黙々と枇杷の葉で手当していた奈阿姫は、終わるとみるや、背中から時護にやんわりと、まるで真綿のように抱きついた。そして自分の頬を、時護の裸の肩に載せる。

「枇杷はよく効くのです、時護様。けれども」

「わたしは柏木では無いのか？」

「柏木は、不吉な名なのですわ。『源氏物語』では、柏木は不幸な死を遂げております」

「不幸であろうと、そうでなかつと……死は避けられぬ」

「そうですね、でも誰にでも避けられぬものです。皆、弥勒菩薩様に導かれて彼岸に参るのです」

そう云った奈阿姫は、あることを思い出してはっとして手を離れた。

「時護様、ご存知でしたか？ 枇杷の葉には毒があることを」

「え！？」

「枇杷の葉を磨り潰した液を飲むと、それが毒になるのです。傷には益に、胃の腑では毒に……それが枇杷の葉、なのです」

「もしや姫は……わたしと……心中しようか？」

問われた奈阿姫は、直ぐには返事をしなかった。ただ時護の背後で、ピタリと身体を硬直させたままの姫の息づかいだけが聞こえて来る。

「時護様と共に逝くのならば、千代は後悔致しませぬ」

「そうか……もう我らに残された道は、心中しかないのか。無念じや」

時護は搾り出すように言った。

時護が振り返ると、奈阿姫がその胸に飛び込んで来た。

「江戸で、二人して長屋でひっそりと暮らそうと仰いましたな。けれども、我らの行く道は、叶いませなんだ……。もう我らは、罪を犯してしまっておりまする」

時護は答えられずに、ただ奈阿姫の艶やかな黒髪を撫でていただけだった。

「食べ物も無い……そして村里に行けば、もうお触れが出ている……そして切り通しは通れない。我らは、この鎌倉で朽ちるのみのじゃな。口惜しい。あなたを護れなくて、この時護、一生の後悔じや」

「あなた様を、切腹にだけはさせたくありません」

と奈阿姫はキツパリと言った。「だから、この枇杷の葉で、我ら息絶えましょう」

そう言う奈阿姫の手元には、一枚の枇杷の葉があった。

「心中は怖くない。されど、そなたの苦しむ様を見るのは、辛うござる」

「では、時護様がお先に。わたしは後で飲みます」

「わたしの後か……」

「この千代が嘘をつくと思いますか!？」と奈阿姫は憤怒に駆ら

れて叫んだ。

「そんなことは致しませぬ！」

「そなたを信用していないのではない。赦せ、千代」

「では、やっぱりご一緒に」と奈阿姫は氣を取り直して言う、や
っと少しだけ微笑んだ。

「でもその前に、もう一度千代はあなた様に抱かれない……」

「それは、わたしとて同じことじゃ」と、濡れた着物を乾かしてい
る為、ほとんど半裸の時護は同意した。

二人とも、もうそれ程余力は残っていなかった。けれども、愛を
貪る力だけは不思議とわいてくるのは、まだ若い肉体のせいなのか
？ 奈阿姫と時護は、囲炉裏端に倒れ伏した。

「このまま、死ぬるとよろしいのに」

と奈阿姫は呟いた。そして、ひととき時護を抱く。

「道行みちゆきのこと、千代はもう後悔致しませぬ」

「ことが終われば、枇杷の葉を潰すまでじゃな」

「それで死ぬるのならば」

「家臣達に捕まって死ぬるのだけは嫌じゃ、惨めな態を曝したくは
ない」

「そんなことはありません。あなた様は、ご立派でしたもの」

二人は一体となって、その場に崩れ折れた。

翌朝、最後の快樂の果て、早朝から奈阿姫は枇杷の葉を石ですり
潰し始めた。辛うじて残っていた欠けた茶碗にその汁を絞り出し、
そして井戸の水を注ぐ。時護はじっと居住まいを正したままで待つ
ていた。

「さあ、できました」

と言いつつ、奈阿姫が茶碗を掲げて、部屋に入ってきた。

「二人で飲みましょう」

「果たしてこれで死ぬるのかな？」

「そのように祈願致します。千代は時護様とご一緒ならば、何も怖くはありませんゆえ」

茶碗には、少しどろどろした緑色の液が入っていたが、それで本当に死ねるのか二人には分からなかった。けれども、これ以上生き続けることは、もはや叶わないことなのだ。

「さあ！」と、威勢よく奈阿姫が促すと、時護も又その茶碗を手にした。

その時だ。

「時護殿！」という叫び声が直ぐ近くでしたのは。

「え！？」と奈阿姫がすくむと、茶碗が手から転げ落ちる。「誰なのですか？」

「弥太郎だ」と時護が静かに答えた。

「我らは、共に逝くことも出来ないようじゃ……」

時護が無念そうに呟くと同時に、弥太郎と偵治、そして嘉幸の三人が、バタバタと室内に乱入した。

「時護殿！ 心苦しいが、我らのお縄になって下され！」

弥太郎の声が響き、奈阿姫は悲鳴を挙げたのだった。

〔6〕

〔6〕

時護は不思議と、平安な気分になっていた。目の前に血相を変えた家来達が決死の眼差しで、そして太刀を構えているというのに、この気持ちはい体何だろう？ 恐らく、本当は早く捕まりたかった、見つけて欲しかった、そして奈阿姫を道連れにはしたくなかったという安堵感なのだろうか。

けれども、一方では時護は侍の心を捨ててはいない。そうそう簡単に捕まるなど、武士としての恥だと感じる自分が居る。

「時護様！」と悲鳴をあげたかのような奈阿姫を静かに制すと、すつくと立ち上がった。気丈に振舞っているようでも、その如何にも病におかされている様な有様は、かつての凛々しい時護を知っている家来達には衝撃だった。

けれども、その眼差しだけは鋭く、相手を射る様だ。

「わたしは奈阿姫を誘拐した」と時護は言った。「けれども、色香に迷ったのじゃ。武士にあるまじき行いをわたしは姫にしてみました」

「いいえ、違います！」

「黙れ、姫！」と時護は奈阿姫を叱責する。

「あの禅寺に火を放ったのもわたしじゃ。そして姫の手を無理やりに取り、逃げてしまったのじゃ。初めはそなたらに引き渡すつもりだった。が、途中で気が変わっての。」

目の前に美しき獲物があれば、男子たるもの頂かないはずが無いではないか」

「違うのです！ それは……」

奈阿姫は瞬時に悟った。時護は全ての罪を被るつもりだと。自分

の過ちも、そして杉丸の放火の罪も。

「だが、そちらに簡単に捕まる森時護ではない！ そちらも武士として恥ずかしくなければ、わたしに太刀を与えよ！」

明らかに衰弱しているのは目に見えているというのに、その時護の気迫は凄まじかった。弥太郎は、自分の持つもう一棹の太刀を放った。

「時護殿！ それを持たれよ！」

「分った」と時護は答えると、その太刀を取ると、素早い動きで外に出た。裸足だが、剣の使い手である時護は、刀を取ると別人のような構えようだ。

「弥太郎！ 真剣勝負じゃ。わたしを捕まえたくば、本気になれ！ もう主従は関係ない！」

燐とした時護の声が森に木霊し、二人の若侍は相對峙した。あとの二人はゴクリと唾を飲み込みながら、二人の勝負を見守っている。奈阿姫だけは、土間に降りると、気も狂わんばかりの形相になって時護を見つめていた。もう一人、別の時護が居るように感じるのはなぜなのか。時護は睦みごとでは甘い囁きを返す男だが、今のこの時護はまさしく徳川の侍に他ならない。

どちらの時護も奈阿姫にとっては、愛しい人に違いないが、けれども今この瞬間だけは、誇らしい気になった。己の好いた男は、本物の“男”^{おのこ}だと。

けれども奈阿姫のこの考えも、一瞬後には、二人の火花を散らす勝負で吹き飛んだ。

弥太郎は、この一見恋に狂ってしまったように見えた時護も、侍の魂を失ったわけではないのを痛切に感じた。うっかりすると、自分も怪我をする……いや、命を落とすかも知れない。そういう気迫が、時護の全身から漂っていたからだ。油断は断じて出来ない。

二人は付かず離れずの距離で、右回りに廻った。子供の頃から習

つていた剣の手ほどき通りだ。そしていつも勝つのは時護だった。
「危ない……弥太郎は切られるぞ」

と偵治が嘉幸に耳打ちした。「時護様は本氣のご様子だ」

「どこまで、あの姫を庇われる気なのだろうか」

と日頃無口な嘉幸までもが、その危機を感じ取った。ちょうど二人の剣が、空中で火花を散らして交わった時だ。

「わっ」と偵治が叫んだ。弥太郎がぐらりと左に倒れそうになる。けれども何とか持ち直すと、再び刀を構えた。

「弥太郎、随分巧くなったな」

「時護様こそ、その腕、未だに衰えをしりませぬな」

「このようになったとは言え、まだわたしにも武士の誇りと言うものがあるのだ」

と時護が不気味に言った。

「このままでは、弥太郎が……」と偵治は気が気では無い。

その時、堪らず奈阿姫があばら家から駆け出して来た。その隙をつかない嘉幸ではない。彼はぐいっと奈阿姫の腕を掴むと、後ろから首を締め付ける。

「と、時護、さま……」

奈阿姫のか細い声で、時護はハツとして振り向くと、その瞬間偵治は時護をみね打ちにした。刃は立てないものの、時護の肩にそれが当たり、時護はがっくりと跪く。

「ああっ！」という悲痛な叫びが奈阿姫から漏れた。

待機していた偵治が時護を羽交い絞めにして、後ろから縄を打った。万事休すだ。奈阿姫は、身悶えしながら目を瞑る。

「時護様……なにゆえ……」

「ならぬぞ！ 姫をお縄にするのは！ 姫はわたしに誘拐されただけのこと。わたしに辱めを受けただけの女人なのだ！ どうか、寺に返してやれ！ 頼む！」

時護の絶叫があたりに響いた。

「時護様……分り申した。相承りましてございます。ご安心召されよ。姫は、無傷にて寺にお返し致します」と弥太郎が時護に言い掛けると、

「いや~~~~~っ！」と奈阿姫は声をあげた。

「いやです！ わたしが悪いのです。わたし達は、永久とわにご一緒のはず。そう約束なされたではないですか！」

「姫君……さらばでございます」

静かな時護の声がした。

「許して下さい……千代殿」

第六章 お沙汰〔1〕

〔1〕

奈阿姫は時護と引き裂かれ、偵治によって東慶寺に引き渡された。その道中、姫はひっきりなしにすすり泣くばかりで、まともな受け答えすらできず、女に疎い偵治はおろおろしていたが、けれども姫が逃げる素振りはおろおろ全く感じられなかった。

ほとんど抱きかかえられるように、北鎌倉に建つ東慶寺にやつと到着した時には、ほっとしたものだ。

秀方尼は非常に喜び、姫を迎えたが、奈阿姫はただ一途に黙り込んだまま、奥に引つ込んだ。そして以来、部屋から一步も出て来ず、絶えず泣いていると言う。

「これはこれは！　ようやつと姫君を見つけて下さり、まことにありがたく存じます。して、相手方の森殿は？」と秀法尼が、別室でにこやかに偵治を出迎えた。けれども、

「時護様はご乱心の様子にてございます」と、偵治は苦しげに弁明する。

「ご乱心？」

「姫を奪いに報国寺に入ったはいいいものの、その姫に惑乱され、ついお手をつかれてしまわれて……」

「なんと！」と秀法尼は先ほどとは打って変って、眉間に皺を寄せた。

「では……時護殿は、姫を？」

「自分のものになさった由」

「……！」

秀法尼は絶句。

「つまり……姫はもう、男を知った身とな？」

「はい、左様で。まことに心苦しいのですが……時護様と
あるうお方が、こうまで狂ってしまわれたのは、やはりご乱心かと
……」

秀法尼は偵治の弁明を冷ややかに聞いた。

「卑しくも千姫様のご養女であらせられるお方を、手籠めになさる
とは！ 森家も落ちたもののよの」

「済みませぬ！」

と突然偵治は両手を付くと、這い蹲った。

「しかるに、主君にその気は無かったと思いまする」

「では何か。姫がその気にさせたと仰るつもりか！」

秀法尼は怒りに駆られて、睨みつけた。

「そのような墮落した姫君に、我ら育てたつもりはござらぬ！」

「はい！ 分かっております。これもひとえに、主君森時護の乱心
ゆえ……」

偵治はもうしどろもどろだ。

「で、森殿は今どちらへ？」

「鎌倉の沙汰所にて、ご尋問に合われておられまする」

「さぞ、お苦しみになられるがよい」と、秀法尼は尼とは思えぬ冷
たい言葉を返した。

「住持になられる生娘の姫君を穢されたのじゃからな」

偵治は唇を強く噛んだ。穢された、犯されたと言うがそれは違う
という確信が確かにあったのだ。心の中では、むしろ奈阿姫が、生
来生真面目な時護を誘惑したのではないか……そう邪推してもいた
けれども、人々はそうは考えまい。出奔した世間知らずの生娘の
奈阿姫を手籠めにしたのは、やはり男子である時護だと誰でもがそ
う思うに違いない。

偵治は、悔し涙を堪えると、

「ははっ、まことに相済みませぬ」とひたすら頭を下げることしか

出来なかった。

その頃、灰色の囚人姿の時護は鎌倉の沙汰所で、奉行代理の梨本なしも貴膳ときぜんという者から、問い詰められていた。高い身分の者だというので、端には医師も座って居る。けれども、時護の表情は最初の頃と同じように無機的で、声も何ら変わらない。

「それではその方、徳川奈阿姫を追って報国寺に侵入したまでは良かったが、よからぬ邪な気持ちを抱いて、無垢な姫を手籠めにしたというのか」

と、問い詰める貴膳の言葉に、

「はい、左様でございます」と時護は答える。もう何回目かの問いかけだった。

梨本貴膳は、目の前に毅然として正座している、このうら若き青年を救いたいという気持ちが強かった。けれども何度問うても、答えは一つ。時護は、自分が嫌がる奈阿姫を手籠めにした上に、強引に連れ去ったというばかりだ。その上、報国寺であつた小火よほも、自分が火をつけたと言い張るのだった。

時護の怖れを見せないしっかりした言葉は、逆に嘘っぽく響き、貴膳は時護の虚言を見抜いていた。その上、奉行代理として、貴膳は不正な取調べをすることは好まない人物だった。

けれども、当の本人がそう言い張るのだから、容赦するわけには行かない。

「もしも、そなたが奈阿姫殿と相思相愛なれば、姫にもお咎めが有ろう。さすれば、そなたの罪も、軽くなるやも知れぬぞ。家光様に頼み申上げ、死罪ではなく遠島になさるかも……」

「いえ！ 姫に罪は一切ございません」と時護は、きっぱりと言った。その顔は、蒼白で、元々背中の傷が治っていない上に、熱があるやつれた姿。けれども、そのきりりとした面立ちは相変わらずで、若い女人である奈阿姫が時護を慕うようになったとしても、その場

に居る者達は少しもおかしくは無い気がするのだ。むしろ、彼らは時護に同情すらしていたかもしれない。

けれども、本来捕らえるべき姫と出奔したのは事実で、それが例え邪な肉欲よこしまであろうと、反対に相思相愛であろうと、その罪に軽減は無いのだ。その上、奈阿姫は本来は、住持となるべき、男子禁制の女人である。

「ところで森殿」と貴膳は言い始めた。

「たったそなただけで、事を進めたとは信じ難いのじゃが……。そなたと誰かが共謀したのではないのか？　もしくは、そなたに協力した者が、側近に居はせぬか？　わたしは、そう思うのだが」

「えー？」と時護は顔を挙げた。まさかそのような疑いが掛かっているとは思わなかったからだ。己れの家来達にも危険が及んでいるとは。

「梨本様。これはわたし一人でやったこと。わたし一存の行為なのでございます」

「さようか……。されどわたしは、お上よりこの事を詮議しろと言われておるゆえな」

「そのようなこと……。そんな事実はございませぬ！」

「ならば、森殿、残念だがそなたを辛い詮議にかけねばならぬぞ」時護は真っ青になったが、やがて直ぐに居住まいを正してこう言った。

「覚悟致しております」

「それでは、部屋へ連れて行き、まず笞打むちうち？を始めよ！　森殿、そなたが苦しむのは誉れ有る武士としては、まことに耐え難し。ここで白状なされば、詮議も打ち切る所存だが」

けれども、時護はもう何一つ言葉を発しなかった。

「それでは連れて行け！」

無情な貴膳の言葉が、棘のように時護の心に突き刺さった。

〔2〕

〔2〕

「姫様、お食事にお手を付けられませぬと、お身体に障りますぞ」
奈阿姫付きの尼僧、慈孝尼がいつものように食事にほとんど手を付けていない奈阿姫に向かって、そう言い掛けた。東慶寺に戻されてからもう数日経つが、奈阿姫はほとんど食事を摂っていなかったのだ。

奈阿姫はただ一点を見つめただけで、じつと座り込み、時折その暗い眼差しを虚ろにさ迷わせ、ある時は咽^{むせ}ぶように泣き続けていた。
「姫様……」と慈孝尼は困りきって言いかける。

「もう過ぎたことでございます。さぞやお辛いことがありましたにせよ、み仏はあなた様を又再びここへ戻して下さいました。ありがたいことでございます。ですから……」

「慈孝様……わたしは……」

そこまで切れ切れに言うと、奈阿姫は再び黙り込んだ。ここに戻って以来、奈阿姫は言葉を発するのさえ、かなり困難になっていたのだ。何か告げたいのだが、言葉が口から出て来ない。心の奥で溜まっている物が、どこかで痞^{つか}えたようになり、文章にはならないもどかしさが、常にあった。そしてそれは、慈孝尼にも分っていることだった。

「何でございましょうぞ。何なりと、仰って下さいませ、姫様」
にじり寄る慈孝尼が如何に心配しているか分っていたのだが、傷心の奈阿姫には、それを問い質すすら出来ない。

「わたしは……」

そこまで言うと、再びどつと悲哀が押し寄せて来て、奈阿姫の心を塞いでしまう。そして涙だけが流れて行くのだ。

「と・き・も・り・様は……」

「ああ、あの方ならば、今は詮議の最中にてございますれば。姫様を誘拐され、そして操を奪った方ですから」

「ち・が・う……」

奈阿姫は必死に言葉を搾り出した。

「違う……のです……わたしは……」

そこまですしか言葉が出ず、奈阿姫は涙を飲んだ。塩辛い、そして哀しい味がする涙を。言いたくても何も言えなくなった自分が憎い。言おうとすると、胃の腑が突き上げられたように痛み、心の臓も激しく動機がする。そして倒れてしまいそんな予感に慄く自分が居た。

慈孝尼は奈阿姫の余りに辛そうな有様を見るに付け、森時護が憎いと感じた。そして溜息一つすると、ほとんど食べ残しの膳を下げるのが常だった。けれども、今日はふと何かが過ぎる。

もしや……？

「どうじゃ、姫のご様子は」

と慈孝尼が膳を運んでいると、不意に廊下の角から秀法尼が表れて問いただした。

「あ、はい。姫君におかれましては、まことにお辛そうで見えていられませぬ。余りの悲しみや衝撃に、心乱され、そして」

「そして？」

「言葉を失われておるようでございます」

「言葉を失ったとな……」

秀法尼はうゝむと唸った。そして、ちらつと、膳に残った食べ物を見た。

「食欲もござらぬ様子じゃな」

「左様でございます」

「まだ生娘でおぼこであったのじゃ。さぞ、恐ろしい目に合ったの

であろうの」

「そのことでございますが」と慈孝尼は遮った。

「何じゃ？」

「わたしは思うのですが」と一旦言葉を切って躊躇った後、思い切って慈孝尼は言い始めた。

「奈阿姫様は、本当に操を無理やり穢されたのでしょうか？」

「何を申すのじゃ！？」と秀法尼は怒りに震えた。「そなた、姫が本当にあの森殿を好いていたと申すのか？ この度のことは、姫の意向も入っていたと？」

「いえ、そのような、滅相もございませぬ」

そう否定はしたものの、やはり慈孝尼は言わざるを得なかった。

「姫様のお苦しみは、別にあるのではとそう思っただけにございます。聞くと、森殿とは昔一度だけ面識があり、そして見目麗しい美丈夫であられるとか……」

「馬鹿馬鹿しい」と秀法尼は一刀両断にふした。

「あの者は徳川の者ぞ。そして奈阿姫様は、本来は豊臣秀頼の娘なのじゃ。姫様は徳川の侍は憎いはず。それに……例えそうであったとしても、恐らくはあ奴に誑かされたのであろう。姫は本来、男を知ってはならぬ聖職の身ぞ！ 滅多なことを申すでない！」

「は、はい。申し訳ございませぬ！」

膳を持ちながら、慈孝尼は平謝りに謝った。けれども、自分の考えがあながち間違っていないことに、慈孝尼が確信したのも事実。秀法尼も恐らく薄々は分っているのだろうが、それを公にはできない身なのだろう。

「とにかく、余りに食事が進まぬとなると、薬師を呼ばねばならぬかの」

と秀法尼も弱気に呟いた。

「この秋、霜月（旧暦１１月）には姫を必ずや住持としなければならぬのじゃ」

「え？」

「そう文が来た……家光様からの、な。今度の事では、公方様はかなりお怒りのご様子。恐らく、あの森殿は助かるまい。そして……奈阿姫様をお助けするのには……必ず住持にしなければならぬのじや。そなた、分るな？」

「はい」と慈孝尼は答えた。聡明なこの尼僧には、奈阿姫が助かる為には、あくまでも犯された被害者としての娘として、そしてそれを公にせずにこの寺の住持にならなければならないのだと、そう悟ったのだった。

〔3〕（前書き）

今回、少し残酷な表現があります（物語上、仕方ないのですが）。
苦手な人は、ご注意ください。

〔3〕

〔3〕

時護は上半身裸にされ、天上から吊るされていた。そして容赦ない箠尻（ほうきじり）殴打棒の殴打が続いた。何度も気絶しては水を掛けられて意識を回復し、そして又打ち付けられると言ったお沙汰が延々と続いた。

端には、医師が座っており「そこまで」と制するまでそれは毎日の如く続き、既に時護は息も絶え絶えになっていた。頬はこけ、髪はざんばらになり、打たれた背中では元々傷を負っていたためにもつと血だらけになっていく。

けれども、時護は「自分一人で全て事を運んだのだ」と言い張っていた。

そしてある日、時護の下帯からチャリンと何かが落ちた。それは時護が下帯に忍ばせていた一文銭の残り一枚だった。余りの殴打の激しさに下帯が解けかけ、それが落ちたらしい。

「何だ、これは！？」と拷問吏が拾って嘲った。

「こんなものを、ここに潜ませていたとは！ 侍らしからぬ卑しさじゃのう」

「それは……」と激痛の中で、時護は言った。「寺で……拾ったものの……」

これが奈阿姫との駆け落ちの証拠となつては大変だ。

「もつとあるのかも知れぬ。下帯を解け」と部下に命じる拷問吏は、残忍そうに命じる。部下は「ははっ」と、すぐさま下帯を解いた。

自分の身体の何もかも曝け出されてぶら下がる時護は、もはや恥辱や人としての恥までも忘れてしまうほど、弱っていた。

「おぬし、ここをあのおぼこ姫に突き刺したのか」

と牢吏の一人が罵った。そして時護の局部を軽く箒尻で叩くと、
「どうじゃ？ あの姫との睦みごとは？ 良かったか？ 聞くところによると、大層気位の高い美しい姫君であるとか……」と言いつつ、嗤うのだった。

「憎き豊臣の女人め。さぞ、身も露わに悶えたであろうの」

それらの奈阿姫に対する嘲笑は、今の時護には恥辱よりも辛い。

「黙れ！」と思わず叫んでいた。その途端、箒尻の殴打がもっと激しく続けざまに飛んできた。暑さの余りの汗と傷みゆえの脂汗の両方が、全身から流れ落ちていく。

「黙れとは何だ！ 徳川の名折れのくせに！」

「女に狂った者に過ぎぬ奴！」

再び時護の意識は遠ざかっていく。

「今しばらく！」と医師の声がした。

「これから10日間ほどの休養が必定と思われます。このままでは死ぬるばかりかと」

「ちえっ」と拷問吏や牢吏達の舌打ちが聞こえた。

「せつかくいいところだったのにお」

天上の梁から下ろされた時護は、そのぐにやりとした蒼白な裸体を、牢の奥に運ばれて行った。そして灰色の着物を軽く身に付けさせられた上、暑く湿度の高いじめじめした土の上に転がされた。

「10日間、待っておれよ。今度は石抱きだからの」と牢吏は忌々しく言々と、ガチャリと蝶番を掛けた。時護はそのままの格好で、転がっているばかりだった。

こういう詮議がもう何度も続いている。今は文月（＝旧暦七月）なのだろうか？ もう既に時護には、月日の感覚すらない。奈阿姫と別れたあの日以来、時護の中では時は止まったままだった。そして又、時護は自分がもうそれ程持たないのを察していた。

元々膿んでいた昔の古傷が痛み、そして新たな傷口からの膿に

銀蠅がたかる。湿気た土牢の中は、気が狂うほど蒸し暑い。そして食事はほとんど食べられない……。そして絶えることの無い肉体の苦痛と、奈阿姫の面影の喪失感が時護を苛んだ。

もつとも恐ろしかったのは、徳川方が、何とかして奈阿姫を共犯者にしようとしているのでは、という疑念だった。やっと眠っている時にも、悪夢か幻影か分らない中に、礫になっている奈阿姫の姿が見えてくるのだ。

「ぎゃああああ！」と叫びながら、時護は夜中に飛び起きる時があった。額は熱で熱いものにも拘らず、身体は奇妙に寒気がし、時護は恐怖と怖気でガタガタ震えだす。医師は時折脈を取ったり、身体に膏藥をぬったりしただけで下がり、何も言わない。

時護の身体や心を蝕むものを知っていながら、ただ沈黙したままで治療とやらを行っていたまでだ。それは医師の義務でしか過ぎない。

「死ぬるのは怖くはない。苦痛のない彼岸に行きたい。だがしかし、千代殿を危険にさらしてはならぬのだ……。わたしの為に、姫を巻き込みたくは無いのじゃ……。それだけは、なんとしても」

そう思いつつ、再び時護はうつうつとした悪夢にうなされていくのだった。

そんな頃、弥太郎が何とか許されて、時護に面会に出かけることが出来た。面会と言っても、牢の格子越しなのだが、時護の余りの衰弱振りに、弥太郎は衝撃を受けたのだった。

「ああ！ 時護様」と弥太郎はすぐるように叫んだ。格子の向こうの時護は、横になったままだったが微かにこちらに視線をやると、ふつと微笑む。

「おお、弥太郎ではないか」

「時護様！ 嘆かわしや！ 何ということでしょうか。この弥太郎、悔しゅうてなりませぬ！」

弥太郎は両手を出くと、くっくつと泣き出した。

「お前には関係ないことじゃ」

「いいえ、ありまする！」と弥太郎は言い張った。

「わたしがあの時、お止めすればよかったのです！ 時護様を偽りとは言え手につけ、思わぬ深手を負わせてしまいました。あの時、辞めればよかった……報国寺の門前に時護様を置いて逃げるなど……そんな無茶なことはせずとも良かったのに！ そうまでして、豊臣の姫君を探す必要は無かったのではないか、と最近わたしは思うようになりました。」

我ら一同、何かに憑かれたようになって、必死でただ一人の女人を追っていたとは……。今となれば、笑止にございます。ましてあなた方には、何のお咎めも無いとは、余りに理不尽！ 元はと言えば、奈阿姫様も共犯では……」

「黙れ！」と、弱りきった時護から鋭い声音が発せられた。

「姫の事は、悪く言うでは無いぞ、弥太郎。わたしは後悔してはおらぬゆえな」

やつれ切った時護からそう言われ、弥太郎は改めて、時護の奈阿姫に対する深い愛情を感じたのだった。けれども又、もっと深い奈阿姫に対する憎悪を、弥太郎は抱いた。

時護様がこうなったのも……あの憎つくき豊臣の姫のせいなのじゃ！

〔4〕

〔4〕

「なに！？ あの、橘由比殿の回し者、腹心の侍女の葛城殿が参ったと言うのか！？」

部屋で静かに写経をしていた秀法尼が、キツと振り向いた。その取次ぎの若い尼は、困惑したように俯く。

「あ……はい。左様でございます。是非とも奈阿姫様にお会いしたいと申して……」

「うぬづ、あの由比殿、何を企んで居るのやら？ どうやら、奈阿姫に入れ知恵し、そして匿ったと言う噂もあるお方なのでな。ま、その証拠は結局分らずじまいじゃが……くれぐれも油断するで無いぞ」

「それでは、葛城様にはお帰り願いましょうか？」

と困りきったその尼が問うと、秀法尼はしばし瞑目した後、やっと言葉を発した。

「もしも会わせないとすれば、あの者は又何を言うやら分からぬ。何しろ、ここ鎌倉では名家であるからのう」

「では？」

「宜しかろう。葛城殿には、奈阿姫様の元にご案内召され。奈阿姫様も、幾らか気分が晴れるやも知れぬでな」

「はい！」

その尼は明るく言うと、急いで控えの間に急いだ。

控えの間では、葛城がじりじりしながら待っていた。少し前より、奈阿姫の身体がすぐれないことを聞きつけていた葛城は、橘由比に申し出ていたのだった。

「是非わたしを一度東慶寺に行かせて下さいませ。姫様のその後を

知りたいのでございます。聞けば、どうやら姫様は伏せつていらっしゃる。又ある者からの伝言では、どうやら姫様はお言葉も発せず、お食事も満足にお召し上がりになれないとか」

切に頭を下げる葛城を、由比は冷ややかに眺めていたが、やっと声を出した。

「そなたがそうしたければ、そうなさるがよい。ただし」
「は？」

「あの秀法尼には気を付けなされ。あの尼君は、このわたしを疑うておられる由。ただ姫君だけにお会い下さるが良かるう。ま、考えてみれば可哀想な姫君じゃ。わたしも匿つては見たものの、このように酷い有様になるとは思いもしなかった。

わたしはただ、徳川の一門が驚愕する様を見たかっただけ。けれども今は、奈阿姫様に幾らが同情しておる者なれば、少しでもお身体とお心を安らかにして頂きたいものなのじゃ」

「それにしても、姫様は大胆な事をなさったものですね」

と葛城は嘆息した。「まさか、あの森殿とご一緒であつたとは！」

「しかも、恋仲との噂が絶えぬの」と由比も深い溜息を付いた。

「けれども、女子の気持とは分らぬでもない。わたしはこの歳になつても、尚何かにときめく事があるのじゃ、葛城。まして、姫様はまだ若く世間知らずでおわした。あの森殿にときめいたとしてもおかしくはないぞえ」

由比の目はどこか遠くを見つめていた。

「でも……森様は、あくまでご自分の意志一つと仰つておられますような。それも、無残な拷問をお受けになつても、それしか言わないということでございます」

「あのお二人……どうやら、本物であるようじゃの」
「え？」

「本物の相思相愛の間柄という意味じゃ。お互いを、庇つておられるような気がする」

由比は呟くように言った。

今控えの間で、葛城はその時の光景を思い出していた。

かなり長く待たされた後、別の若い尼がやって来て丁寧にお辞儀をして言った。

「葛城様、秀法尼様のお許しが出た模様でございます」

「おお！　そうか、ありがたい！」

「その代わり、余り長くお話なさいませぬように。奈阿姫様におかれましては、今度のことでかなりお身体もお心も弱っておいでの様子ですので」

「分りました。わたしはただ姫様のご様子を伺いたいまでのこと。それが済めば、直ぐにでも御いとま致しますゆえ」

「それでは、こちらに」とその尼、慈孝尼は立ち上がった。

葛城はざわざわした胸を押さえながら、その尼に付いて、長い廊下を歩いて行く。広い境内には、幾つかの建物があり、坂道と共に複雑な順路を辿って行ったので、葛城には内部は余りよく分からない。

「こちらでございます。どうぞ中へ」と、とある部屋の前で、その尼は立ち止まり、手を差し出した。そこはかなり奥まった陰気な部屋に見える。

「わたしはこちらにて待機しております。どうぞ、中へお入り下さいませ」

「あ……それでは」

葛城は挨拶もそこそこに、板戸を開けた。

中はどこか暑苦しく湿っぽい。その小さな部屋の床に横たわっている、か細い姫を葛城はすぐさま見つけたのだった。薄い紗の上掛けから、青白い小さな顔が覗く。

「奈阿姫様っ！」と思わず葛城は叫んでいた。

「ああ……そなたは葛城か……」と言うかすれ声が聞こえた。

「まあ！　何とおいたわしや！　こんなにお瘦せになって」

葛城が奈阿姫の寢床ににじり寄ると、慈孝尼は静かに板戸を閉じた。

「葛城……か・つ・ら・ぎか？」

と搾り出すような声がやつと漏れるだけ。姫が言葉を半ば失ったと
いうのは本当なのだ、と葛城は得心した。

「姫様、大丈夫でございまするか？」

「ああ……わたしは……」

そこまで言うと、奈阿姫の瞳から大粒の涙が頬にこぼれ落ちた。

「時護……さま……を……助けたい……」

〔5〕

〔5〕

時護様を助けたい……その言葉によって、奈阿姫の真^{まこと}の心情と、そして二人の気持が分った葛城は、そつと奈阿姫の手を握り締めた。その手は小さく、そしてか弱く冷たいが、けれどもその心は熱く燃え、慕わしさに満ち溢れている。

本当に、奈阿姫と時護はお互いに慕い合っていたのだ。実際はあつてはならない事だったのだが、それが真実なのであろう。けれども、それは酷^{むご}い真実なのだった。

奈阿姫はまだ何か言いたそうに、口をパクパクさせた。けれども、声にはならない。

「姫様！ もう充分でございます。わたしには分かりました……何もかも、理解致しましたぞ。ですから、もう話さなくて宜しいのでございます」

ありがとう、と言うかのように、奈阿姫はこつくり頷くと、少しだけ安寧の微笑みを浮かべた。けれども、今時護が受けている残酷な有様を話すことは、葛城には到底出来ない。

「時護様は大丈夫でございますよ、姫様」

と葛城は嘘を付かざるを得なかった。実際は、小耳に挟んだ所によると、時護は打ち続く拷問の為に衰弱しており、仮に生きていたとしても切腹は免れないとの事だったからだ。よほどの奇跡でも起こらない限り、奈阿姫はもう二度と時護には会えない。そう……この世では。

「ですから姫様、あなた様も頑張つて生きねばなりません。お食事を召し上がって、少しでもお身体をおいとい下さいませ。それが時護様のご意志でもありませんようぞ」

「うん、うん」と奈阿姫は葛城の手を握り返しながら、微かに頷いた。

「お言葉も、その内に回復なされましょう。ですから、お気張り下さいまし。由比様も、大層心配しておいでにございます」

奈阿姫が少しだけ身を起こそうと身じろぎしたので、葛城は身体を支えながら起こしてあげた。それ程、奈阿姫の身体は細くなり、軽かったからだ。

「わたしは……どうすれば……？ 葛城、教えて下され」

やっとか細い言葉が姫の口から漏れ出た。そして両手で、葛城に取りすがる。

「それは……」と葛城も言葉を濁した。

「難しゅうございまするな」

「そうか」

「けれども、そうじゃ！ 千姫様に文を書かれては如何ですか？

そして、後は御仏に祈るのです。人間は自身では何も出来なくとも、御仏ならば成して下さいます。今こそ、近い将来、住持となられる姫様にはそうあって欲しいと、葛城は願う次第でございます」

「お母上に、文か……」

「はい、遠い姫路に居られますが、現將軍様の実の姉君、何とかしてくれるのかも知れませぬ。決して諦めてはなりませぬぞ、姫様！ 気をしっかり持つのでございます！ わたし自身、姫様のお幸せを毎日念じて居るのです」

これは本当だった。葛城は成さぬ仲になった奈阿姫と時護の為に、日夜祈っていたのだった。主人の橘由比の気まぐれによって、このような運命に陥った若い二人に対して、葛城は常に自責の念を抱いていたからだ。もはや葛城にとっては、徳川も豊臣も無かった。寄る辺無い身の上を由比によって拾われた葛城は、心から奈阿姫の幸福を祈願していたのだ。

その心は、奈阿姫に通じたのかも知れない。今まで堅く閉ざされ

た心の中に沈んでいた姫の気持ちが一瞬ほぐされ、そして言葉が少し出てきたのは、多分そのせいだろうか。

「ありがとうございます……葛城。そう致します。お母上は優しい方でした。大坂の時（＝大坂夏の陣）も、わたしを助けて下さりました……深く感謝していますわ……」

「少しお元気になられて、葛城は嬉しゅうございます」

葛城は頭を下げた。けれども流れ落ちそうになった涙を見せない為に、ぐっと堪えて天井を見上げる。鼻がツンとするが、葛城は泣かなかった。

それからひと時、葛城の手によって奈阿姫は食事を口に入れた。砂を噛むようだが、けれども生き続ける目的が出た今、奈阿姫は少しでも元気になりたいと思うようになった。それは自分の為ではなく、時護の為に。奈阿姫の心に、時護の助命嘆願と言う目的が出、それが姫を勇気付け始めたのだ。

そうだ！ 家光の姉、千姫が居るではないか！ けれども、今この時、千姫のかき口説きは通じるだろうか？ 家光はそれでもなくとも、女には無慈悲な所があると言われていたのだ。大坂では先代大御所（＝家康）には通じたが、今又通じるかどうか……。

家光は、実の弟の忠長を遠ざけたと言うし、キリシタンを弾圧した。まして大好きだった大御所の敵だった豊臣を憎んでいるという噂は本物であり、豊臣の残党狩りなど、その他を奈阿姫は聞いていた。

葛城は随分長い間その場に居たが、夕暮れ近くになるとその重い腰を上げた。

「それでは、姫様。わたしはこれにて」

礼儀正しく両手を突いてお辞儀をした葛城に、奈阿姫はさすがのような視線を向けた。

「葛城……」

「はい？」

「又来て……欲しいのじゃ」

奈阿姫の必死の表情を見つめながらも、葛城には自由は無い。

「はい、出来るだけ。されど、わたしには真の自由はござりませぬ。卑しくも、由比様のお側に仕えし者なれば」

「ああ、そうであつたの。けれど、時護様と別れて以来、こんなに語つたことは……久し振りなのじゃ」

「では、なるだけ来れるよう、由比様に進言致します。けれどももう一人、わたしの来るのを良いと思わぬ方が……」と言う葛城の声は、囁くように小さくなる。

「誰なのじゃ？」

「はい。こちらの……」

「秀法尼様か？」

葛城は目で「そうだ」と合図した。

「そうか……そうであるうの。無理を言つて、相済まぬ」

「いいえ！ 滅相もございまぬ。姫様のお言葉がこれだけ出ただけでも、ここにわたしが来た甲斐がございました。そう由比様には、お伝えしておきますね」

「優しいの……そなたは……」

そう呟いた奈阿姫の瞳が、再び潤んだ。そして、切ない哀願の言葉を一言。

「又来て下され」

葛城は、黙つたまま頭を下げ、それから部屋から出て行つた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7933u/>

奈阿姫さま

2011年11月24日12時56分発行